

子供の遊び
(第四部)
4

はじめに

さて、今回の「子供の遊び」(第四部)は、例えば、チョコレート遊びをはじめ、風船遊び、シャボン玉遊び、缶けり遊び、自転車乗り、遊び場、また、まりつき、ごっこ遊び、祭りと縁日、運動会、そして、動物獲り、その他、というような内容になっています。もちろん、これらは、子供の頃を思い出しながら書いてあるものであり、それゆえ、当時と今日では、それぞれ様々な違いがあるかと思うが、しかし、昔と今とを比較対照することも大事なことであり、そう言えば、そういうこともあったなあと、それぞれの年代の人たちが、それぞれに自分が子供だった頃を思い出す一つの切っ掛けになってもらえれば、それで十分であり、あとは、当時の自分と今の自分を比較対照して、自分がどのように成長してきたかを知る一つの切っ掛けになってもらえれば、それで十分ではないかと思う次第であります。

令和元年七月吉日(決定版)

如月翔悟

目次

はじめに

第四部

- 一、 チョコレート遊び
- 一、 風船遊び
- 一、 シャボン玉遊び
- 一、 缶けり遊び
- 一、 自転車乗り
- 一、 遊び場
- 一、 まりつき
- 一、 ごっこ遊び
- 一、 お手玉遊び
- 一、 祭りと縁日
- 一、 運動会
- 一、 動物獲り

※ 参考文献

子供の遊び
4

チョコレート遊び

チョコレート遊び

子供の頃にはもう誰でも一度ぐらいは楽しく遊び合ったという経験や思い出を持つこと
の多い遊びの一つとして、今日でも、いわゆる『チョコレート遊び』があるかと思う。

この遊びは、学校での授業を終えて家へと向かうその「帰り道」などで、友だちとよく
遊び合った「ジャンケン」遊びでありました。それは、この遊びに参加をしている二、三
人の人がみんなで元気に「ジャンケン、ポン！」と大きな声を出してジャンケンをし合い、
そして、そのジャンケンに勝った人の何を出して勝ったかによって、「グーで勝てば、グ
リコ」、「チョキで勝てば、チョコレート」、そして、「パーで勝てば、パイナップル」と、
お互いに大きな声を出しながら道を進んでいく楽しい遊びであり、ランドセルなどを背負
った子供たちが学校帰りの道ばたで、元気に声を上げては、道をピョンピョンと跳びはね
ながら元気に前に進んでいく楽しい遊びでした。もちろん、この「遊び」は、みんなでジ
ャンケンをした時に、相手に勝つことが何よりも大事であるが、それとともに、何を出し
て勝つかも大事であり、例えば、「グー」で勝っても、「三歩」しか前に進めないの
で、どうしても「チョキ」や「パー」を出す人が多くなるかと思う。しかし、いくら前に進め
る数が多いからと言って、「チョキ」や「パー」を出してジャンケンに負けてしまつては
何の意味もないわけで、それゆえ、この遊びで最も大事なことは、それぞれの人の「ジ
ャンケンのクセ」を早く見抜くことであり、その人が「グー、チョキ、パー」の何を出す傾向
が強いのか」を何回かやっているうちに素早く見抜くようにすれば、それだけ相手に勝て
る確率が高くなるわけである。もちろん、だからといって、必ず勝てるわけでもなく、だ
からこそ面白いとも言えるものである。そのようなことをあれこれ考慮に入れながらお互
いに楽しくジャンケンをし合つては、元気に家路へと遊び向かうものであり、その道路に
は子供たちのはずんだ声や足音などを高く響かせているものであり、子供の頃には誰でも
一度ぐらいは楽しく遊び合ったという経験や思い出があるのではないかと思う。——もち
ろん、それは、何も「帰り道」だけに限ったことではなく、例えば、いわゆる「長い石段」
のあるところでお互いジャンケンをし合い、そして、グーで勝つたならば、その人は、石
段を「グリコ」と言いながら、「三段」登るようにしても十分楽しく遊び合えるものであ
る。そのようにして親子や友だち同士などで楽しく遊び合い、そして、一番上まで早く上
がれた人が勝ちになるという「遊び方」も非常に楽しいものである。

また、学校の「帰り道」などでよく行なわれた遊びとしては、いわゆる「かばん持ち」
というのがあったかと思う。この遊びは、一緒に帰る四、五人の子供たちが全員でジ
ャンケンをし合い、そして、最後まで負け続けた人が、一人で「全員のかばん」を持つて「或
る地点」まで歩いて行くという遊び方であり、或る決められた地点までくれば、そこでま
た全員でジャンケンをし直し、そして、最後まで負け続けた人が同じように一人で「全
員のかばん」を持って、「次の地点」まで道歩いて行くというものである。もちろん、そ
の「或る地点」を何にするかは、その時々によって違って来るだろうが、例えば、子供の
頃はよく「電信柱」ごとにジャンケンをし直したように記憶しています。もちろん、道が
交差する「交差点」ごとにジャンケンをしたり、或いは、何十歩歩いたら交代という場合
もあったかと思う。——例えば、「電信柱」ごとにジャンケンをし直す場合には、自分が
負けた時に、「次の電信柱」までの距離がほかの場所より長かったりするとがっかりした

り、また、短ければ喜んだりしたものである。また、二度三度と続けてジャンケンに負けて「カバン持ち」になったら歩き、もう手や肩などが痛くなって、愚痴をこぼしながら脚を引きずるようにして歩き、一方、手ぶらの人たちは、カバンを持っていてる人のことを何だかんだとからかいながら、「帰り道」を楽しく帰ったりした経験や思い出を持つ人も意外に数多くいるのではないかと思う、また、学校からの「帰り道」では、よく田植期で水かさを増した道路の側溝や用水路などに「笹ぶね」（或いはアイスキャンディーの棒）などを浮かべて、友だちと楽しく競い合いながら家路へと向かったりしたこともあったかと思う。そのように学校の授業を終えて家へと向かう「帰り道」では、子供たちは、友だちといろいろな遊びや雑談などをしながら家へと向かうものであるが、子供の頃には誰でも一度ぐらいは、いわゆる「チョコレート遊び」や「カバン持ち」、その他などをしながら、楽しく家へと帰ったという経験や思い出を持つ人も、意外に数多くいるのではないかと思う。

*

*

ちなみに、なぜ、「グー」は、「グリコ」で、「チョコキ」は、「チョコレート」、そして、「パー」は、「パイナップル」なのかと考えた時に、それは恐らく、次のようなことではないかと思う。――まず、この「遊び」が始まった時期であるが、それは、当然のことながら、いわゆる「グリコ」が世に出てからであり、それゆえ、江崎グリコの設立「一九二九年」（昭和九年）以降でなければならず、しかも、一九三三年二月十六日の「大阪朝日新聞」のグリコの広告に「東京でハやるジャンケンのよび方」として、「グリコ、チョコレート、パイナップル」とあるので、この頃から、この「遊び」が始まったとともに、この遊びの正式名は、「グリコ、チョコレート、パイナップル」遊びであるが、少し長いので、一般には、「グリコ遊び」とか「チョコレート遊び」とか呼ばれているものである。

それでは、なぜ「グリコ」なのか？ それは恐らく、その当時の子供たちにとって、「グー」の音で始まるものは何かと考えた時に、すぐに「頭の中」に浮かんで来たものが、まさに「グリコ」であり、また、「チョコキ」の「チョコ」の音で始まるものは何かと考えた時に、すぐに「頭の中」に浮かんで来たものが、まさに「チョコレート」であり、そして、「パー」の音で始まるものは何かと考えた時に、すぐに「頭の中」に浮かんで来たものが、まさに「パイナップル」ということになるのだろう。その時、例えば、「パイロット」、「パラダイス」、「パラシュート」、その他、いろいろあったかと思うが、ただ、言葉の「音数」だけから言えば、「パイロット」や「パラダイス」であれば、「五音」であり、「グリコ」が「三音」、「チョコレート」が「六音」となり、この「三すくみ」も、可能性としてはあり得たかも知れないが、しかし、最終的には、子供たちに最も馴染み深い「食べ物」で統一したということになるのかも知れない。

*

*

風船遊び

風船遊び

今日、われわれは、実に様々な機会（場所）で多種多様な図柄や姿・形をした色彩鮮やかな「風船」とめぐり逢うことが非常に多いかと思う。例えば、様々な商店やデパートなどの店頭や室内などに装飾として飾り付けられていたり、また、その多彩な風船には会社名や商品の銘柄などが印刷されて宣伝用に使われている場合もあれば、また、子供の頃の「縁日や祭り」などの時には、よく多種多様な「お面や風車」などと並んで、多種多様な姿・形をした「風船」などが売られていたものである。

それは、水素かヘリウムの入った細長い非常に「大きな容器」などが地面に横倒しになっていて、その「大きな容器」に付いているさし口に「ゴム風船」の口をさし込むと、昔は手動（今は自動）で、シュ・シュ・シュというガスが入る烈しい音とともに、あつという間に大きく膨らんで、その「ゴム風船」の口をしつかりと縛りつけたあと、「キュ・キュ・キュ」と手慣れたしぐさで、その「ゴム風船」にほかの細長い「ゴム風船」などを色々と交差させると、例えば、タコの八ちゃん、その他の多種多様な動物の「姿・形」に素早く創り変えていくのがありました。もちろん、最初から「ゴム風船」が大きく膨らめば、そのまま動物の「姿・形」になるというのもあったかと思う。また、何かの祭りのパレードの時などには、手にカラフルな風船などを持って行進をしていく場合もあるし、また、何か大きなスポーツの「開会式」などには、よく何千何万という数多くの「風船」を同時に離して、大きな「競技場」の上空にカラフルな「風船」が色彩鮮やかに舞い上がっていく様子などを頻繁に見かけたりするものである。また、運動会の時などには、必ず、例えば、「風船割り」競争のような多種多様な競技のなかで小道具として使われることも非常に多いかと思う。また、昔はよく富山の菓売りの人が家にやって来た時には、古くは「紙風船」、そして、途中から「ゴム風船」などを置いていったものである。また、近くの駄菓子屋さんなどに行けば、大きな「風船セット」や「ガムセット」あるいは「花火セット」などが当たるような「クジ引き類」などがあり、その三角形の「クジ袋」を破いたり、また、小さく丸まった「巻きクジ」などを指先で揉み広げると、そこには「番号や文字」などが書いてあり、その「番号や文字」に該当する「賞品」がもらえるというのがありました。そのような「クジ引き」（むろん駄菓子などを買って食べる）などが楽しみで、よく手に小遣いなどを持って、近くの駄菓子屋さんなどに足繁く出かけて行ったものである。

そのように「風船」というのは、意外なほどわれわれの身近にあるものであり、その「ゴム風船」を使って、色々な「風船遊び」を行なうわけである。例えば、まだ膨らんでいない風船であれば、その風船の口に自分の口を当てて思いっきり息を吹き込んでいくわけだが、その場合、最初のうちは思いっきり息を吹き込んで、なかなか風船が大きく膨らまず、そのうちにはだんだんと疲れてきて、ハーハーとした息遣いになったりするものである。それでもやがて大きく膨らんだならば、そのゴム風船の口をしつかりとしばりつけて、その風船で遊び楽しむことになるわけだ。例えば、自分一人だけで「ゴム風船」を室内の空間にふわふわ浮かばせながら遊ぶような場合があるかと思う。これは、一見あまりにも単純過ぎてつまらなそうな遊びに見えるが、しかし、実際にやってみると、意外なほど面白いものであり、そのゆっくりと落ちて来る風船を手で軽くポンポンと上に打ち上げて、下に落とさないようにして遊んでいるうちには、いつしか夢中になってきて、あちこ

ちの家具類にぶつかって不規則に難しく落ちて来るその風船をもう必死になって拾い上げようとするものである。そのようにして、できるだけ長く下に落とさないようにと、室内の空間に風船をふわふわ浮かばせながら遊ぶことは、意外なほど楽しいものである。

また、今度は一人ではなく、二人で遊び合うのも非常に楽しいものである。それは、まず室内を何かで二分するわけだが、その場合、例えば、少し長めのひもなどを畳たたみやじゅうたんの真ん中のところに伸ばしておくだけで十分であり、それを「境界線」として左右に分かれた二人が、一つの大きな「ゴム風船」をお互いに相手側の領域に思いっきり打ち合いながら下に落とさないようにして遊び合うものである。それは、一方が相手側にゴム風船を最初は軽く手で打って入れ、そのふわふわと入って来た風船を今度はこちら側の人から相手側に思いっきり打ち返すという単純な遊びであるが、しかし、これは非常に面白い遊びなのである。――例えば、ふわふわと室内の空間に浮かんでゆっくりと落ちて来るその風船を思いっきり相手側に強く打ち返す場合もあれば、逆にフェイントをかけて拾い難いところに軽く打ち返す場合もあり、それは、その時々々の状況に応じて臨機応変に対応しながら、できるだけ相手に拾われぬような所にその大きなゴム風船を打ち返すようにするわけである。一方、相手から思いっきり打ち返されて来たその風船を何とか下に落とさないようにと巧みに拾い上げながら、今度は相手側に思いっきり打ち返すというように、それは、どこか「バレーボール」や「バトミントン」に似たような感じで非常に面白いものであり、いつしかお互い夢中になって来て、ワーワーキヤーカーと時には大きな声などを上げながら、子供たちは、楽しく遊び合っているものである。その場合、一回で返してもよく、また、二回で返してもよく、ただ、三回までに何とか「相手の領域」へと返さないと、その人の「負け」になってしまうものである。

むろん、今日の住宅事情では室内で大きな声を上げたり、また、ドタバタとした大きな音を立てたりすることは、或いはまわりの人に迷惑になるのかも知れない。そのような時には、例えば、一人で遊ぶ場合には、何があるんでも立って遊ぶ必要はないので、むしろ椅子に腰掛けたままで、或いは畳たたみやじゅうたんの上にすわった状態で、大きなゴム風船を上にもポンポンと打ち上げながら、下に落とさないようにして遊んでも、それなりに楽しめるものである。ただそのような遊び方は、意外なほど「首」が疲れるという難点があるかと思う。また、二人で遊び合う場合には、なるべく大きな声は出さないようにしたり、また、立って遊び合う時には、無制限に動き回れるのではなく、例えば、二歩とか三歩ぐらいしか動けないようなルールで遊び合えば、それほどドタバタとした大きな音にならずに済むのではないかと思う、もちろん、そのようにして遊び合わなくても、ちよつとした時間の合間にただ単になにげなく大きなゴム風船をポンポンと軽く打ち上げて空間にふわふわと浮かばせるだけでも楽しいものである。それらに加えて、例えば、誰が一番早く「ゴム風船」を膨らませることができるとかを競い合っては、何人かが同時にもう夢中になって風船を膨らませて遊び合うという遊び方もあるわけだ。また、運動会やゲーム遊びの中でも、「ゴム風船」を小道具に使用して楽しく遊び合うことも非常に多く、その時にゴム風船が突然「バーン」という大きな音で割れたりすると一瞬、非常に驚き、何事かとビツクリする場合もあれば、また、「風船割り」競争のように大きく膨らんでいるゴム風船をお互いに積極的にパン、パンと割って遊び合うゲームもあるかと思う。また、逆に大きく巨大に膨らんでいくゴム風船を割らないようにして遊び合うゲームのなかで、だんだんと

ゴム風船が大きく巨大に膨れ上がって来ると、そのゲームを行なっている人も、また、それを見ている人たちも、その巨大なゴム風船がだんだんと割れる状況に近づくに連れて、特に女の子などはもう耳を押さえたりして、ワーワーキヤーキヤーと大騒ぎしながら遊び合ったり、また、見て楽しんでいる場合も非常に多いかと思う。

また、一時期、大きなゴム風船にそれぞれ子供たちの手紙などを付けて、それを子供たちが学校の校庭や近くの公園などから数多く飛ばし、そのゴム風船が風に乗って一体どの辺まで飛んで行くのかを実験に実験してみたり、また、その手紙の付いた風船が遠く他県の地域まで飛んで行くのかを見つけた人と子供との間に交流が生まれたりすることも時々、新聞やテレビなどで見聞きすることがあったかと思う。そのように今日「ゴム風船」というのは、実に多種多彩な形で利用されていて、それゆえ、われわれの身近には意外なほどに多種多彩な図形や色彩鮮やかな「ゴム風船」に満ちているものである。——例えば、保育園や幼稚園などの幼児たちがゴム風船で楽しく遊び合っているのをはじめ、何かの祭りや催しなどの時にも、よくそこでゴム風船などをもらって、それを手に持って歩いていく姿などをよく見かけたりするものであるし、また、様々な商店やデパートなどの室内などにカラフルに飾り付けられている場合もあれば、運動会やゲーム遊びなどの時にも頻繁に使われたりするものである。もちろん、その場合、何の図柄も付いていない「赤、黄色、緑、オレンジ、青、その他」の色彩だけの風船というのが、いちばん多いかと思うが、それはともかく、最近では、色彩鮮やかなゴム風船を数多く組み合わせて創り上げる、いわゆる「バルーンアート」なども、非常に高い人気を集めているものであり、また、細長いゴム風船などを手で巧みにひねりながら素早く「犬の姿」やその他などを創り上げたりするのも非常に人気があり、そのように実にいろいろな機会（場所）で意外なほどに「ゴム風船」を目にすることが多いのも、それだけ「風船」というものがわれわれ人間にとっては、どこか「親しみ」を感じ抱かせる不思議な魅力を宿しているからでもあるのだろう。

*

*

シャボン玉遊び

シャボン玉遊び

子供たちの数多くの遊びのなかには、例えば、空中に大小多種多彩な「シャボン玉」をつくり出して遊び合う、いわゆる『シャボン玉遊び』も非常に楽しい遊びの一つとされているかと思うが、子供たちは、それぞれ思い思いの「シャボン玉」をつくり出しては、ワーキーヤーキーヤーと言いながら、楽しく遊び合っているものである。

例えば、デパートや駄菓子屋さんなどで市販されているシャボン玉液を買いもとめ、その付属の用具に液をつけて息を吹き込めば、シャボン玉は、大小多彩なものが数多く飛び出しやすく、また、ストローなどでもゆつくりと息を吹き入れていけば、一つの大きめのシャボン玉になることも多く、子供たちは思い思いのシャボン玉を作り出しては楽しく遊び合っているものである。そして、それは近くの店などから買い求めたシャボン玉液でも、また、自分でシャボン玉液を作ってみるのも楽しいことであり、そのシャボン玉液の「作り方」にも様々な方法があるかと思うが、最近では、NHKの教育テレビの『スイエンサー』などでも紹介されている「シャボン玉液」が今や主流になっているかと思う。

さて、その「材料」は、「精製水」(1リットル) + 「液体せっけん」(300ml) + 「粉末ゼラチン」(5g) + 「ガムシロップ」(10ml) + サイダー(20ml) というものであり、「液体せっけん」は、泡立ちのよい台所用の洗剤(界面活性剤三五%以上)を使用すること。そして、その「つくり方」は、「……まず、鍋に精製水(1リットル)を入れて、60度まで熱し、沸騰させない。次に、粉末ゼラチン(5g)を入れて混ぜ、40度まで温度を下げる。それから、液体せっけん、ガムシロップ、サイダーなどを入れてから(十回程度)よくかき混ぜる。そして、火を止めたら、熱くなくなるまで(一時間程度)待ち、熱くなくなったら、もう一度全体をゆつくり(泡立せずに)かき混ぜて、でき上がり」であり、でき上がれば、色々な道具類などを使って思い思いに遊び楽しむことができるわけだ。

例えば、市販のシャボン玉に付いて来る用具をはじめ、ストローの先端部分などを切り開いて面積を大きくすれば、それだけ大きめのシャボン玉ができ易くなり、また、はり金に「ひもか毛糸」などを巻き付けて、丸型や四角或いは色々な形の形にして遊び合えば、思いがけないような大小多彩なシャボン玉を作り出して楽しく遊び合えるものである。もちろん、一般には市販されているシャボン玉液とその用具とを使って遊び合うことが多く、子供たちは次から次へと液につけては外へと吹き出し、その出てきた数多くのシャボン玉は、太陽の光などを浴びて七色の美しい色彩で舞い踊りながら子供たちの笑顔やまわりの風景などを映し出しては、ふわふわと浮かんでいるものである。そのシャボン玉をあちこちに追いかけてみたり、また、大きなシャボン玉の作りっこをして楽しんだり、子供たちはわいわいがやがやとふざけたりはしやぎ合ったりしながら、子供たちの思いや夢などをのせて大小多種多彩なシャボン玉が次から次へと現われては、四方八方に飛び散って広がり、空中をふわふわと遊泳しながらいつしか消えてゆく非常に楽しい「シャボン玉遊び」である。

*

*

もちろん、その「シャボン玉」というのは、誰でもよくご存知の、いわゆる「表面張力」によって生じるものであるが、それでは、なぜ「まるい」形になるのかと言えば、それは、液体が自由の状態におかれた時には、その液体の表面では、その表面積を最小の状態にし

ようとする力が働いていて、その最小の表面積の状態こそは、まさに「球形」であるということである。それは、木の葉はの上の「水滴」などが丸くなっているのも、基本的には全く同じ理由からである。それでは、われわれ人間が住んでいる地球を初めとして、月や太陽、また、金星、火星、木星、土星、その他の天体が、なぜに「球形」になるのかと言えば、それは、いわゆる「引力（重力）」の働きによるものであり、天体の中心に向かって「引力（重力）」が働いているために（それは、「天体の中心部分」がありとあらゆる方向のものを「すべて同じ力」で引きつけているために）、その中心から「すべて等距離になるような型」になるのであり、その「中心からすべて等距離になる形」が、すなわち、「円形」という形に他ならないのである。それでは、なぜ完全な「円形」ではなく、「楕円形」になっているのかと問えば、それは、その天体が「自転」をしているからである。

つまり、「自転」をしているために「遠心力」が働いて、赤道付近が張り出したようになるのである。そして、その「自転」がより速くなれば、それだけ赤道付近がより張り出したような「円盤形」のようになり、さらに「自転」の速度が速くなれば、最後には二つに切れてしまうのだそうである。——つまり、下に引っぱる「引力」と外に飛び出していく「遠心力」とを合わせたものが、まさに「重力」であり、「重力」とは、すなわち、「引力＋遠心力」のことであり、この地球上のありとあらゆるものは、結局、すべて「重力」（引力＋遠心力）の働きを受けていることになるのである。

それでは、例えば、魚類や両生類或いは爬虫類や鳥類、その他の「タマゴ」のほとんどが「球形」（或いは「楕円形」）の形をしているのは、一体、なぜなのかと敢えて問えば、むろん厳密なこととはよくは知りませんが、それは、（恐らく）、「密度の大きい内部」の方が、「密度の低い表面付近」よりも引力（重力）がより大きいために、平均的に内部へと引かれることになり、その「平均的に内部へと引かれる」ことによって、表面が、いわゆる「球形」（或いは「楕円形」）という形になるということなのか？

例えば、魚類や両生類などは、一般的に、球形の小さい「タマゴ」を数多く産む場合が多いかと思うが、それは、数多く産むという「繁殖戦略」であり、一方、爬虫類や鳥類などは、むしろ、楕円形の大きめの「タマゴ」を数少なく産む場合が多いかと思うが、それは、数少なく産んで大事に育てるといって「繁殖戦略」であり、その場合、大きめの「タマゴ」を産む時には「球形」よりも「楕円形」の方がよりスムーズに産み出し易いからなのだろうか？ また、産んだ後、「球形」だと動き易い（転がら易い）が、一方、「楕円形」の方だとより動き難い安定した形になるからなのだろうか？ それとも、何かほかの理由がまだ色々いろいろとあるということなのだろうか？ これらの問題は、（学問上でも）、未だ難しい問題の一つになっているのである。……

ところで、その「球形」（或いは「楕円形」）という形は、表面積のより小さいそれだけ外部からの圧力をより受けにくい安定した「形」ということになるのだろうか。そういうことをあれこれ考慮に入れて考えてみると、いわゆる「球形」（或いはそれに近い形）というものこそは、この世に無数に存在する「形」のなかでも、最も安定した最も完全無欠に近い、まさに最究極の「形」そのものということになるのかも知れない。

*

*

それはともかく、子供たちは想い思いに大小様々なシャボン玉を空中に作り出しては、それぞれ楽しく遊び合っているものである。一方、実に多種多様な「シャボン玉」を作り

出して楽しむ方法もあり、それは、よくテレビの番組にも「シャボン玉づくりの名人」などが登場して、実に多種多様な「シャボン玉の妙技」を見せてくれるものであるが、例えば、一つのシャボン玉の中に幾つかのシャボン玉をつくるのを初めとして、シャボン玉の中に煙草のけむりを入れたり、また、母体のシャボン玉に幾つかの小さなシャボン玉をつけて、シャボン玉のメリーゴーランドをつくり、それに息を吹きかけてくるくと回してみたり、さらに、立っている人間をすっぽりと大きなシャボン玉で覆い包み、そのシャボン玉をアーチ型に伸ばしていき、もう一方に立っている人間も同じようにシャボン玉で覆い包むようにしたり、また、両手にシャボン玉液をつけて息を吹き込んだり、次から次へと連続して大小様々なシャボン玉を作り出したり、その他、様々な形の「道具類」にシャボン玉液をつけてから空中で振り出して、実に大小多種多様な「シャボン玉」を空間に作り出しているのを、テレビの映像などで見かけたりすることもあるかと思う。また、近くのおもちゃ（玩具）店やデパートのおもちゃコーナーなどに行けば、シャボン玉が自然に数多く作られるシャボン玉の出るおもちゃや類なども幾つかあるのではないかと思う。

そして、その「シャボン玉」をよくよく丁寧に見てみると、そのシャボン玉の表面にはまわりの風景が鮮やかに映し出されているとともに、太陽の光などを浴びてまるで「水晶玉」のように実に美しくかつ色彩鮮やかに光り輝いているものであり、それを子供たちは手で追いかけてたりして楽しく遊んでいるものである。その他にも、泡立ちのよい石けんや台所用の洗剤などを手でさわっていると自然とシャボン玉ができたりするものであるし、また、自分でシャボン玉液を作り出すのも極めて簡単なことであり、それは、前述のところをぜひ読んでもらいたいと思うが、そのように「シャボン玉」というのは、非常に簡単にできてかつ楽しい遊びであり、それゆえ、子供の頃には誰でも一度は遊んだことのある、楽しい夢の膨らむ遊びの一つになるのではないかと思う。

*

*

缶
けり
遊
び

缶けり遊び

子供たちが戸外で思いっきり楽しく遊び合う数多くの遊びのなかでも、例えば、学校の友だちや近所の子供たちが数多くと集まった時に、よく子供たちが好んで行なう遊びの一つとして、子供の頃は、いわゆる『缶けり』遊びが高い人気を集めていたかと思う。

この「遊び」は、まず、最初に地面に小さな「円」をひとつ描いて、その中にどこからか見つけてきた「空き缶」を一つ逆さまにして置くことになるが、それから集まった子供たちみんなでジャンケンをし合い、そして、最後まで負け続けた人が最初の「鬼」になるとともに、隠れる側の人たちの誰か一人が、地面にすでに置いてある「缶」を思いっきり蹴るところから遊びが始まり、鬼は、その蹴られた缶を素早く拾って来ては、それを小さな円の中に置き、そして、決められた数を数え終えてから、いよいよ隠れている人たちを探しに行くことになるかと思う。——一方、隠れる側の人たちは、「缶」が思いっきり蹴られたその時から、それぞれ思い思いの場所に素早く行って身を隠すことになるが、やがて、鬼は隠れている人たちを見つけに缶のある場所から離れて、隠れていそうな場所に近づいて行くわけだが、その時に、若しも隠れている人を見つけたならば、すぐに「誰々ちゃん、見つけ！」などとその人の名前を大きな声で叫んでは、缶のある場所に戻って来て、片足でその缶を踏めば、それで一人見つけたことになり、また、隠れている人たちを見つけて行くというようなことを何度も繰り返すことになるかと思う。

一方、隠れている人たちは、できるだけ自分が誰であるか分からないように帽子で顔を隠したり、服を取り替えて姿を変えたり、また、数人が様々な方向から同時に出て行って一人が缶を蹴ったり、或いは、一方へと鬼を引きつけておいて、片方ではそのすきに素早く出て行って缶を思いっきり蹴ったりと、また、すでに見つかっている人陰に隠れて缶のある方向にそうと近づいて行き、そして、至近距離から勢いよく飛び出しては、鬼と競争するような感じで缶の置いてある所まで走って行く場合もあるかと思う。その場合、もし鬼が相手の名前を大声で叫びながら相手よりも先に片足で缶を踏めば、それで一人見つけたことになるが、その時に、その缶が横倒しになってしまった場合には、どうするかと言えば、一つは、鬼は、素早くその缶を立て直し、それからもう一度缶を踏めば、それでよいとする場合と、もう一つは、缶が横倒しになってしまった場合には、必ず鬼は最初からやり直しになり、今まで見つかっていた人たちもみんなもう一度隠れることができるという場合とがあるかと思うが、そのどちらの「ルール」で遊び合うかは、その時々を決めたルールに従って遊び合えば、それでよいものである。また、「鬼」になった人がなかなか全員を見つけないことができず、何度も繰り返し返して鬼になってしまいうことも多いので、一人の人が続けて何回か（例えば三回なら三回）鬼をやったならば、その次の「鬼」は、その三回目の時に最初に見つかった人が鬼になるようにしたり、また、何人もの人が一緒にくっついて出て行ってはいけないようなルールにしたりして、できるだけその「缶けり」遊びが楽しくなるような「工夫や調整」などをするようになるかと思う。

さて、そのようにして楽しく遊び合っているうちに、もし隠れている人たちの誰か一人が運よく缶を思いっきり蹴ることができれば、今まで見つかっていた人たちは、再び、隠れることができるとともに、一方の鬼は、蹴られた缶を拾ってきては、再び、小さな円の

中に置き、決められた数を数えては、最初からやり直すことになる。それゆえ、鬼としてはあまり缶のある場所から遠く離れないように、また、すぐに戻れるくらいの距離のところで隠れている人たちを見つけに出かけたり、と、子供たちはその時々に応じてお互いに様々な考えをめぐらしながら遊び合っているものであり、やがて隠れている人たちが全員見つけたところで、今度は最初に見つけた人が鬼になるというルールで行なわれ、子供たちは、時間の経過も忘れてもう夢中になって楽しく遊び合っていたものである。

* *
それでは、その「缶けり」遊びは、いつ頃から子供たちの間で遊ばれるようになったのだろうか？ もちろん、厳密なことは何も知りませんが、しかし、「缶けり」遊びをするためには、どうしても「空き缶」がなければ成り立たない遊びであり、それゆえ、日本に最初のかん詰め会社が出来た明治十年以降になるかと思う。そして、戦後は、終戦後の廃墟のなかで、アメリカの駐留軍の人たちがかん詰を食べた後に、あちこちの場所に捨てられていた、その「空き缶」を使って、日本の子供たちが遊び始めるようになったことである。それでは、なぜ子供たちは「缶けり」遊びが好きなのだろうか？ また、その「缶けり」遊びの「面白さ」というのは、一体、どこにあるのかと問えば、それは、もう誰でも経験があるかと思うが、空き缶を思いっきり足で蹴ることは、意外なほど「気持ちのいい」ものであり、その空き缶がカーンカーンと大きな音を立てながら転がっていく時には、一瞬、「ストレス」が解消されたようなスカツとした気持ちにもなるものである。つまり、生理的に非常に気持ちがいいということが、その理由の一つになるかと思う。それは、足でボールを思いっきり蹴った時と同じような「爽快感」があり、しかも、「缶けり」遊びというゲームのなかで、相手（鬼）の固いダイヘンスを破って、思いっきり缶を蹴ることができた時には、どこか「サッカー」の試合で相手の固いダイヘンスを破って、思いっきりシュートをして得点できた時にも似た、遂に「やった！」というような「爽快感」と「気持ちのよさ」などがあるからということにもなるのだろう。

もちろん、その「缶けり」遊びというのは、いわゆる「かくれんぼ」遊びを基として生まれて来たものであり、それゆえ、鬼から身を隠すという点では、全く同じ「遊び方」ではあるが、ただ勢いよく飛び出しては、鬼と競争し合うような感じで思いっきり缶を蹴ろうとする活発さは、「かくれんぼ」遊びにはそれほどはなく、それは、むしろ相手を追ったり相手に追いかけられたりして活発に動きまわる「鬼ごっこ」遊びにも似たところがあリ、それゆえ、「缶けり」遊びというのは、いわば「かくれんぼ」遊びの面白さと「鬼ごっこ」遊びの活発さなどがドッキングしたようなものであり、それゆえ、昔から子供たちには相変わらず好んで遊ばれている理由の一つになるのだろう。そのように学校の友だちや近所の子供たちが数多く集まった時などに子供たちが好んで遊び合う遊びとして、昔からずっと高い人気を集めている「缶けり」遊びになるかと思う。

*

*

自転車乗り

自転車乗り

子供たちが最初に乗りまわす乗り物としては、もちろん、「三輪車」があるでしょうが、その後あとに続くものとしては、やはり何と言っても『自転車乗り』遊びがあるかと思う。

例えば、まだ小さな幼児たちは、ふつう好んで「三輪車」に乗ったりするものであるが、それでは、どうしてそのようなものに乗りたいがるのだろうか、よくよく考えてみると、それは、やはりわれわれ人間というのは、自分の二本足で大地を歩くことのほかに、いろいろなものに乗って動くことが、本質的に好きなのかも知れない。それは、例えば、まだ小さな幼児たちが親によく「おんぶして！」などとねだったり、また、親に四つんばの馬になってもらって、その上に乗って遊んだりしたがるものだが、それは、サルやチンパンジー、その他にも共通した動物としての「本能的な習性」の一つなのかも知れない。そして、われわれ人間は、好んで動物の上などに乗りたがるものだが、それはなぜかと敢えて問えば、それは、やはりそのようなものに乗って動くことが本質的に好きなのと同時に、そのような動物を自分の思い通りに操り動かすことが、知的な動物である人間にとつては、一種の快感（或いは優越感）にも通じるものであり、しかも自分の思い通りに動物を動かすことによつて、人間の能力を遙かに超えた能力を引き出すことにもなるからである。

例えば、馬に乗ることは、その馬に乗ること自体が楽しかったり、楽であったりするとともに、その馬を自分の思い通りに操り動かすことによつて、一種の快感（或いは優越感）を得ることにもなり、しかも、馬を自分の思い通りに動かすことによつて、われわれ人間の走力よりも遙かに速く走ることができ得るわけである。それは、大きな象の上などに乗りたがるのも、そのような動物の上に乗ることによつて自分自身が楽しかったり、楽であったりすると同時に、そのような象を自分の思い通りに操り動かすことによつて、一種の快感（或いは優越感）を得ることにもなり、しかもその大きな象を自分の思い通りに動かすことによつて、われわれ人間の力よりも遙かに大きな力で物を運んだりすることもでき得るからである。——それは、例えば、一輪車、自転車、オートバイ、自動車、鉄道、船舶、そして、飛行機、その他、そのような「乗り物」にもすべて共通したものではないかと思う、すなわち、われわれ人間にとつてそのような乗り物に乗ること自体が、自分自身にとつて楽しいことであつたり、楽であつたりすると同時に、そのような乗り物を自分の思い通りに動かすことができることは、知的な動物である人間にとつては、一種の快感（或いは優越感）が得られるものでもあり、しかも、その「乗り物」を自分の思い通りに操縦し動かすことによつて、まさに陸海空を「自由自在に動き回れる」とともに、より速く動いては、より早く目的地に辿りつけるという最大の「利点」もあるからである。

さて、ふつう幼児の頃から、多くの場合、子供たちは親にねだつて補助輪の付いた子供用の自転車などを買ってもらうのではないだろうか。そして、その買ってもらつた真新しい補助輪の付いた子供用の自転車を、初めは誰かにうしろを持ってもらつて、ふらふらしながら乗り始めるわけだが、最初のうちは、誰でも思うようにバランスが取れず、ふらふらと一方に傾いては、身をよじつたまま動けなくなつたり、また、よく何かの上などに補助輪が乗つかったり、また、傾斜や穴ぼこなどのある路上などでは、自転車が大きく傾いて倒れてしまい、時には手や脚にすり傷やけがなどを負つたりすることもあるかと思う。

それでは、その「自転車」の乗り方は、一体、どうしたらよいのかということになるが、

その姿勢は垂直よりは少し前傾^{ぜんびん}気味にして目は前方を見るようにし、両ひじを少し曲げた感じでハンドルを持ち、リラックスした状態で乗るようにすれば、もう誰でもやがて乗れるようになるのである。そして、自転車の「想い出」としては、昔の子供たちは、よく大人の自転車にも乗ったりしたものであるが、その場合、大人の自転車は、サドルが高くペダルに足が届かないので、よく三角形のフレームの中に片脚を入れて、いわゆる「三角乗り」という乗り方で乗った経験や想い出を持つ人も意外に多いのではないかと思う。

やがて、ある程度、乗れるようになれば、今度は、一方の補助輪を外すことになるが、それでは、なぜ両方を同時に外さないのか言えば、それは、子供にもそれぞれ「乗り方」の癖があつて、例えば、ある子供はどうしても左の方に傾く癖があり、それゆえ、右の方に傾いた時にはうまく対応できても、左の方がどうしてもうまく対応できないために、その一方を残したまま練習を積み重ねることになるのである。——もちろん、昔は、補助輪などなしで、最初から親などに後ろを持つてもらつて、自転車の練習を始める場合が非常に多かったかと思うが、それは、もうどちらであれ、大体、想うように乗れるようになれば、今度は補助輪も人の手助けなどもなしで一人で乗り回すことになるが、そのようになることによつてこそ、初めて自転車に乗れるようになったということであり、やがて慣れると、今度は片手で乗り回したり、また、両手を離して乗って友だちなどに自慢したりするようになるわけである。そして、その両手を離して乗る時には、両脚を内側に寄せてフレームに付けるような感じで乗るのが「要領」(コツ)になるかと思うが、そのようにして、もう色々な「乗り方」で楽しく乗り回し、最初のうちは、あまり車の通らないようなところを、やがて、どこへでも乗りまわすようになるわけである。

例えば、友だちの家に遊びに行くような時にも、また、何か外に買い物などで出かけるような時にも、また、何か習い事や学習などに行くような時にも、その他、もうどこへ行くにも自転車を乗りまわすようになり、時には友だちとサイクリングなどに出かけたり、また、日曜日などには自転車をきれいに磨いたりしながら、自転車が乗れるようになることによつて、子供たちの「行動範囲」は、一段と広がって行くことになるのである。そして、中・高・大学生ともなれば、例えば、夏休みを利用して、友だちとどこか日本各地に遠出の「サイクリング」などに出かけたり、また、自転車で日本を縦断するような「サイクリング計画」などを立てては、それを実行したりする人もいるかと思う。もちろん、自転車は、そういうことだけではなく、いわゆる自転車の「競技大会」なども実に数多くあり、ヨーロッパなどでは「自転車競技」大会は、極めて人気の高いものであり、例えば、フランスの「ツール・ド・フランス」をはじめ、オリンピック競技や世界選手権大会での各種の「自転車競技」(例えば、タイムトライアル、スプリント、追い抜き、ポイントレース、ロードレース、その他)、また、日本でも北海道を走り抜けるロードレース(「ツール・ド・北海道」)などがあり、それらに加えて、鉄人レース(トライアスロン)における自転車もあり、その他、もう実にいろいろなものがあるかと思う。

ところで、自転車の歴史ということになると、これが意外と複雑であり、最初は、ヨーロッパ(ドイツ)であり、一八一七年、それは、木製のタイヤでできた「自転車」(ドライジーネ)であつたらしく、しかも地面を自分の脚で交互に蹴りながら前に進んでいくようなものだったそうであるが、それが今日「ホビーバイク」(つまり「ストライダー」)として新たに復活して、今やヨーロッパをはじめ、世界中の幼児たちに大変な人気となつ

ているものである。やがて、一八六一年、前輪のところにペダルの付いた自転車（ミシヨ
ー型）が登場して来るが、今日、幼児が乗っている「三輪車」とは、まさに「この型」の
名残りなのである。そして、一八七〇年頃から、その「前輪」をより大きくした非常に有
名な「オーディナリー型自転車」（つまり「だるま型自転車」）が登場してきて、盛んに
スピードを競う大会なども開催されて、大変な人気を博したが、しかし、サドルが非常に
高いために、危険性も高いことから、そのサドルの位置を低く下げて、より「安全
型自転車」（それは「後輪チェーン駆動式」で、ペダルを踏んで前に進むという自転車が
登場するが、その名前は「bicyclette」ビシクレット（意味は「二つの小輪」）であり、それは、一八七九
年、イギリスのヘンリ・ローソンによって作られ、それが、まさに今日の「bicycle」の語
源となるものである。そして、一八八八年になると、空気入りのタイヤが実用化されるの
で、この頃から、われわれが一般に考えるような「自転車」になったのではないかと思う。

そして、今日では実に多種多様な「自転車」が出揃っていて、例えば、補助輪の付いた
子供用の自転車を初めとして、学生が乗る自転車や婦人用の自転車、また、サイクリング
用の自転車もあれば、持ち運びに便利な折りたたみ式や分解式の自転車などもあるわけ
である。しかもその機能や装備なども多彩であり、例えば、何段にも切れ換え可能なギアを
はじめ、電装のストップライト、フラッシュブザー、また、荷物を入れるパニアバックや
水を入れる水筒、空気入れ、その他、多彩な装備が付いているものもあるわけだ。それに
加えて、レース用（例えば、各種の自転車競技、トライアスロン、競輪、その他）の「特
殊用途自転車」も実に多種多彩とあり、例えば、様々な自転車競技で使われるロードレー
ス用やトラック用の自転車、また、でこぼこした山道などを走り回るマウンテンバイクな
ども、今日では非常に高い人気を集めているものであり、また、クロスカンントリーレー
スなどでは、そのでこぼこした山道の険しいコースを登ったり、下ったりしながら、選手た
ちは激しく競い合っているものである。さらに、最近では、自転車に乗りながら「サッカ
ー競技」と同じように、自転車の車輪でボールを蹴っては、それをゴールに入れて競い合
う「サイクルサッカー」なども、次第にその人気を得て来ているものであり、そのように
「自転車」は、今日でも実に幅広い人気を集めているものである。

ちなみに、風の強い日などは、女性たちはスカートを抑えながら乗ったりするものであ
るが、遠い昔むかしに自転車がヨーロッパに登場した頃、当時の女性たちは、非常に長いロン
グスカートを履いていたので、自転車に乗る時にはそれが邪魔になって非常に乗りづらか
ったわけである。そこで、ブルーマーズという両膝上ひざでしぼったダブダブとした自転車用
の腰衣こしぎぬが作られることになるが、それが日本にも輸入されて、やがて女子生徒が体育の時
間などに履いていたあの「ブルマー」となるわけである。そのように「ブルマー」という
のは、もともとは女性が自転車に乗るために創られたものであったことである。そ
れはともかく、自転車というのは、もう誰でも気軽に乗り回せて、しかも自動車などが入
れないような狭い所にも自由自在に入って行けるといふ最大利点を持つとともに、ごく普
通に道路を風を切りながら軽快に走り回るだけでも、非常に気持ちのよいものである。

それらに加えて、今やヨーロッパを初めとして、世界中の幼児たちに圧倒的な人気とな
っている乗り物（自転車）としては、何と言っても、まさに「ホビーバイク」（つまり「ス
トライダー」）という幼児用の新しい自転車があり、それは、ペダルの付いていない、大
地を足で蹴って前に進むという初期型の「自転車」（ドライジーネ）の復活であるが、こ

れは、世界中の幼児たちを熱狂させている乗り物の一つであり、日本の幼児たちも、もう二、三歳の頃から乗り始めて、あつという間に乗り回せるようになり、国内で催される大小様々な「競技大会」などにも積極的に参加をしては、その速さをお互いに激しく競い合っているものである。そして、その「ホビーバイク」（つまり「ストライダー」）という幼児用の新しい自転車が自由自在に乗り回せるようになれば、それに「ペダル」を付けるだけで、そのまま本来の「自転車」としても自由自在に乗り回せるようになるという、まさに画期的な「自転車」の登場であり、それゆえ、従来のような自転車に乗れるようになるための様々な練習などは、今や全く不必要になったということである。

*

*

遊び場

遊び場

幼稚園や小学校或いは近くの公園などには色々素朴な子供の「遊具類」が揃っているかと思うが、それは、例えば、ブランコやすべり台、砂場や鉄ぼう、また、シーソーやうんてい、のぼり棒、さらには、太鼓ばしごやタイヤ類、また、ジャングルジムやグローブジャングル、その他、その「遊び方」にも、それぞれ多種多様なものがあるかと思う。

例えば、「ブランコ」遊びというのは、誰かにブランコを後ろから押してもらおうような場合もあれば、自分一人だけで座ったままこいで遊ぶような場合もあり、また、立ちこぎなどをして、より力強く、より高くへと振り上げたり、或いは、どのくらい遠くまで跳べるかを友だちと真剣に競い合ったりすることもあれば、また、時には、履いているクツなどの「飛ばしっこ」をして、友だちと楽しく遊び合ったりすることもあるかと思う。

また、「すべり台」というのは、ゆつくりとスピードを押えながらすべり下りるような場合もあれば、逆に、両手を離して早いスピードで寝そべるようにすべり下りて楽しんだり、また、何人かが一緒にくっついてワーワーと騒ぎながらすべり下りて遊び合う場合もあれば、また、すべり台を下から上まで一気に駆け上がったたりして遊んだり、と、子供たちには人気の高い遊びの一つになるのだろう。——一方、「砂場」では、子供たちは、それぞれ思い思いに様々な砂山を作ったり、穴を掘ったりして楽しく遊んでいるものであるが、子供の頃、砂山の上に棒などを立てて、その砂山の乾いた砂を順番にそうつと取り合つては、やがて砂を取り去る時に、その棒を倒してしまった人が負けになるという、いわゆる砂場での「棒倒し」（或いは「山崩し」という遊び方でも、友だちとよく遊び合つたりしたものである。また、砂場のどこかに「或る物」を隠して、それをみんなで探し出して遊び合う、いわゆる「宝探し」などをして楽しく遊び合うような場合もあれば、また、幼稚園などでは、よく「いも掘り」大会などを行なつたりすると、子供たちは、大喜びで声を上げて楽しく掘り出したりしているものである。あるいは、砂場でいわば「アリ地獄」のようなものを作つてから、近くでうろうろしているアリを何匹か捕まえては、その中に入れて、そのアリの様子などを観察したりするのも楽しいことではないかと思う。

また、近くの「鉄棒」での遊びとしては、いろいろな方法で上上がったたり、下に下りたりして遊ぶものであるが、その「上がり方」には、ふつうの上がり方のほかに、例えば、足かけ上がりや逆上がり或いは蹴上がりやけんすい逆上がりなどがあるかと思うが、その中でも、いわゆる「逆上がり」こそは、子供たちの「最大の難関」であり、思うようにできないと、それが悩みの種にもなるが、しかし、コツさえ分かれば、やがて誰でも出来るようになるかと思う。一方、上では足かけ前回りや後ろ回りはじめ、前方支持回転（前回り）や後方支持回転（後ろ回り）、鉄棒から離れて、けんすい前回りや後り回り、そして、抱え込み回り（だるま回り）や鉄棒にまたがって回転する「横回り」などもあり、さらに、地獄回りや天国回り、その他などをして遊んだり、そして、下り方としては、ふつうの前回り下りや足抜き下りのほかに、後ろ飛び下りをはじめ、前方飛び下りや踏み越し下り、さらに、こうもり振り下りやひこうき跳びなどもあり、また、地球回りや宇宙一周、それに「体操競技」では、実に多種多様な超難度の「鉄棒技」などもあるかと思う。

また、「シーソー」では、上になつたり、下になつたりして楽しく遊び合うものであるが、それは、よく父親と小さな幼児などが一緒に「シーソー」などで遊んでいる姿などを

見かけたりするものであり、この遊びの、地面に着いている「下の状態」から、一気にかなり高い状態への移動は、大人の人たちにとってはともかく、小さな幼児たちには非常にスリリングで大きな変化に感じられるのかも知れません。また、『うんてい』での遊びでは、等間隔に並んだ鉄の棒を一本一本順に渡って、最後まで渡りきる遊びであるが、それが出来るようになると、次には一本抜かして鉄の棒を渡ったり、また、行って戻るという往復などにも挑戦したり、さらには、体と足をできるだけ大きく振って、二本抜きなどにも積極的に挑戦をしたり、また、渡っている友だちの胴体などを両脚で挟んだりしながら楽しく遊び合ったり、と、様々な遊び方ができるので、子供たちには人気の高い遊具の一つになるのではないかと思う。また、『のぼり棒』では、最初のうちは手と足を使って、やっとの思いで上へと登っていくわけであるが、やがて、それが容易にできるようになれば、今度は足を使わず手だけの力でどのくらいまで登って行けるのか、まさに「自己ベスト」をめざして何度も挑戦してみるのも楽しく、また、友だちとどっちが早く上まで登れるかを競い合ったりしても非常に楽しいものである。そして、上まで登ったら今度は違った棒へと移ったりして遊んでも十分に楽しめるものである。

一方、「タイヤ遊び」にも色々なものがあり、例えば、馬跳びのようにピョンピョンと飛び越えて遊ぶのが最も一般的かと思うが、また、タイヤを転がしたり、穴の中をくぐり抜けたり、また、吊されたタイヤなどにぶら下がり、時計の振り子のように大きく左右に揺れて遊ぶような場合もあれば、また、数多くのタイヤがあちこちに散らばったり、山積みされているような場合もあり、子供たちは、それらに乗っかってそれぞれ活発に楽しく遊び合っているものである。また、雪国では、雪の上をそりやタイヤなどで滑り下りたり、また、動物園などでは、白クマやパンダ、その他の動物などもタイヤで遊んだりしているものである。一方、これは遊びではないが、スポーツ選手などの足腰を鍛えるために、校庭やグラウンドなどで長いひもの付いた大きなタイヤを一個か二個引っぱって走っている光景などをよく見かけたりするものであるし、また、タイヤは、強い衝撃などを弱めるためのクッションとしても、例えば、ゴーカート、その他、実にいろいろな所で数多く使われているものであり、そのようにタイヤは、様々な形で利用されているとともに、子供たちの遊び道具の一つとしても、高い人気を集めているものである。また、『太鼓ばしご』というのは、最初は、一つ一つ順に上の方へと、やがて四つん這いで歩くことになり、その上では腰かけたり、また、上からは、逆に、後ろ向きで四つん這いになって降りて来るような感じになるかと思うが、子供たちは、それぞれ楽しく遊び合っているものである。

また、「ジャングルジム」での遊びでは、もちろん、単に上ったり、下りたり、また、中をくぐったりしているだけでも楽しいものであるが、時には誰が一番早く中央の天へんまで登れるかを競い合ったり、また、鬼を一人決めて、友だちと「鬼ごっこ」遊びなどをして十分に楽しめるものである。ただ、その時にどうしてもあわてて上ったり、下りたり、また、中をくぐったりするために、鉄の棒によく頭などをぶついたりして、かなり痛い思いをする人も意外に数多くいるのではないかと思う。ところで、このジャングルジムは、数多くの鉄の棒の組み合わせからできているものであり、それだけ色々なところから様々な方法で、いちばん上まで登ったり、今度は全く違ったところから下りて来たり、中をくぐったりできるので、子供たちにとっては非常に楽しい遊びになるのだろう。

一方、「グローブジャングル」というのは、思いっきりぐるぐる回してから、それに飛

び乗って遊び合う遊びであるが、時には目をまわしたり、或いは、気持ちが悪くなったたりすることもあるかと思う。それは、次の『せんかいとう』の場合でも基本的には全く同じであるが、ただ、「せんかいとう」の場合には、両手でぶら下がっているだけであり、その手を離せば、それこそ「けが」をする危険性も高いので、手だけは決して離さないようにする必要があるかと思うが、この遊びの面白さは、何と言っても、ぐるぐると回ることによって、いわゆる「遠心力」がついて、自分のからだだが空間に浮かび放り出されるような「浮遊感覚」を味わうことができることにあるかと思う。ちなみに、今までの「遊び」などをより複雑で大規模にしたものが、まさに「遊園地」などでの乗り物類になるかと思う。そして、子供たちは、そういう日常ではほとんど経験できないような感覚を非常に好んでもうワーワーキャーキャーと言いながら楽しく遊び合っているわけである。

その他、幼稚園や小学校の頃には、そのような様々な「遊具類」などで友だちと楽しく遊び合ったという「経験や思い出」は、もう誰にもあるかと思う。もちろん、その他にも、例えば、いわゆる『フィールドアスレチック』のようなバラエティーに富んだ「遊び施設」なども、子供たちには極めて人気の高い遊びであり、そこで子供たちは、もう元氣よく声を上げて多種多様な「遊具類」などを巧みに使っては、思い思いに心の底から楽しく遊んでいるものである。そのように様々なブランコやすべり台などを初めとして、砂場や鉄ぼう、また、シーソーやうんてい、のぼり棒、或いは、タイヤ類や太鼓ばしご、また、ジャングルジムやグロップジャングル、さらにフィールドアスレチックなどの多彩な遊具類などは、どれもこれもみな「素朴な遊び」でありながら、子供たちの基本的な諸能力の「発達・成長」などにとっては、極めて重要かつ大事な遊びになって来るのだろう。

*

*

確かに、大人の人たちから見れば、そのような極めて素朴なあれこれの遊びなどに対しては、もうそれほどの「興味も関心」も持てないだろうと思うが、しかし、幼稚園から小学校ぐらいの子供たちにとっては、やはりどうしてもなくてはならない極めて「必要不可欠」な遊具類になるのである。それでは、なぜ、そうなのかと問えば、それは、もし、それらの様々な「遊具類」が全く存在しなかったならば、一体、どうなるかを考えてみれば、すぐに分かることである。つまり、幼稚園から小学校低学年ぐらいまでの子供たちにとつて、いわゆる「跳んだりはねたり走ったり」するような運動能力は、まだ未熟なものであるが、しかし、それ以上に遙かに未熟で極めて弱々しい部分とは言えば、それは、まさに子供たちの「腕の力」(腕の筋肉)部分なのである。そして、そのまだ極めて弱々しい「腕の力」(腕の筋肉)部分をしつかりと鍛え、育てるのに非常に役立っているのが、まさに「鉄ぼう」や「うんてい」或いは「のぼり棒」、その他などになるのである。それゆえ、もし、そういう「遊具類」がごく身近になかったならば、今日の子供たちは、何か重い物を持つたり、何かにぶらさがったりすることもあまりないので、その極めて弱々しい「腕の力」(腕の筋肉)部分をしつかりと鍛え、育てることが非常に難しいことになるのである。それゆえ、明治以降、そして、戦後、今日でも、それらのことを十分に考慮に入れて、幼稚園や小学校或いは近くの公園などには、そういう様々な「遊具類」などがひと通り揃って、そういう様々な「遊具類」などで友だちと思いきり楽しく遊び合うということの積み重ねによってこそ、知らず識らずのうちに、人間としての最も基礎的な「諸能力」(ここでは特に「腕の力」《腕の筋肉》部分)をしつかりと鍛え、育てることが可能にな

るということである。逆に言えば、それら様々な「遊具類」が全く存在しなかったならば、今日の子供たちは、一体、どこでどのようなようにして「腕の力」(腕の筋肉)部分をしっかりと鍛え、育てたらよいか困ってしまう場合も非常に多いかと思う。というのも、昔の子供たちであれば、毎日の生活の中で、例えば、山や川で思いっきり遊んだり、また、色々な家事や家業の手伝いなどによって、人間としての様々な「諸能力」(運動能力や運動神経)などは、自然と身につけることができたかと思うが、しかし、今日の子供たちは、そういうことを行なうこともかなり少なくなっている。今日ではそういうことの代わりに、子供たちの身近に様々な「遊具類」などをひと通り設けておくことが、どうしても「必要不可欠」になっているということである。

*

*

もちろん、今日では、実に様々な「スポーツ競技」などが非常に盛んになって来ているので、多くの子供たちは、当然のことながら、それらの何らかの「スポーツ競技」などに真剣に取り組むことによつて、人間としての最も「基礎的な諸能力」などをしっかりと身につけることになるかと思うが、しかし、ここで何よりも言いたいことは、それと同時に、昔からの様々な「子供の遊び」などを通じて、人間としての最も「基礎的な諸能力」などもしっかりと身につけておくことも、極めて大事なことになるということである。

例えば、様々な「鬼ごっこ」遊びや「缶けり遊び」、その他などで友達たちと思いつきり遊び合うことは、ただ単に走ったり、動きまわるだけではなく、実は、その時々状況に応じて、まさに「臨機応変」に素早く動き回ることや素早い身のこなしなどを自然と身につけることになるのである。また、「なわ跳び」などで遊び合えば、タイミングよく何度も跳んだり、はねたりするような諸能力がしっかりと身につけて来るということである。また、「すべり台」というのは、ある「高い」ところから下の方へとすべり下りるといって極めて素朴な遊びであり、それゆえ、大人の人たちから見れば、ごくつまらない遊びの一つに見えるかと思うが、しかし、小さな子供たちにとっては(実は大人の人たちにとつても全く同じことであるが)、まず、「高い」ところへと登っていくことと、その「高い」ところに立つということ自体が、極めてわくわくするような魅力的なことであり、そして、そこからの「見晴らし」(まわりの風景を新しい視点から見ること)も非常に新鮮な魅力であるとともに、その「高い」ところから一気に下へとすべり下りていく時には、何とも言えない「爽快感」が感じられるものであり、例えば、遊園地での「ジェットコースター」などは、子供たちだけではなく、若い人たちにも非常に高い人気があるが、しかし、その基本的な原理はと言えば、まさに「すべり台」をより複雑にしたようなものであり、やはり、ある「高い」ところから一気に下の方へとすべり下りていく時に感じられる何とも不思議な「恐怖感と爽快感」なのである。それは、冬のスキーやジャンプなどの場合にも、基本的には「すべり台」と全く同じような「魅力」から成り立っているのである。

*

*

話が大きく横道にそれたが、しかし、小さな子供たちは、そのような「すべり台」などで楽しく遊び合っているうちに、自然と「高い」ところに登るための最も基礎的な「諸能力」などがしっかりと身につけて来るとともに、「高い」ところにも慣れて、いわゆる「高い」ところを無闇やたらに怖がらなくなるということである。また、「ブランコ」というのも、非常に素朴な遊具であるが、しかし、ブランコを大きく振り上げることによって、

日常ではほとんど経験できないような空間にふわっと浮かび上がるような「浮遊感覚」を手軽に楽しむことができるのである。また、「鉄ぼう」や「うんてい」或いは「のぼり棒」、その他などには、次のような極めて根源的な「意味合い」もあるのである。

つまり、かつてわれわれ人間の祖先たちが樹から下りて、今日の人類へと進化をして来るその過程で、最も衰えた「肉体的諸能力」の一つは、一体、何かと問えば、それは、まさに「ぶら下がる力」と「のぼる力」なのである。そして、その「ぶらさがる力」と「のぼる力」などを楽しく遊びながら、知らず識らずのうちに、育ててくれるものが、まさにそれらの様々な「遊具類」なのである。例えば、「うんてい」という遊具類は、もちろん、子供たちの「上半身」（特に両腕の筋肉部分）を遊びを通じて自然と育てるためのものであるが、この「遊び」は、サルやチンパンジー、その他の動物たちが枝から枝へと巧みに手渡りしていく姿をほうふつと連想させるものであり、それは、われわれ人間の祖先たちがまだ樹の上で生活をして時には、まさにそのように枝から枝へと手渡りをするような行為（行動）もあつたのだろう。それゆえ、われわれ現代人でさえ、例えば、「うんてい」にぶら下がった時に全身に生じて来る感じや、また、実際に棒を一本一本渡って行く行為を行なうて行くうちには、何か全身に非常に「懐かしい」ような不思議な「想いや感じ」などに襲われるものである。それは、われわれ人間の肉体を形成している「細胞組織」（或いは「脳細胞の遺伝子の中」）に恐らく、永々と保存されて来たであろう遙か遠い大昔の「記憶」がふと甦って来るからなのだろう。それは、次の「のぼり棒」の場合でも全く同じことであり、いわゆる「登る」という行為（行動）は、われわれ現代人をして遙か遠い大昔のわれわれ人類の祖先につながる猿の「樹上生活」へとタイムスリップさせて、当時の「樹上生活」の感じを全身に甦らせてくれるような不思議な魔力があるのである。さらに、いわゆる「フィールドアスレチック」のような遊びであれば、なおさらのことであり、子供たちは、実に生き生きと活発に遊び合つては、心の底から楽しんでいるものである。それでは、なぜそれほどまでに子供たちの心身を「生き生きと」させるのだろうか？ それは、われわれ人類も、ほかの動物たちと全く同じように、かつては「自然の懐に深く抱かれて生きていた」からであり、それゆえ、われわれ人間にとって「自然の中」で遊ぶことは、そのまま遙か遠い大昔の「生まれ故郷」（ふるさと）で遊ぶような言い知れぬ「懐かしさ」を全身にふと想起させるからである。つまり、われわれ人間もまた「動物」（祖先は「猿人」）であるがゆえに、特にぶら下がったり、また、木に登ったり、或いは横倒しになっている木の上などを歩いたりするような遊びが本来的に好きなのである。

*

*

話を元に戻したいと思うが、例えば、「鉄ぼう」や「うんてい」或いは「のぼり棒」や「ジャングルジム」、その他などで楽しく遊び合うことによつて、知らず識らずのうちに、様々な「方法（恰好）」で鉄の棒にぶら下がったり、逆さまになったり、また、鉄の棒の上を歩いたり、くぐったり、或いはのぼり棒を登ったり、タイヤ類にぶら下がったり、ピョンピョンと跳び越えたりするようなことの積み重ねによつて、人間としての最も基礎的な「諸能力」（運動能力や運動神経）などが自然と身について来るとともに、そういう様々な遊びが十分にできるだけの「腕の力」や「脚の力」、或いは「平衡感覚」、その他などを確実に鍛え、育て上げること非常に役立っているということである。

例えば、いわゆる「フィールドアスレチック」などであれば、さらに大規模で複雑な様

々な「遊具類」などが数多くあるわけだから、それらをすべてやり終えるためには、人間としての様々な基礎的な「諸能力」（運動能力や体力）などが十分に備わっていなければならず、そういう遊びを通じて様々な状況に臨機応変に対応でき得るような敏速かつ柔軟な「諸能力」がしっかりと身につけて来るわけである。しかも子供たちは、様々な「遊び」を非常に楽しんで遊び合っていることも決して忘れてはならないことであり、友だちと楽しく遊び合うということは、ただ単に様々な「基礎的な諸能力」が身につくということだけでなく、実は、人間への「信頼感」なども自然と培つちかわれることになるのである。に、いろいろな人間との直接的な「関わり方」なども身を以って学ぶことになるのである。逆に言えば、子供の時期に、そういう様々な「子供の遊び」などで友だちと十分に遊んでいないと、人間への「信頼感」や人間との「関わり方」などが十分に身に付かないままに大人になってしまい、それゆえ、大人になってから様々な「人間関係」などで必要以上に悩み苦しむようになったり、また、人間への「信頼感」が十分に出来ていないために、もうちょっとしたことでも、すぐに「人間不信」や「人間嫌い」などを深めてしまう危険性すらあるということである。それゆえ、近くの山や川などでの「自然の中」で思いっきり遊んだり、また、様々な「子供の遊び」などで友だちと楽しく遊び合うということは、決してどうでもよいようなつまらないことではなく、むしろ、その人が「子供の時期」をどのようにして過ごすかは、その人の「人間形成」にとっても、それはもう測り知れないほどの大きな「有形無形の影響」を死ぬまで与え続けるものなのである。

もちろん、学校の勉強や習い事なども非常に大事なことはあるが、それとともに、様々な「子供の遊び」などで友だちと楽しく遊び合うことも、それに劣らず極めて大事なことになるのである。なぜならば、学校の勉強というのは、いわば「間接的な学習」（つまり「頭の中だけの理解」）であるのに対して、子供の遊びというのは、まさに「直接的な学習」（つまり「身を以って全身で理解する」というものであり、例えば、カエルやアメリカザリガニなどをただ「凶鑑」などを見て知っていると、実際にカエルやアメリカザリガニなどを近くの川や田んぼなどで捕つかまえて、それを手に取って観察して理解しているのでは、天地がひっくり変えるほどの違いがあるのであり、そして、「本当に知っている」というのは、後者の方であることは、敢えて言うまでもないことである。そして、子供の時期には、そのような「原体験」（直接的な「体験・経験」）というものを、できるだけ数多くしておくことが、何よりも大事なことになるのである。それは、なぜかと言えば、そういう直接的な「体験や経験」というものこそは、大人になっても極めて鮮明によく覚えているものであるのに対して、ただ単に「頭の中」で理解したり、覚えたりしたようなことは、直接的な「実感」がないために、やがて時とともにほとんど忘れ果ててしまうものなのである。その「証拠」として、幼稚園や小学校などで学んだ具体的な授業内容などは、まさに「ほとんど忘れ果てている」のに対して、幼稚園や小学校の頃に近くの山や川などで遊んだことや、様々な「子供の遊び」などで友だちと楽しく遊び合ったこと、また、どこかに旅行に行ったことなどは、非常によく覚えているものである。それは、なぜかと言えば、その大きな理由の一つとして、前者が、いわゆる「頭の中」だけの間接的な「理解」であるのに対して、後者は、身を以っての直接的な「体験・経験」（それは全身で理解している状態）だからである。それゆえ、学校の勉強のような「知的な訓練」も非常に大事なことはあるが、それとともに、できるだけ様々なことを直接的に「体

験・経験」しておくことも、非常に大事なことであり、それこそ、その人が「実感」としてしつかりと身を以って本当によく理解しているもの（つまり「経験知」）であり、そういう直接的な「体験・経験」の「積み重ね」（蓄積）こそは、やがて高度で専門的な「思考（思索）活動」などを行なう時にも、どうしても「必要不可欠」なものであり、その人の本当の「財産」（心の土壌）ともなるものである。それゆえ、学校の勉強のような「知的な訓練」だけを受けて育った人が、やがて伸び悩むのは当たり前のことであり、それは、まさに様々な「体験・経験」（いわば「心の土壌」を肥沃にする「経験知」）の積み重ねというものが欠落しているからであり、学問などでも高校生ぐらいまでは非常に優秀であっても、大学や研究活動などに本格的に入った時に、意外に伸び悩んだり、また、創造性などに欠けたりすることにもなるわけである。そのように子供の時期には、できるだけ様々なことを直接的に「体験・経験」しておくことが何より大事なことになるが、それは、昔から、「よく学び、よく遊べ」と言った極めて古めかしい「ことわざ」があるが、しかし、その極めて古めかしい「ことわざ」の中には、前述からの様々な深い「意味合い」も含まれているということである。

*

*

##55

遠い昔から受け継がれている数多くの子供の遊びのなかでも、女の子にとってはどうしても欠かすことのできない遊びの一つとして、いわゆる『まりつき』遊びがあるかと思う。

例えば、幼い女の子がよく鈴の入ったカラフルな「ゴムまり」を、かわいらしい手つきで下にはずませたり、相手と投げ合ったりして、親子で楽しく遊び合っているものである。また、幼稚園から小学校に入れば、今度は、ただ単にまりを下につくだけではなく、いろいろな「まりつき唄」などを口ずさみながら、ポンポンと下にまりをついたり、脚の下にくぐらせたりして、多種多彩な「やり方」で楽しく遊び合っているものである。——ところで、その「まりつき」の歴史ということになると、それは、意外と古くかつ複雑であり、最初は、「蹴まり」として中国から奈良時代までには、すでに日本に伝えられており、その「蹴まり」は、平安時代には公家階級の人たちを中心に大へんな隆盛をみせることになるわけである。そして、その「蹴まり」遊びというのは、円になっている人たちの一人が、まず足でまりを蹴って上に上げ、その上上がったまりをお互いに下に落とさないようにと、巧みに足で蹴り上げては、楽しく遊び合うものであり、今日でも、毎年、京都では、いわゆる「蹴まりの保存会」の人たちによって実際に行なわれているものである。

さて、その「蹴まり」遊びは、平安時代に大へんな隆盛をみて、その後も各時代を通じて行なわれていくわけだが、やがて足のかわりに手を用いて遊ぶ「手まり」遊びが生まれるようになるわけだ。ただ、その「手まり遊び」は、最初は、お手玉のように上に高く投げ上げて、それを下に落とさないように受けとめて遊ぶ遊びであったそうである。やがて、まりを下について遊ぶ「まりつき」が生まれ、そして、江戸初期の頃は、二人が向かい合って下にはずませて遊び合うようなものであり、やがて室内では女の子がひざ立ちのかっこうで遊ぶようになり、そして、安永年間（一七七一年～一七八一年）以降からは、今日のような「まりつき唄」などを口ずさみながら、女の子が遊ぶ遊びとして一般に普及するようになったということである。しかも江戸時代のまりは、いわゆる「糸まり」であり、明治十五、六年頃、初めて「ゴムまり」というものが、外国（ドイツ）から日本に輸入されて、今日のようなゴムまりの「まりつき」になったという長い歴史の変遷があるわけだが、幼稚園から小学校ぐらいの女の子が、ポンポンと下にまりをついて、脚の下にくぐらせたりして、様々な「やり方」で楽しそうにまりの音を響かせながら遊び入る「まりつき」遊びというのは、女の子にとっては、楽しい遊びの一つになるのではないかと思う。

それでは、いわゆる「まりつき唄」などを歌いながら楽しく遊び合う「まりつき」遊びの遊び方について、ごく簡単に説明してみたいと思う。まず、はずみ具合のよい「ゴムまり」をひとつ選んで、それを使って遊ぶことになるが、最初は、最も基本的な「やり方」を覚えることから始めることになるかと思う。——さて、その一番目の「やり方」であるが、それは、右手でまりを下につくと同時に、右脚を振って（その右脚の内側から右脚の外側へと）まりをくぐらせ、それを右手で受けるものである。そして、今度は、逆に「右脚の外側から右脚の内側」へとまりを下について返せば、そのまま「右手右脚くぐり」の「連続技」になる。その次の二番目の「遊び方」は、同じように右手でまりを下につくと同時に、今度は、左脚を振って（その左脚の内側から左脚の外側へと）まりをくぐらせ、それから、逆の方向、つまり、「左脚の外側から左脚の内側」へとまりを下について返せば、

そのまま「右手左脚くぐり」の「連続技」になる。そして、この「二つのやり方」を組み合わせれば、まさに「右手右脚くぐり」と「右手左脚くぐり」の連続技になるわけだ。

さて、その次の三番目の「遊び方」であるが、それは、右脚のひざを折った状態で高く上げ、その下に右手を外側から内側へと入れた状態で、まりを何回か下につくという「やり方」であり、それが「右手右ひざ下」での遊び方である。そして、その次の四番目の「遊び方」は、今度は、左脚のひざを折った状態で高く上げ、そして、その下に左手を外側から内側へと入れた状態で、まりを何回か下につくという「やり方」であり、それが「左手左ひざ下」での遊び方である。——それでは、その次の五番目の「遊び方」であるが、それは、手ではなく、足を使ってまりを下につく「遊び方」であり、右足の「つま先」でまりを下に一回ついでから右手で数回つくという遊び方である。そして、その次の六番目の「遊び方」は、今度は、左足の「つま先」でまりを下に一回ついでから右手で数回つくという遊び方であり、そのようにして遊ぶことになるが、ここまでは比較的簡単なので、誰にでも容易にできる「遊び方」になるかと思う。

*

*

それでは、その次の七番目の「遊び方」であるが、それは、少し変わっていて、女の子であれば、ふつうスカートをはいているかと思うが、その「スカートのすそ」を左手で持った状態で「まりつき」を行なうという「遊び方」である。それは、まず左手で「スカートのすそ」（それは「やや右寄りの下」のところを持ち、その左手の下に右手を入れ、その右手でまりを下につくという「遊び方」である。それが「七番目」の遊び方であり、そして、その次の八番目の「遊び方」は、同じように左手で「スカートのすそ」（それは「やや右寄りの下」のところを持ち、今度は、右手を抜いて左手の上に出して、その右手でまりを下につくという「遊び方」であり、それら二つの「遊び方」を続けて行なえば、その「連続技」になるわけである。——さて、その次の九番目の「遊び方」であるが、それは、同じように「スカートのすそ」を左手で持てば、その左手の下に「空間」ができるが、その左手の下の「空間」にまりを通すという「やり方」であり、まず、右手でまりを下につき、その上がってくるまりを抑えるようにして、そのまりを左手の下の「空間」に通して下につき、そして、その次の十番目の「遊び方」は、その下について上に上がってきたまりを、左手の下の「空間」を通して右手で受け、その受けた右手で、再び、まりを下につくという「やり方」であり、それを続けて行なえば、その連続技になるということである。

そして、その次の十一番目の「遊び方」であるが、それは、両足を少し開いた状態から、左足を一步右足の後ろに移動させながら、右手でまりを「後ろから前へと送る」という遊び方である。その次の十二番目の「遊び方」は、両足を少し開いた状態から、今度は右足を一步左足の後ろに移動させながら、右手でまりを「前から後へと送る」という遊び方であり、その二つの「遊び方」を続けて行なえば、「後ろから前、前から後ろ」への「連続技」になるわけである。これらは、すべて「右手」で行ないます。そして、その次の第十三番目の「遊び方」であるが、それは、両足を付けて立ち、それから両足揃えてポンと上にハネながら両ひざを曲げた状態で、右手にあるまりを右側から腰の下を通して左側に移し、それを右手で受けることになり、そして、今度は、その左側から右側へと同じようにまりを移せば、まさに「腰通し」の連続技になるが、これは、右手だけで行ないます。そして、

最後は、右手でまりを両脚の下に「前から後ろ」へと送り出すようにつき、それをスカートの中の後ろ」で両手でまりを取れば、それで「終了」ということになるわけである。ちなみに、右手でまりを下につけてから、自分の身をその場で素早く一まわりさせて、元の状態に戻し、また、そのまりを下につくという「遊び方」もあり、それは、右回りと左回りの、まさに「二通り」がある。また、右手でまりを下につけてから、右足を上げて左足の一本立ちになりながら、素早く両手を一回たたき、また、まりを下につくということを何回か繰り返すという「遊び方」などもある。(映像は、YOUTUBEのまりつきを参照)

*

*

さて、そのような基本的な「やり方」を覚えてから、いよいよ「まりつき唄」に合わせて、いわゆる「まりつき」をして楽しく遊び合うことになるが、それは、例えば、『まりと殿様』であったり、また、『あんたがたどっこさ』であったり、或いは、『かもめの水兵さん』であったり、その他、いろいろな「まりつき唄」で楽しく遊び合えるわけである。——例えば、『あんたがたどっこさ』であれば、「……あんたがたさどっこさ ひごさ ひごどっこさ、くまもとさ くまもとどっこさ せんばさ せんば山には たぬきがおつてさ それをりようしが、てつぼうでうつてさ、にてさ やいてさ くつてさ、それをこのはで ちよいと かくす」というように歌いながら、まさに「まりつき」をするわけだが、その場合、「一く十三」までの「遊び方」を幾つか組み合わせさせて遊ぶことになり、そのようないろいろな「遊び方」で楽しく「まりつき」をして遊ぶことができるわけである。もちろん、子供たちは、そういうことには、あまり関係なく、自分たちの好きな「やり方」でそれぞれ思い思いに遊んでいるのかも知れないが、幼い女の子にとっては、恐らく、最初に手にする「ボール」であるとともに、自分の家の中や庭先、或いは、近くの公園などで、最初に親と一緒に楽しく遊び合える「ボール遊び」の一つになるのではないかと思う。

*

*

まじっく遊び

ごっこ遊び

子供たちの数多くとある遊びの中でも、最も多種多彩バラエティーに満ち満ちた遊びとしては、恐らく、多種多彩な真似まねをして楽しく遊び合う、いわゆる『ごっこ遊び』があるかと思う。

例えば、おもちゃの刀や棒切れなどを声を上げて振り回しては、相手を斬ったり、相手に斬られたりして遊び合う、いわゆる「チャンバラごっこ」や、また、おもちゃのピストルなどを使って、バンバンとお互いに撃つたり、撃たれたふりなどをして遊び合う、いわゆる「西部劇ごっこ」などが、まず頭に浮かんで来るかと思う。そして、子供の頃には、多くの人たちがおもちゃの刀や棒切れなどを使って、映画やテレビなどで観た主人公たちの「立ち回り」などを真似た「チャンバラごっこ」などをして楽しく遊び合ったりしたものであるし、また、幼児の頃には、よくひもの付いたコルクの玉のおもちゃピストルで遊ぶのはじめ、子供の頃には「巻き玉てっぽう」や玉の出るピストルなどで、友だちや近所の子供たちと楽しく遊び合ったという経験や思い出を持つ人も、非常に数多くいるのではないかと思う。また、最近では、光線の出るピストルなどを使って、相手に当たると音が出るようになっていて、そのような「光線銃やその他」などを使って、いわば「サバイバルゲーム」などをして、楽しく遊び合っている人たちも意外に数多くいるのだろう。

一方、人気プロレスラーたちの動作や「決め技」などを巧みに真似しながら、お互いふざけ合ったり、組み合ったりして遊び合う、いわゆる「プロレスごっこ」なども非常に人気の高いものであり、例えば、昔は、よく力道山の「空手チョップ」やデストロイヤーの「四の字固め」の真似をしたり、また、その後は、ジャイアント馬場の「十六文キック」や「脳天チョップ」、或いはアントニオ猪木の「コブラツイスト」や「延髄切り」、その他、もう多彩いろいなプロレス技があったかと思う。また、相手を背中から落とす「バックドロップ」や「ブレーンバスター」、また、相手をロープなどにぶつけてその反動で戻って来た相手を腕で一撃を加える「リアアット」、さらに「卍固め」や「さそり固め」、また、様々な「関節技」や「ジャーマンスープレックス」、その他、もう実にいろいろなプロレス技があったかと思う。それは、親子や兄弟（姉妹）などとあれこれ親しくふざけ合いながら「プロレスごっこ」の真似をしたりする場合もあれば、もちろん、学校の教室や廊下などでも、前の日に観たテレビの「プロレス中継」などをあれこれ真似ては、友だちとふざけ合ったり、組み合ったりして楽しく遊び合ったりしたものである。また、旅行に出かけて着いた旅館やホテルなどでも、よく「プロレスごっこ」などをしたものである。

また、小さな子供たちに人気のある遊びとしては、多彩いろいなお店のすることや売り込みなどを真似て遊ぶ「お店屋さんごっこ」などもあるかと思う。それは、例えば、魚屋さんや八百屋さんなどの「売り込み」の真似をしたり、また、「バナナの叩き売り」の真似などをしたりするものである。それは、小学校でよく行なわれる「縁日集会」の時にも、子供たちがそれぞれいらなくなったものや自分たちで創ったものなどを持ち寄っては、幾つかの店を出し、お互いに何だかんだと騒ぎ合いながら、色々なものを売ったり、買ったりして楽しんでいたものである。また、中・高・大学、その他の学園祭の時などにも、実に多種多様な「模擬店」などが出て、お客さんをあれこれ一生懸命に呼び込んで、様々なものを売ったり、また、いろいろなものを買って食べたりすることは、子供の頃の「縁日」や「お店屋さんごっこ」などの延長線上にある非常に楽しい催しの一つになるのだろう。

一方、女の子が好んでする遊びとしては、まだ幼い女の子が母親となり、料理の支度や食事をする真似や、また、お客の接待などの「家庭生活」をいろいろと模倣して遊び合う、いわゆる「ままごと遊び」などもあるかと思う。この遊びは、おもちゃの「ままごと道具類」などを使ったり、また、昔は、砂場などで「砂や葉っぱ」その他などを使って楽しく遊び合ったりしたものであるが、この「遊び」を見ていて、非常に面白いと思うことは、遊び合っている女の子が、よく自分の母親の「日頃の言動」や夫婦の「会話」などを非常に巧みに真似て遊び合っているものであり、それゆえ、そばで自分の子供が友だちと話し合っている会話などを聞いていると、思わず「赤面」するようなことも非常に多いのではないかと思う。また、子供たちは、よく親子で作ったりした「いと電話」や市販の「おもちゃの電話機」(或いは「おもちゃのスマートフォン」)などを使っては、家族や友だちなどと、「……もし、もし、あのね。……」などとあれこれ楽しく話し合っ遊び合う、いわゆる「電話ごっこ」遊びなども、よく行なったりするものではないかと思う。

それに加えて、女の子にとつてどうしても欠かせない最も人気の高いものに、いわゆる「人形遊び」があるかと思う。この遊びは、まず好きな人形を買うことから初めて、やがて人形の家や家具類などを買って揃えたり、また、人形の髪をブラシでとかしたり、着せ替えをしたり、また、様々な人形や動物ぬいぐるみなどを身近においては、その人形や動物ぬいぐるみなどとあれこれ話をして楽しく遊び合っているものである。そして、女の子にとつて「人形遊び」というのは、ほとんど「本能的な遊び」であり、例えば、赤ちゃんの人形にミルクを与えたり、おしめを取り替えたりする「育児型の人形」遊びもあれば、また、リカちゃん人形のように、その人形の髪をブラシでとかしたり、数多くの衣装に着せ替えたりして、女の子の「想いや夢その他」などを人形で実現しているものである。また、大きな「動物ぬいぐるみ」などは女の子には大変な人気であり、その大きな「動物ぬいぐるみ」を抱いたり、身近においては、まるで友だちや家族の一員でもあるかのように親しく話しかけたり、また、夜、寝る時にも身近に置いたり、或いは一緒に寝たりすることもあり、そのように女の子にとつて手持ちの「人形や動物ぬいぐるみ」などは、極めて親しい友だちであるとともに、極めて大事な「宝もの」の一つでもあるのだろう。そして、女の子の部屋というのは、やがては、ディズニーのキャラクターをはじめ、実に多彩なアニメの人気キャラクター、その他などで一杯になっているのではないかと思う。

*

*

また、小さな子供から大人の人たちまで、実に多彩なものを「真似」て楽しく遊び合っているものであり、例えば、話題になっている映画のシーンや役者の言動などを真似したり、また、テレビの人気番組や主人公などの真似をして楽しく遊び合っているのをはじめ、面白いCM(コマーシャル)の真似をあれこれして遊び合ったり、また、人気歌手やタレントの歌や仕草また言動などを巧みにあれこれ真似したり、また、人気漫画やアニメなどの主人公の言動をあれこれ真似して遊んだり、と、小さな子供から大人の人たちまで、実に多彩なものを「真似」て楽しく遊び合っているものである。

そして、その例を挙げれば、もう切りがないと思うが、例えば、昔であれば、時代劇を真似て、「チャンバラごっこ」や「忍者ごっこ」などをしたり、また、洋画や邦画の、有名な「アクション映画」のシーンなどを真似て、友だちと遊び合ったりした人も非常に多いかと思う。一方、テレビであれば、「月光仮面」や「ハリマオー」、また、「仮面ライダー

ー」や「ウルトラマン」、その他、子供の頃にはそのようなテレビ番組の「ヒーローたち」の真似をして楽しく遊び合ったという人たちは、もう膨大な数に上るのだろう。また、幼児や小・中・高校生ぐらいの頃には、その時々アイドル歌手たちの歌やそれに伴う振りなどをあれこれ真似ては、楽しく歌ったり、ふざけ合ったりするものである。また、学校に行けば、前の日に観た「テレビ番組」が話題の中心になることも多く、その時に面白いCM（コマーシャル）の真似をあれこれして友だちとふざけ合ったり、また、テレビ番組の「或るシーン」が話題になり、そのシーンの役者の「表情やせりふ」などを巧みに真似ては、みんなで大笑いしたり、また、漫画や人気アニメなどに登場する主人公たちの面白い「セリフや動作」などをまねたり、それを友だちとの会話の中にも巧みに取り入れたりして、楽しく遊び合っているものである。それは、大学生や社会人の人たちでも、全く同じことであり、様々な「集い」や「コンパ」或いはまた「宴会」、その他の時などにも、余興として、実に様々な「歌まね」をはじめ、色々な人や物の真似、その他などを巧みに行なっては、その場をどつと盛り上げたりしているものである。

*

*

もちろん、社会の出来事や話題になった人物などの言動をあれこれ巧みにまねたり、また、様々な動物や怪獣のまねとか身近な人たちの真似をして楽しんだり、もう子供たちは、身のまわりにある実に様々なものを真似しては、お互いに笑ったり、ふざけ合ったり、また、からかったり、時には真剣にと、もうわいわいがやがやと騒ぎ合っては、お互いに楽しく遊び合っているものである。そのように、今、話題になっている様々なことや流行語なども巧みに取り入れては、何でもかんでも真似の対象とし、また、様々なパロディー化して楽しみ、子供が一人でも、また、二人以上集まった時でも、どこでも、いつでも行なわれる、あれこれ真似ることによって多種多彩なことを学ぶことになるわけであるが、子供たちの遊びのなかでも最も多種多彩に満ち満ちた遊びの一つになるのだろう……。

*

*

お手だま遊び

お手だま遊び

遠い大昔むかしから今日まで永々と受け継がれて来ている遊びのなかでも、特に女の子の間で高い人気があった遊びとしては、誰でもよくご存知の『お手だま』遊びがあるかと思う。その「お手だま」は、ふつう小さな布袋の中に「小豆あずき」などを入れて、五、六個ぐらい作り、その中の一つは、少し大きめにするわけだが、それは、「おさらい」を行なう時に使われる「親玉」となるものである。——そして、その昔には、大人の人が、小さな石などを使って遊び合っていたものだが、江戸時代に入ってから、小さな袋の中に最初は「小石」を、やがて「小豆あずき」などを入れて、女の子が遊ぶ遊びになったそうである。さて、その「お手だま」の「遊び方」であるが、それには大きく分けて、次の二つの「遊び方」があるかと思う。その一つは、いわゆる「おさらい」であり、「……おさらい、おひとつおいて、おさらい、おふたつおいて……」という「数え唄」などを口ずさみながら遊ぶものと、もう一つは、二個以上のお手だまを交互に投げ上げて、それを巧みに取ったり、投げたりするというような「遊び方」である。……

一、おさらい（前半）

それでは、まず『おさらい』の遊び方であるが、そのためには、「親玉一つに子玉四つ」を用意します。そして、最初は、右手に親玉を持ち、残りの子玉四つは、下に置いてある状態から、「おさらい」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「さ」の時に、両手で下の子玉四つを素早く取り、そして、「らい」の時に、その子玉四つを持った両手で、上から落ちて来る親玉を受け止めてから、子玉四つを下に捨て、右手に親玉だけを持っている状態で、いわゆる「おさらい」が終わることになる。そして、その右手に親玉一つを持ち、残りの子玉四つは、下においてある状態から、「おひとつおいて」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「ひ」の時に、右手で下の子玉一つを素早く取り、そして、「とつ」の時に、その子玉一つを持った右手で、上から落ちて来る親玉を受けとめて、「おいて」で、手に持つこととめて、「おいて」で、手に持つこととめて、手に持っている子玉一つを下に捨てることとなる。そのようなことを残りの子玉三個についても、それぞれ行なって、「おひとつおいて」が終わることになる。次に、その「おひとつおいて」と全く同じ要領で、最初に「おさらい」を行なうことから、今度は「おふたつおいて」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「ふ」の時に、右手で下の子玉二つを素早く取り、そして、「たつ」の時に、その子玉二つを持った右手で、上から落ちて来る親玉を受けとめて、「おいて」で、手に持っている子玉二つを下に捨てることとなる。そのようなことを、もう一度、残りの子玉二つで行なうと、「おふたつおいて」が終わることになる。その次も、同じように「おさらい」を行なうから、今度は「おみつつおいて」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「みつ」の時に、右手で下の子玉を今度は三つ素早く取り、そして、「つ」の時に、その子玉三つを持った右手で、上から落ちて来る親玉を受けとめ、「おいて」で、手に持っている子玉三つを下に捨てることとなる。その後、同じ要領で残った一つの子玉を「おみつつおいて」と言っは、やり終えて、「おみつつおいて」が終わることになる。

二、もう一つの「おさらい」(前半)

ところで、今までの「おひとつおいて」から「おみつおいて」までの遊び方には、もうひとつの「遊び方」がある。それは、最初に「おさらい」を行なった後、まず「おひとつ」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「ひ」の時に、右手で下の子玉一つを素早く取り、そして、「とつ」の時に、その子玉一つを持った右手で、上から落ちて来る「親玉を取る」ことになる。ここまでは同じであるが、ただ違うのは、「おいて」がないところである。つまり、子玉を捨てずに、右手に親玉と子玉一つがある状態から、また、「おひとつ」と言いながら、「お」の時に、その二個を同時に上に高く上げ、「ひ」の時に、右手で下の子玉一つを素早く取り、そして、「とつ」の時に、その子玉一つを持った右手で、上から落ちて来る「親玉と子玉一つ」の「親玉」だけを取り、「子玉一つ」の方は、取らずに捨てるということをして、残りの子玉三個についても、それぞれ行なつて、最後は、「おいて」と言つて、手に持っている子玉一つを下に落として、「おひとつ」が終わることになるわけである。次に、最初に「おさらい」を行なった後、今度は「おふたつ」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「ふ」の時に、右手で下の子玉二つを素早く取り、そして、「たつ」の時に、その子玉二つを持った右手で、上から落ちて来る「親玉と子玉二つ」の「親玉」だけを取り、「子玉二つ」の方は、取らずに捨て、それから「おいて」と言つて、手に持っている「子玉二つ」を下に捨てて、「おふたつ」が終わることになるわけである。その次も、最初に「おさらい」を行なった後、今度は「おみつ」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「みつ」の時に、右手で下の子玉三つを素早く取り、そして、「つ」の時に、その子玉三つを持った右手で、上から落ちて来る「親玉を取る」ことになる。次にまた、「おみつ」と言いながら、「お」の時に、手にある親玉と子玉三個を同時に上に高く上げて、「みつ」の時に、右手で下の子玉一つを素早く取り、そして、「つ」の時に、その小玉一つを持った右手で、上から落ちて来る「親玉と子玉三つ」の「親玉」だけを取り、「子玉三つ」の方は、取らずに捨て、それから「おいて」と言つて、手に持っている「子玉一つ」を下に捨てて、「おみつ」が終わることになるわけである。——この「遊び方」の方が最初のやり方より少し難しくなるが、しかし、それだけ面白さが加味されて、「お手玉」の醍醐味を十分に味わいながら、女の子たちは、もう夢中になって楽しく遊んでいるものである。

三、おさらい(後半)

さて、「おみつ」まで終えたら、今度は『お手つき』になります。それは、最初に「おさらい」を行なつて、その「右手に親玉を持ち、残りの子玉四つは、下に置いてある状態」から、「おてつき」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「て」の時に、下にある子玉一つを右手で軽くつまみ離し、そして、「つき」の時に、上から落ちて来る親玉を右手で受けとめるといふことを、四回くり返すことになります。その次は、『おにぎ

りおいて』であり、最初に「おさらい」を行なってから、今度は「おにぎりおいて」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「に」の時に、下にある子玉一つを右手で素早く取り、「ぎ」の時に、その子玉一つを左手のひらの上に乗せ、そして、「り」の時に、上から落ちて来る親玉を右手で受けとめ、「おいて」の時に、左手の子玉は、そのあと下に捨てるといふことを、やはり四回くり返すことになりす。その次は『おてのせおいて』であり、最初に「おさらい」を行なつた後、「おてのせおいて」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「て」の時に、下にある子玉一つを右手で素早く取り、「の」の時に、その子玉一つを左手の甲の上に置き、そして、「せ」の時に、上から落ちて来る親玉を右手で受けとめ、「おいて」の時に、左手の子玉は、そのあと下に捨てるといふことを、四回くり返すことになる。次は、『おはさみおいて』であり、最初に「おさらい」を行なつてから、「おはさみおいて」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「は」の時に、下にある子玉一つを右手で素早く取り、「の」の時に、その子玉一つを左手の人差し指と中指との間に素早くはさみ、そして、「み」の時に上から落ちて来る親玉を右手で受けとめ、「おいて」の時に、左手の子玉は、そのあと指を広げて捨てるといふことを、四回くり返すことになる。その次は、『おちりんこおいて』であり、最初に「おさらい」を行なつてから、「おちりんこおいて」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「ちりん」の時に、その子玉一つを左手の中指一本を折りまげて素早くはさみ、それを耳もとに持つて来て二、三回振り、「こ」の時に、上から落ちて来る親玉を右手で受けとめ、「おいて」の時に、左手の子玉は、そのあと下に捨てるといふことを、四回くり返すことになるわけである。

次は、『おおきいはしくぐれ』であり、最初に「おさらい」を行なつてから、「おおきいはしくぐれ」と言いながら、「おお」の時に、親玉を上高く上げ、「きい」時に、下にある子玉一つを右手で素早く取り、そして、「はし」の時に、左手のひじを立てて大きな橋を作り、「くぐれ」の時に、右手に持っている一つの子玉を素早くひじ立てをした左手にくぐらせ、上から落ちて来る親玉を右手で受けとめるといふことを、四回くり返すことになる。もちろん、この「遊び」の場合には、一つ一つの言葉の時に何を行なうかを気にせず、とにかく「おおきいはしくぐれ」と言っている間に、一連の動作をできるだけ素早く行なうことが、最も大事なことになるかと思う。次は、『ちいさいはしくぐれ』であり、最初に「おさらい」を行なつてから、「ちいさいはしくぐれ」と言いながら、「ちい」の時に、親玉を上高く上げ、「さい」の時に、下にある子玉一つを右手で素早く取り、そして、「はし」の時に、親指と他の指とで小さな橋を作り、「くぐれ」の時に、右手に持っている一つの子玉を素早くその小さな橋の下をくぐらせて、上から落ちてくる親玉を右手で受け止めるといふことを、四回くり返すことになる。これも同じような要領で行なうことになる。次は、『おうまののりかえ』であり、最初に「おさらい」を行なつてから、親玉を右手の甲の上に乗せておき、それから「おうまの」の時に、親玉を甲の上に乗せたまま下の子玉を指でつまみ、そして、「のりかえ」で、親玉を下に落としながら、つまんだ子玉一つをくるっと回して甲の上に乗せるといふ「遊び方」であり、次は、右手の甲の上に乗っている子玉を下に落としながら、つまんだ別の子玉一つをくるっと回して甲の上に乗せるといふことをくり返し、そして、最後は、手の甲の上に乗っている子玉を落としながら、つまんだ親玉をくるっと回して甲の上に乗せ、そのあと、親玉を下に落とし

ながら、その落ちる親玉を右手で素早くつかみ取って、「おうまののせかえ」は、終わることになるわけである。その次は、『およせ』であり、「およせ」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「よ」の時に、下にばらばらになっている子玉一つを中央に集め、そして、「せ」の時に、上から落ちて来る親玉を右手で取るということを、四回行なうことによつて、子玉を中央にすべて集めることになるわけである。それが終われば、「おしまい」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「し」の時に、下の子玉四個を両手で素早く取り、そして、「まい」の時に、上から落ちて来る親玉を受け止めてから、子玉四つを下に捨て、右手に親玉だけを持っている状態で、いわゆる「おさらいコースの一」が一通り終わることになるかと思う。

四、もう一つの「おさらい」(後半)

ところで、「おみつつ」が終わったあとで、もう一つの「お手つき、おにぎり、お手のせ、おはさみ、おちりんこ、その他」について、ごく簡単に説明しておきたいと思う。まず、『お手つき』であるが、それは、最初に「おさらい」を行なつてから、「お手つき」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「手」の時に、右手で下にある「子玉一つ」と「左手」に素早くタッチし、そして、「き」の時に、上から落ちて来る親玉を右手で受けとめることを、四回くり返すことになるかと思う。次は、『おにぎり』であり、最初に「おさらい」を行なつてから、「おにぎり」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「に」の時に、下にある子玉一つを右手で素早く取り、「ぎ」の時に、その子玉一つを左手のひらの上に乗せ、そして、「り」の時に、上から落ちて来る親玉を右手で受けとめることになる。その場合、「おいて」がないために、左手の中にある子玉は、捨てずにそのままずっと持っていることになる。そして、再び、「おにぎり」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「に」の時に、下にある子玉一つを右手で素早く取り、「ぎ」の時に、その子玉一つを左手のひらの上に乗せて二個になり、そして、「り」の時には、「おいて」と言つて、左手にある四個の子玉をすべて下に捨てることになる。

その次は、『お手のせ』であり、最初に「おさらい」を行なつてから、「お手のせ」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「手」の時に、下にある子玉一つを右手で素早く取り、「の」の時に、その子玉一つを左手の甲の上に乗せ、そして、「せ」の時に、上から落ちてくる親玉を右手で受けとめることになる。その場合、「おいて」がないために、左手の甲の上に乗せている子玉一つは、捨てずにそのままにします。そして、再び、「お手のせ」と言いながら、「手」の時に、親玉を上高く上げ、「手」の時に、下にある子玉一つを右手で素早く取り、「の」の時に、その子玉一つを左手の甲の上に乗せて二個とし、そして、「せ」の時に、上から落ちてくる親玉を右手で受けとめるということとを、四回くり返し、最後の時には、「おいて」と言つて、左手の甲の上に乗っている四個の小玉を、すべて下に捨てることになるわけである。

次は、『おはさみ』であり、最初に「おさらい」を行なつてから、「おはさみ」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「は」の時に、下にある子玉一つを右手で素早く取り、「さ」の時に、その子玉一つを親指と人差し指との間にはさみ、そして、「み」

の時に、上から落ちて来る親玉を右手で受けとめるということを、四回くり返すことになるが、その場合、最初は、親指と人差し指との間にはさみ、次は、人差し指と中指ではさみ、その次は、中指と薬指の間にはさみ、そして、最後は、薬指と小指の間にはさむことになり、最後に、「おいて」と言つて、それらすべてを指からはずして下に捨て、「おはさみ」が終わることになるわけである。次は、『おちりんこ』であり、最初に「おさらい」を行なつてから、「おちりんこ」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「ちりん」の時に、下にある子玉一つを左手の指一本折りまげて素早くはさみ、それを耳もとに持つてきて二、三個振り、「こ」の時に、上から落ちて来る親玉を右手で受けとめるということを、四回くり返すことになるが、その場合、最初は、人差し指だけを折りまげてつかみ、次は、中指だけを折りまげてつかみ、その次は、薬指だけを折り曲げてつかみ、そして、最後は、小指だけを折りまげてつかみ、最後に、「おいて」と言つて、手につかんでいる子玉四個すべてを下に捨てて、「おちりんこ」が終わることになるわけだ。

次は、「おひらり、ひらのやま、ゆきがふる、ゆきがふる、シャリンコシャン」であり、最初は、「おひらり」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げると同時に、下にある小玉一つを右手で素早くつかむと同時に、「ひ」の時に、その右手でつかんだ子玉をすぐさま上に高く上げては、「らり」の時に、上から落ちて来る親玉を右手で取ると同時に、左手のひらの上に落ちて来る子玉を受けとめるということである。次は、「ひらのやま」と言いながら、全く同じことを行ない、その結果、左手には子玉が二つになっている。その次は、「ゆきがふる」と言いながら、全く同じことを行ない、その結果、左手には小玉が三個になっている。そして、最後にまた、「ゆきがふる」と言いながら、同じことをくり返し、その結果、左手には子玉が四個になっている。そのような状態になつてから、今度は「シャシャリコシャン」と言いながら、「シャ」の時に、右手の「親玉一個」を左手の方に高く投げ上げると同時に、「シャリンコ」の時に、左手にある「子玉四個」を右手に素早く移して、上から落ちてくる親玉を左手で受けとめることになる。そして、その次の「シャ」の時に、右手の「子玉四個」を遠く放り投げて捨て、そして、「ん」の時に、左手の親玉を素早く右手に移してから、両手で親玉を床につけるように置きます。その結果、放り投げた子玉四個とその親玉との「離れた距離」が「手幅で五以上」になつていけば、一連の「おひらり、ひらのやま、ゆきがふる、ゆきがふる、そして、シャシャリコシャン」は、成功したこととなり、終わることになるのである。

その次は、『およせ』であり、「およせ」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「よ」の時に、下にある子玉一つを右手で素早く取つて中央に寄せ、そして、「せ」の時に、落ちて来る親玉を右手の甲の上で受け、それから、その右手の甲の上に乗っている親玉を、右手のひらで素早くつかみ直し、それから、「およせ」と言いながら、また、同じようなことを結局四回くり返して、「およせ」が終わることになるわけである。そして、最後は『おしまい』であり、「おしまい」と言いながら、「お」の時に、親玉を上高く上げ、「し」の時に、下の子玉四個を両手で素早く取り、そして、「まい」の時に、上から落ちて来る親玉を受け止めてから、子玉四つを下に捨て、右手に親玉だけを持つている状態で、もう一つの「おさらいコースの二」が終わることになるわけである。もちろん、この「遊び方」の方が、もう一つの「やり方」よりも、より難しくなつてはいるが、しかし、それだけより「腕の見せどころ」となり得るので、子供たちは、どんどん挑戦を

して楽しい時を過ごしていることになるのだろう。

五、二個の「お手玉」

さて、今度は、二個以上の「お手玉」を巧みな手さばきで、交互に投げ上げたり、受けとめたりして行なう「お手だま遊び」について、ごく簡単に説明をしておきたいと思う。

まず最初は、二個の「お手玉」を両手を使って行なうという場合であるが、これはもちろん、誰にでも簡単にできる「遊び方」になるかと思う。しかし、大事なことは、この「二個のお手玉」を使って、お手玉の最も基本的な「投げ上げ、受け、そして、渡し方」などをしっかりと身につけることである。つまり、お手玉を上高く上げる時には、いつも同じ感じで正確に投げ上げられるように何度もくり返して練習しておくことが必要であり、その「投げ上げ」がばらばらでは、何回も連続してお手だまを行なうことは、なかなかできにくくなるのである。また、「目」は、いつも上上がったお手玉を見るようにするとともに、お手玉は、真上に投げ上げるのではなく、右手から投げ上げられたお手玉は、ゆるやかな放物線を描きながら、左手のところに落ちて来るようにする。そして、お手玉が空間に上がっている間に、左手のお手玉を右手に投げるのではなく、素早く「手渡す」ようにする。それから、上から落ちてくるお手玉を左手で受け取るようになるが、それは、手元を見ずに行なうものであり、そのようなことを何度も繰り返しながら、お手玉の最も基本的な「投げ上げ、受け、そして、渡し」などを身につけるようにするわけである。

また、片手で「二個のお手玉」を使って遊ぶような場合であるが、その「やり方」の「要領やコツ」などは、次のようになるかと思う。それは、まず右手に二つのお手玉を持ち、そして、その一つをできるだけ正確に上に高く投げ上げることになるが、その場合、「目」は、いつも上上がったお手玉を見るようにし、最初のお手玉が、いちばん高い地点にまで上がったならば、もう一つのお手玉をつかさずに高く投げ上げるようにする。そして、落ちて来る最初のお手玉を右手で受け止め、受けとめたならば、すぐに上に高く投げ上げるようにし、そのようなことを何度も繰り返し返すことになるが、この「遊び方」で最も大事なところは、一体、どこに「意識（注意）」を置くかということであり、それは、上から落ちて来るお手玉を「右手で受けとめたその時」に、自分の「意識（注意）」を集中させるということである。つまり、上から落ちてくるお手玉を「右手で受けとめた」という意識を持ったならば、すぐに「そのお手玉を少し放物線を描くように上に上げるんだ」という意識を持って行なうことによって、初めて一つの安定した「リズム」を作り出すことができるわけである。——ここが最も大事なことであり、上から落ちてきたお手玉を「右手で受けとめた」感覚が伝わったならば、その右手を少し下に下ろしきみにしながら、右手を少し右方向に回す感じでお手玉を上高く投げ上げるようにすると、二つのお手玉が空間でゆっくと放物線を描いて回転するような、一つの安定した「リズム」が生まれることになるわけである。そして、そのような一つの安定した「リズム」を作り出すことが最も大事なことであり、ただ漠然とした意識であわただしく行なっていたのでは、いつまで経っても上達しないことになるかと思う。もちろん、慣れて来れば、それほど意識しなくとも、自然と一つの安定した「リズム」で行なえるようになるのだろうが、最初のうちは、やはりどこに「意識（注意）」を置いて行なったらよいのか、はっきりとわきまえ

て練習することが、何よりも大事なことになるかと思う。

六、三個の「お手玉」(ジャグリング)

次に、三個の「お手玉」を使って、両手で投げたり受けたりを行なう「遊び方」であるが、この「遊び方」が自由自在に出来るようになることよってこそ、初めて、自分も「お手玉」を本当に習得し得たという実感が味わえるものである。

それはともかく、まず右手に二個のお手玉を持ち、一方、左手には一個のお手玉を持つような状態から、右手にある二個のお手玉のうち、指先の方にあるお手玉を上高く投げ上げるわけだが、それは、真上ではなく、放物線を描くように上に高く投げ上げ、そして、その上に高く投げ上げたお手玉がいちばん高い地点になるような時に、右手にあるもう一つのお手玉を同じように放物線を描くように上に高く投げ上げると同時に、左手に持っているお手玉一つを素早く右手に「手渡し」、上から落ちて来る最初のお手玉をその左手で受けとめることになるわけだ。そのようことを何度も繰り返して行なうことよって、一つの連続した「お手玉の技」になっていくわけである。それでは、その遊び方の「要領やコツ」などは、どこにあるのかと言え、それは、次のようになるかと思う。つまり、右手に持っているお手玉を上高く投げ上げるタイミングは、前のお手玉が「いちばん高い地点」になるうとする時であるとともに、その「高さ」は、いわば「最高到達点」であり、そこに向かつて正確に投げる練習が大事であるとともに、初心者には、その「最高到達点」を少し「高め」(頭の高さより少し上)ぐらいに設定し、熟練してくれば、どのような「高さ」でも自由自在にできるようにするのである。そして、もう一つは、右手に持っているお手玉を上高く投げ上げるやいなや、左手に持っているお手玉を素早く右手に「手渡し」ようにすること、この二つが大事なことであるとともに、お手玉を行なっている時の感じは、左回りにぐるぐるとお手玉を回している感じで、右手で上に高く投げ上げたお手玉は、大きな放物線を描いて左手に落ちるが、その前に、左手に持っているお手玉を素早く右手に「手渡し」という循環を、何度も繰り返すことになるわけだ。

一方、よく「曲芸」などで行なわれる「ジャグリング」というやり方もあるかと思うが、その「要領やコツ」なども基本はみな同じであり、まず右手に二個のお手玉を持ち、一方、左手には一個のお手玉を持つような状態から、右手の一つを真上ではなくて、左手へ落ちるような放物線を描くようにお手玉を上高く投げ上げ、そして、その高く上に投げ上げられたお手玉は、当然、左手に落ちて来るわけだが、その左手に落ちる前に、左手に持っているお手玉を、素早く右手へ落ちるような放物線を描くように上に高く投げ上げるとともに、上から落ちて来るお手玉を左手で受けとめる。一方、左手から高く上に投げ上げられたお手玉が、やがて右手に落ちて来るわけだが、その前に右手に持っているもう一つのお手玉を、素早く左手へ落ちるような放物線を描くように上に高く投げ上げるといふことを何度もくり返して「ジャグリング」を行なうという「遊び方」である。そして、この「遊び方」も、やはり一定の「リズム」で行なうことが何よりも大事なことであり、それは、「……イチで右手の一つを上げ、ニで左手の一つを上げ、サンで右手の残り一つを上げ、シで左手に落ちて来た玉を上げる」ということであり、そして、その「リズム」は、まさに「イチ、ニ、サン、シ」、「イチ、ニ、サン、シ」と、何度も何度も繰り返し繰り返す

練習を行なうことよって、だんだんとその「要領やコツ」なども分かって来るかと思う。そして、三個の「お手玉」(ジャグリング)が自由自在に出来るようになったならば、今度は四個の「お手玉」(ジャグリング)などにも積極的に挑戦をして、見ている人たちを驚かせたり、また、関心させたりすることも、非常に楽しいことではないかと思う。

七、結び

以上、女の子(或いは男の子をも含めて)が、それぞれ手持ちの「お手玉」を使って、楽しく遊び合っているものである。そして、その「遊び方」には、「おさらい」コースと、もう一つ、二つ以上の「お手玉」を交互に投げ上げたり、受けとめたりして行なう「お手だま遊び」とがあり、それは、片手だけで行なう場合もあれば、両手をフルに使用して素早く巧みな手さばきで「お手玉」を行ない、お互いその「腕前」を競い合って楽しく遊び合えるものである。また、それは、何もそのようなものだけに限らず、様々な「小道具」を使って、「お手玉」(ジャグリング)を行なうこともできる。例えば、よく「曲芸」などで、こん棒を四、五本使って巧みな手さばきで行なう場合もあれば、上半身裸はだかの人が、火の付いた棒を何本も使って巧みな手さばきで、時には身体からだの後ろに回まわしたりして、その「妙技みょうぎ」を見せてくるものである。そのように「お手玉」というのは、——思うに、われわれ人類が、いわゆる「直立二足歩行」を始めるようになることよって、両手が自由に使えるようになり、その自由になった「両手」を使って、様々な「道具」をつくり出し、それらの「道具」をフルに使用して、われわれ人類の「生活や文化」などをこれほどまでに豊かにして来たとともに、もう一方では、その自由になった「両手」を使つての「手遊び」なども、ほぼ同時に生まれて来たに違いなく、その一つに、この「お手玉」遊びなどもあるということになるかと思う。それゆえ、「お手だま」遊びというのは、われわれ人類の歴史とともに、極めて古い遊びの一つになるのだろう……。

*

*

祭りと縁日

祭りと縁日

多くの子供たちにとって最も大きな楽しみの一つとしては、何と言っても、春夏秋冬、日本各地で催される、実に大小様々な『祭りや縁日』などがあるかと思う。

それは、誰でも子供の頃には春夏秋冬の大小様々な「祭りや縁日」などを数日前から心待ちにするようなところがあつたかと思うが、それは、なぜかと言えば、それは、言うまでもなく、「祭りや縁日」などには、子供たちを心の底から楽しませてくれる実に多彩なものがあるからである。例えば、祭りや縁日などで賑わう人波の中に混じって、子供たちは、多種多彩な屋台やその他などがずらりと立ち並んでいる道を歩きながら、昔は、その屋台に飾られていた様々な品物（例えばおもちゃ類など）を見たり、さわったりしているだけでも、心が浮き浮きして来るところがあつたとともに、いろいろな屋台の食べ物などをあれこれ食べて歩くのも、非常に楽しいことであり、例えば、焼きそばやわたあめ、タコ焼きやお好み焼き、また、焼きイカやトウモロコシ、おでんや焼きまんじゅう、また、あめ細工やカルメ焼き、それに加えて、多種多彩なあめ類や菓子類、一方、かき氷やアイスクリーム、また、アイスクャンディーや冷凍ミカン、それにボンボンやジュース、ラムネ（サイダー）、その他などの清涼飲料水なども含めて、もう実に多種多彩なものであり、それら子供たちは、もう何だかんだと言いながら飲食するのが大好きなのである。

一、焼きそば

例えば、『焼きそば』は、大きな鉄板の上に油を引いてから、まず、両手にヘラなどを持って、最初は、肉類（ふつう豚肉など）を軽めに炒めてから、その次は、それにそのままキャベツなどを乗せて一緒によく混ぜ合わせて丁寧炒める場合と、もう一つの方法は、その軽めに炒めた豚肉は端に寄せておき、次に、野菜（キャベツ）などを炒めてから、それに前に炒めた豚肉とを合わせて一緒によく混ぜ合わせて丁寧に炒める方法とがあるが、それはもうどちらでも、結局は同じことであり、丁寧に混ぜ合わせて炒めた「豚肉とキャベツ」の山は二分して、左右の端に寄せておき、それから、今度は多くの焼きそばを鉄板の中央に乗せて、よくほぐしてじゃじゃと白いゆげを上げながら焼き、（ここでモヤシをそばの上に乗せる場合もあるが）、最後はそれらすべてを両手のヘラで勢いよくかき混ぜながらソースをかけては焼くものであり、そのでき上がった「焼きそば」には青のりや細かく切った紅シヨウガなどを添えて食べると、ひと味違って一層美味しくなるとともに、その焼きそばのソースの「匂い」こそは、まさに「祭りや縁日」などの最も代表的な「匂い」の一つにもなるのだろう。

二、わたあめ

次に、『わたあめ』（「わた菓子」）なども、子供たちには非常に人気の高い食べ物であり、それは、丸くて大きな「わたあめ機」を廻しながら、その中央のところに「ザラメ」を入れると、やがて、まるで「雲」がわき出るように「わたあめ」がその姿を現わし、それを一本の割りばしに絡ませるように取りながら、大き目の「わたあめ」にしたところで、

「はい、お待ちどう！」などと言いながら子供に手渡し、子供は、その大きな「わたあめ」をお金と引き換えにニコニコしながら受け取っては、その大きな「わたあめ」を口にしなから、その祭りや縁日の人たちで賑わう人ごみの中を、よく歩いたりしていたものですし、また、最近では、小さな子供たちは、人気アニメの「キャラクターたち」が大きく印刷されている「袋」に入った大きな「わたあめ」などを好んで買い求めているかと思う。

ところで、今日では、その「わたあめ」（「わた菓子」）にちよつとした革命が起きているのであり、それは、まず、今までは「無色」ですべて同じ「味」でしたが、しかし、今や、例えば、従来の「白」（ザラメ味）をはじめ、「青」（ラムネ味）や「ピンク」（イチゴ味）それに「オレンジ」（マンゴー味）などと、その色彩もカラフルにかつ味をいろいろとあり、しかも、その「姿・形」なども、ただ単に丸く大きくするだけではなく、様々な「動物や花柄がら或いはアニメのキャラクター」などを模した「姿・形」になり、しかも、巨大な「わたあめ」（「わた菓子」）に変身しているのである。

それは、中国や韓国の「わたあめ機」が日本にも入って来たということであり、その「わたあめ機」は、材料を入れる口の周辺から「わたあめ」が噴き出して来る仕掛けであり、そこに棒を横において、その棒をくるくると回していると、それに「わたあめ」が絡まってだんだんと大きくなるものであり、材料を入れる口から、いろいろな色の「材料」を入れながら、様々な「動物や花柄がら或いはアニメのキャラクター」などの「姿・形」へとあれこれ手を加えながら作り上げていくものであり、これからは、この「わたあめ機」が日本でも主流となり、手の器用な日本人は、中国や韓国とはまた違う、日本独自の様々な「動物や花柄がら或いはアニメのキャラクター」その他の「姿・形」などを巧みに創り上げていくことになるのではないかと思う。

三、焼きまんじゅう

次は、『焼きまんじゅう』であるが、これは、上州（群馬）名物の「郷土食」の一つであり、関東方面の「祭りや縁日」の屋台などではよく売られていて、子供たちには人気の高い食べ物ではないかと思うが、それは、串差しされた丸いまんじゅうの表面にハケで甘い味噌のタレなどを付けて両面を焼くものであるが、そのふつくとした丸いまんじゅうを、ふつと四個串刺しにしたものであり、子供たちは、口の周りまわをその甘い味噌のタレで汚しながらも、美味そうに食べていたものである。——もちろん、日本の各地域には、それぞれの名物の「郷土食」などは実に数多くあるかと思うが、例えば、屋台では、有名な大阪焼きをはじめ、広島焼きや佐世保バーガー、その他、最近では、B級ご当地グルメで町おこしの祭典「B1グランプリ」などで優勝したり人気になった食べ物としては、例えば、静岡の「富士宮やきそば」をはじめ、青森の「八戸せんべい」、また、福島の「なみえ焼きそば」や兵庫の「あかし卵焼き」、その他、実にいろいろとあるかと思う。

例えば、名古屋の『瀬戸焼きそば』というのは、一般の「ソース味」とは違って、「醤油味」をベースとした「焼きそば」であり、それは、豚肉を煮込んだその「豚肉の煮汁」をダシとして使うというものであり、まず最初は、両手にヘラなどを持って、鉄板に「こま油」を引いてから、そこにキャベツを乗せて丁寧に炒めては、それを端に寄せ、今度は「蒸し麺」をよくほぐしながら炒めてから、その蒸し麺とキャベツと一緒によく混ぜ

合わせて丁寧に炒めるわけであるが、その後、その「蒸し麺とキャベツ」の上に煮込んだ豚肉をたっぷりと乗せて、その上から「豚肉の煮汁」をダシとしてかけてよく丁寧に混ぜ合わせて炒めれば、それで出来上がりであり、それに「目玉焼き」や紅シヨウガなどを添えて食べれば、なおいっそう美味しい「焼きそば」になるということである。

四、あめ細工

また、子供の頃には『あめ細工』というのもあり、それは、指でアメをこねながら注文の動物の姿などを創つくってくれるものであり、その過程で、ハサミを巧みに入れたり、また、色づけをして、より精巧な「動物の形」にしていくものであり、いろいろな種類のあめ細工の見本などが飾られていて、お客さんは、それを見ながら、例えば、「ニワトリを作ってください！」などと注文すると、そのニワトリのあめ細工を、最初からお客さんの目の前で創つくってくれるものであり、それを観ている人たちも、「ああ、上手もんだなあ」と感心しながら、観ていたものであり、龍などの十二支、その他、実に手際よく創つくられるものでした。——ところで、最近では、その「あめ細工」が再びその人気を集め始めていて、それは、例えば、まず、お客さんから注文を受けてから、最初に入れ物（なべ）から取り出す「あめ」そのものは、何と八〇度前後の非常に熱い状態であり、それゆえ、初心者は「ゴム手袋」などをはめて作業をすることもあり、その取り出した「あめ」、その生地に色を付ける場合は、赤や青や黄色の「食紅しよくべに」を生地の上に筆で軽く付けてから、その生地を両手の指で何度も丁寧に練り上げては丸い一つの「だんご」状態をつくり、それを棒に刺すことから始めることになるかと思う。それから、いよいよ「注文」の動物などを創つくることになるが、その場合、顔あたりから作り始めて、あとは、その「アメ細工師」のまさに「腕の見せどころ」であり、次から次へと手際よく、巧みにハサミなどを入れながら、また、必要などころに筆で色づけなどをしながら、より精巧な「動物の形」へと見る見るうちに創つくり上げていくものであり、最後に筆で慎重に「目」を入れればそれで完成であり、観ている人たちも、思わず、「……かわいい！ とか、すごい！」などと感嘆の声を上げたりするものである。そして、それを小さな扇風機などで冷やすと、こちらこちらになり、それを透明な袋などに入れて、子供などに手渡すことになるかと思う。ちなみに、注文の動物としては、昔からの「龍などの十二支」などに加えて、人気の高い「……いるか、ペンギン、金魚、ねこ、オウム、キリン、ゾウ、ライオン、パンダ、リス、カンガルー、コアラ、ハムスター、孔雀、火の鳥、白鳥、つる、昆虫、恐竜、その他」などがあり、また、最近では、ディズニーやアニメの「人気キャラクター」なども非常に増えて来ているかと思うが、もちろん、基本的には、お客さんの注文に応じて、何でも巧みに創つくり上げてくれることになるのだろう。

五、たこ焼き

一方、『たこ焼き』は、もう誰でもよくご存知のように、昔は、数多くのたこ焼きの丸い「型」の中に慣れた手つきで、まず、小麦粉や卵その他などをしっかりと溶け合わせたその店独自の「生地」をそこに流し込み、その上からタコなどの具を乗せ、再び、生地を

入れて頃合いを見ては、それを裏返しなどにして焼けば、それで出来上がりでしたが、今は、少し違っていて、もちろん、日本中の各店（各屋台）それぞれに独自の実に多種多様な「作業方法」はあるかと思うが、それを敢えて大きく分けてみると、次の二つぐらいであり、その一つは、まず、昔のように、たこ焼きの丸い「型」を中心に店独自の「生地」を大まかに流し込んで、そのあと、タコを初めとして、その店（屋台）なりの天かすや細かく切ったネギや紅ショウガ、その他、その店（屋台）ならではの具だくさんの状態にしてから、再び、たこ焼きの「型」全体に、その店独自の「生地」を一杯流し込んで、頃合いを見ては、（これ以降は、後述のやり方と基本同じで）、両手に持ったかえし棒などで、素早くくるくと巧みに裏返しては順番に丸めて一巡、二巡、三巡と、あとは、最後までくるくと巧みに裏返しては何度も丸めながら完成させていくものである。

*

*

そして、もう一つは、最初からたこ焼きの「型」全体に、その店独自の「生地」を一杯近く流し込んで、その後、タコを初めとして、その店（屋台）なりの天かすや細かく切ったネギや紅ショウガ、その他、その店（屋台）ならではの具だくさんの状態にしてから、頃合いを見ては、それは、たこ焼き機の四辺（特に上下）のところをかえし棒などで生地を内側に切り寄せてから、両手に持ったそのかえし棒で、素早くくるくと順番に巧みに裏返しては一巡、二巡、三巡と、生地のはみ出し部分などは下に丸め込むようにしながら、最後まで素早くくるくと一個一個巧みに裏返しては完成させていくものである。そのようにして、でき上がった「たこ焼き」は、舟経木やその他の「入れもの」などに移して、それから店独自のソースをはじめ、かつおぶしやマヨネーズなどをたっぷりかければ、（もちろん、かけない場合もあるが）、それで美味しい「たこ焼き」の出来上がりであり、そのような手順で簡単に創ることができるわけである。

*

*

ところで、その「たこ焼き」の歴史ということになると、そもそもの大元は、江戸時代、文政二年（一八一九年）刊の『北斎漫画』に「文字焼き屋」の挿絵があるので、すでに江戸には「文字焼き」（もんじゃ焼き）に類したものがあり、それが明治時代になると、まさに「もんじゃ焼き屋」が東京にできるようになるのである。そして、大正時代は、その「もんじゃ焼き」から派生したとされる「どんどん焼き」が誕生するようになるが、一方、関西では、その「どんどん焼き」を「一銭洋食」（それは刻みネギとわずかな肉片の具でソースを塗って食べる）と呼ばれるようになり、その「どんどん焼き」（一銭洋食）が、やがては大阪の「お好み焼き」へと変化（進化）するようになるのである。

つまり、「……江戸文政の『文字焼き』↓明治時代の『もんじゃ焼き』↓大正時代の『どんどん焼き』↓その「どんどん焼き」（生地を丸く焼く）が関西へ広まり『一銭洋食』（それは刻みネギとわずかな肉片の具でソースを塗って食べる）↓それがやがて大阪の具だくさんの『お好み焼き』へと変化（進化）するようになる」のである。

一方、「たこ焼き」は、一九三三年（昭和八年）に、大阪の「会津屋」の店主は、「ラジオ焼き」（中身はスジ肉かこんにやくなど）を改良して、醤油味の「牛肉」を入れた「肉焼き」として販売をするが、昭和十年に兵庫のタコと卵とを入れた「明石焼き」の影響を受けて、牛肉ではなく、タコと卵とを入れて作るようになり、それをまさに「たこ焼き」と「命名する」ことになるが、戦前は、生地に味が付いていたために、何もかけないのが

大半であったが、戦後、昭和二十三年に薄めの「ウスターソース」を改良した濃いめの「とんかつソース」が発明されるようになると、それを「たこ焼き」にもかけるようになったということである。

六、たい焼き

もちろん、『たい焼き』なども、基本的にはすべて同じことであるが、まず、「たい焼き」の場合、昔は、一個、一個、たい焼きの姿をした「たい焼き機」が幾つかあって、最初、その一つの「型」の中をあぶら拭ききれいに拭いてから、その店独自の「生地」を適量だけ流し込み、その上から「ふつうはつぶあん」などをたっぷり乗せてから、再び、その上から「生地」を必要な量だけ流し込んでふたをして、裏返ししながら順に焼いて行くものでしたが、今は、少し違って、たい焼きが縦一列で五、六個ぐらい作れる大きな業務用の「たい焼き器」があり、最初は、それぞれの「型」の中をあぶら拭ききれいに拭いてから、その五、六個ぐらいあるたい焼きの「型」に、それぞれ「生地」を適量だけ流し込み、その上から「つぶあんかその他のあん」などをたっぷり乗せてから、再び、その上から「生地」を必要な量だけ流し込んでふたをして、それを裏返して焼くという方法と、もう一つは、あんこの上ではなく、ふたの方の「型」に「生地」を適量だけ流し込んで、前のはんこの入った「型」とふたの方の「型」とをパカッと合わせて閉じては、それを裏返して焼くという方法があるかと思う。——ちなみに、昔の一個、一個の「たい焼き機」で作るのを俗に「天然もの」と呼び、一方、最近の業務用の大きな「たい焼き器」で一度に数多く作るのを俗に「養殖もの」と呼んだりするものである。

ところで、「たい焼き」の食べ方としては、まず、割らずにそのまま「……頭から、しっぽから、或いは、背ビレから、腹から、その他」と、そのままガフリと食べるような場合と、もう一つは、二つに割ってから、「……頭を、しっぽを、或いは、背ビレを、腹を、その他」をガフリと食べるような場合とがあり、それには各人それぞれいろいろなかだわりや考え方があるかと思うが、しかし、基本としては、割るにしろ、そのままにしろ、やはりあんこがたっぷり入っている、「頭」や「腹」あたりからガフリと食べるのが、いちばん美味しい食べ方になるのではないだろうか。……

七、大判焼き（「今川焼き」）

一方、『大判焼き』の場合も、基本的にはほとんど同じ作り方であるが、まず、大きな業務用の「大判焼き器」があり、最初は、一列が横一〇個ある「型」を三列まであぶら拭ききれいに拭いてから、一列から横一〇個ある「型」に、三列までそれぞれ「生地」を適量だけ流し込み、その上から「つぶあんかその他のあん」などをたっぷり乗せるまでは、すべて同じ方法である。違うのは、一つは、今度は、四列から六列まで全部で三〇個ある「型」をあぶら拭ききれいに拭いてから、それぞれ「生地」だけを適量だけ流し込んで、そのあと、一列から三列まであんこの乗った生地をかえし棒で一個づつ順に取り出しては、それを四列から六列までの生地の入った「型」の上に逆さまにしながら、一つ一つ順にびったりと合うように重ねていくという方法であり、これが、まさに今日の「大

判焼き」の「主流」になっているものである。……

そして、もう一つは、昔からの『今川焼き』のように、一列で一〇個ある「型」をあぶら拭きできれいに拭いてから、一列から二列までの「型」に、それぞれ「生地」を適量だけ流し込み、その上から「つぶあんかその他のあん」などをたっぷり乗せるまでは、すべて同じ方法である。そのあとは、昔の「たこ焼き」のように、あんこの上に「生地」を必要な量だけ流し込んで、やがて、かえし棒を使って裏返しにして焼くという方法であり、もちろん、どのような方法であれ、そのような一連の「手慣れた作業」の様子を、見ているだけでも、楽しいものであるが、子供たちは、焼きたての美味そうな「タコ焼き」を初めとして、たっぷり「つぶあんかその他のあん」などの入った「たい焼き」や「大判焼き」（或いは「今川焼き」）などを、好んでパクパクと食べたりしているものである。

ちなみに、「今川焼き」が最初であり、それが全国的に広まって「大判焼き」となり、そして、「たい焼き」は、一九〇九年（明治四二年）創業の浪花家総本店の店主が始めることになるが、その経緯は、「……今川焼きを始めたが一向に売れず、亀の形の亀焼きも失敗する。そこで、めでたいタイの姿にしたところ、飛ぶように売れた」ということであり、それゆえ、「今川焼き」↓「大判焼き」↓「たい焼き」の順となるのである。

八、カルメ焼き

もちろん、それらに加えて、イカやトウモロコシなどを焼いている香ばしい香りなども、子供たちの食欲を強くそそのめるものであるが、子供の頃には『カルメ焼き』という食べ物もあり、それは、お玉のような幾つかの「胴なべ」の中にすでにできている「カルメ焼き用の液」を次から次と入れて、そして、手際よく「カルメ焼き」を作っていました。それを観ていると、子供心にも「これは面白い」と思い、自分の家でもカルメ焼きを作って遊んだりしたものである。——それは、家庭用の一般の「お玉」にザラメと水と黒糖少しを入れて、火の上に置き、その火の上でザラメの粒を丸い棒でつぶしたり、かき回したりしながら、その加熱によってそのザラメが次第に溶けて、どろどろの状態になったところで、そのおたまを火から下ろして、今、ザラメをかき回していた棒の先端に重曹をつけ、その重曹の付いた棒を素早くおたまのどろどろとした液の中に立てて入れ、その棒を勢いよくかき回しながら頃合いのところまで棒をゆっくりと持ち上げて抜くと、ゆっくりとふくらみが現われ、最後にはヒビが入るような状態になるわけである。それは、棒につける重曹の量とかき回し方などによって形のいいカルメ焼きができるかどうかの分かれ目になるものであり、それゆえ、子供心にもどうすれば形のいい「カルメ焼き」ができるのかを何度も失敗しながら試行錯誤を重ねて、そして、自分がイメージするような形のいい「カルメ焼き」などができたりした時には、非常に嬉しかったりしたものである。（ちなみに、なぜ「ザラメと黒糖」なのかと問えば、恐らく、戦後間もなくは、上白糖（白砂糖）などは手に入りやすく、値も高く、それゆえ、祭りや縁日の子供の「カルメ焼き」に使用されていたかどうかは判別し難いところである。）

九、おでん

また、『おでん』なども実に美味しい食べ物であるが、そのおでんの具としては、例えば、だいこんをはじめ、タマゴ、こんにゃく、ちくわ、つみれ、ばくだん、もち巾着、イカ巻きやごぼう巻き、がんもどき、さつま揚げ、じゃがいも、コンブ、厚揚げ、はんぺん、ウィンナー巻き、しらたき、ちくわぶ、牛すじ串、豆腐、タコ、里芋、にんじん、ロールキャベツ、かまぼこ、餃子巻き、シウマイ、その他、もう実に多種多彩なものがあり、それに「ねりからし」などを付けて食べれば、より一層美味しく食べられるのであるが、もちろん、おでんは非常に熱いものであり、それゆえ、あわてて食べたりすると、「あつちち！」などと、舌や唇をやけどする危険性もあるので、フーフーと冷ましてからゆっくり食べるのがベストになるのだろう。——ところで、その「おでん」という言葉であるが、それは、「田楽」に接頭語の「お」がつき、「御田楽」となり、それがやがて「楽」が取れて、「おでん」になったそうである。そして、江戸時代の後期までは、もっぱらみそ汁の中で煮たものだったそうであるが、明治直前ごろに、かつお節のだし汁としよう油で味付けをするのが関東では盛んになり、それが大正の中頃には、関西にも伝わり、その後、関西では、鳥のがらから取ったスープとなり、今度は、それが関東にも広まって、今日に至っているのだそうである。

ちなみに、おでんの「人気ベスト3」は、第一位は、だいこん、第二位は、タマゴ、そして、第三位は、白滝（こんにゃく）となっているが、それでは、一体、なぜ「だいこん」が第一位となるのだろうか？ その「理由」として、多くの人たちが、「……大根は、おでんの味が染み込んでいて美味しい」と、ほとんど「異口同音」に返答しますが、若しもその「言葉通り」であるとすれば、それは、まさに「おでんの味」そのものが美味しいと言っているようなものであり、それは、第二位のタマゴも、第三位の白滝（コンニャク）なども、同じような「理由」（つまり「おでんの味が染み込んでいて美味しい」ということ）になるのだろう。——つまり、大根も白滝（こんにゃく）も本来自らはほとんど「食材の味」を持たないが、おでんの味がよく染み込んでいて、そのほとんど自ら「食材の味」を持たない「大根も白滝（こんにゃく）」なども非常に美味しく食べられるということである。それは、——つまり、おでん味と「相性がよいもの」は、非常に美味しく感じられ、一方、おでん味と「相性がよくないもの」は、あまり美味しいと感じられないということである。

十、お好み焼き

一方、『お好み焼き』は、今や子供たちだけではなく、大人の人たちにも非常に人気の高い食べ物の一つになっているかと思う。それは、もう今さら説明を加えるまでもなく、小麦粉や長芋その他などを水でどろどろに溶いた生地と、例えば、キャベツ、天かす、イカ、エビ、タマゴ、肉類、ネギ、その他、もう実に盛りだくさんな具などを入れて、それぞれ趣向を凝らした独自のポリウムたっぷりの大きなお好み焼きを作っているものであり、そのでき上がった「お好み焼き」には店独自のソースをはじめ、かつおぶしやマヨネーズなどをたっぷりかければ、それで美味しい「お好み焼き」の出来上がりであり、大々的な「祭りや縁日」などの時には、必ず、「お好み焼き」の屋台は出ているとともに、非常に多くの人たちが好んで買い求めている食べ物でもあるわけである。

ところで、その「お好み焼き」と言えば、例えば、「大阪」や「広島」の「お好み焼き」などが特に有名であるが、しかし、元々は昭和六年頃から、「東京」の屋台や縁日などで売られていた「どんどん焼き」（もんじゃ焼きの派生）というのが、そもそもの「お好み焼き」の発祥地と原型の姿であり、それは、小麦粉などを水で溶いた生地を鉄板の上で丸く焼いたものであり、子供の頃、屋台を引いたおじさんが、焼きそばやどんどん焼きなどを売りに来て、そして、焼きそばは新聞紙で作った袋などに入れ、一方、どんどん焼きは厚手のチラシの上に乗せ、それにソースを付けて、その「どんどん焼き」を美味しく食べたりしたものであるが、大阪の場合、そのような「どんどん焼き」（一銭洋食）に、例えば、キャベツ、天かす、イカ、エビ、タマゴ、肉類、ネギ、その他、実にいろいろな具などを盛りだくさん入れるようになって、今日の「お好み焼き」になったということである。

十一、かき氷とアイスクリーム

また、初夏から盛夏には、かき氷をはじめ、実に多彩なアイスクリームやキャンデー類、また、シャーベット類、もちろん、多種多彩な清涼飲料水なども好んで飲食するものである。そして、かき氷では、白のシロップをはじめ、黄色いレモン液や赤いイチゴ液、或いは緑色のメロン液、また、抹茶、宇治茶、マンゴー、ぶどう、その他、もうお好みの液をかけて、もちろん、ミルク入りやあづき入りのかき氷などもあり、さじでさくさくして食べるのも実に美味しく、また、急いで食べたりすると頭がキーンと痛くなったりしたものであるが、夏の冷たい食べ物としては、最も人気のある食べ物の一つになるのだろう。

例えば、子供の頃、「かき氷」を注文すると、店のおじさんかおばちゃんが出てきて、大きな氷を冷凍庫から取り出しては、それを氷かき機の上にしつかりと固定し、それからハンドル部分をがらがら回すと大きな氷がぐるぐると回転しながら、下のガラス製の器にかき氷が山のようにかき積もり、その上から色々な液をかけて食べるものですが、例えば、「おばちゃん、下にはミルクを入れ、上からはイチゴをかけてちょうだい！」などと注文をすると、店のおばちゃんは、まずガラス製の器の中にミルクを入れ、それからかき氷を山のようにかき積もらせ、その上から赤いイチゴ液をかければ、それででき上がりであり、それを受け取ってから、さじで最初の一口を食べると、口いっぱい「氷の冷たさ」が広がるとともに、よくおでこのあたりが痛くなったり、また、虫歯などがあると「氷の冷たさ」が神経にまでしみて、「あっ！」と言ったまましばらく口を開けたままになったりするものである。やがて、かき氷もだんだんと少なくなってきたら、さじでさくさくとかき氷とミルクとをよく混ぜ合わせては、液まで全部食べてしまったものでした。

また、アイスクリームでは、丸い容器の中に入っているものもあれば、アイス最中^{モトナカ}などもあり、また、子供の頃にはモナカの皮に、手に持った道具でアイスクリームを挟^{はさ}んで入れるのがあり、それなどは何か非常に新鮮で新しい感じを受けたものでした。もちろん、今日では実に多種多彩な味の「アイスクリーム」が何十種類と店に並べられていて、その中から自分が食べたいものを幾つか選んで、それを「コーン」や「カップ」などにたっぷりと盛りつけてデコレーションした見た目もカラフルで美味しそうになっていて、それを子供たちはニコニコしながら受け取り、そして、この上もないような表情で美味しそうに食べているものであるが、そのように今日では特に小さな子供から若い女の子たちから

は、まさに圧倒的な人気を誇っている食べ物の一つになっているのだろう。

十二、アイスクャンディー

また、昔は、クーラーボックスを自転車の荷台に載せ、そして、「氷」旗^{ぼた}などを立てたおじさんが、アイスクャンディーなどをよく売りに来たものであるが、それは、まず、いつもの場所に自転車を止めては、それから手に鐘を持ってちりんちりんとう鳴らしながら子供たちを集め始め、そして、集まった子供たちは、自分の好きな「アイスクャンディー」などを一つ注文すると、おじさんは、その「アイスクボックス」の中から注文のアイスクャンディーを一本取り出しては、その子供にハイと渡していたものであるが、そのアイスクボックスには何種類かの「四角いアイスクャンディー」と細長い「棒状のアイスクャンディー」などが入っていたかと思うが、その中から自分の好きなものを買いたいものがある。そして、昔は、棒に付いた「四角いアイスクャンディー」などを口の中で砕いたりすると、その冷たさが歯口に染みたり、また、夏などには、知らぬ間に棒からアイスクャンディーが溶けて下に落ちてしまい、「あつ、もつたない！」などと言いながら、まだ大きなアイスクャンディーの場合であれば、すぐに水洗いをして、そのまま時には食べたりしたものであるが、また、棒に「あたり」「はずれ」の焼き印が付いていて、もし「あたり」が出るともう一本アイスクャンディーがもらえるとこのもあつたかと思う。また、「ボンボンアイス」というのもあつて、その「ボンボンアイス」というのは、いわば「ゴム容器に入ったアイス」のことであり、例えば、バクダンキャンディーやたまごアイスその他などをそのように呼んでいるものである。さらに、冷凍ミカンなども暑い時などには、美味しいものであり、それは、どこか旅行に行った時などにも、よく駅や車内販売などで買ったものである。そして、清涼飲料水の自動販売などについては、もう敢えて言うまでもなく、春夏秋冬の季節などには全く関係なく、お茶やコーヒー類などを初めとして、実に多種多様な「種類」のものが、今日、あらゆる人たちによって飲まれているものであり、それは、もう想像を絶するほどの膨大な「量」になるのだろう。……

十三、リンゴ飴^{あめ}、その他

ところで、子供の頃の「祭りや縁日」の屋台ではあまり見たことがなく、今日の「祭りや縁日」の屋台ではよく見かけるものとしては、例えば、リンゴ飴^{あめ}を初めとして、あんづ飴、いちご飴、ぶどう飴、チョコバナナ、フランクフルト、唐揚げ、じゃがバター、きゅうりの一本漬け、スーパースポルすくい、その他などがあり、一方、昔からあつたものとしては、例えば、天津甘栗^{あまぐり}をはじめ、べっこうあめ、焼きイカや焼きトウモロコシ、ベビーカーステラ、型抜き、くじびき、おもちゃ類、その他などがあつたかと思うが、もちろん、それらに加えて、その地方その地域には特有の屋台なども数多くあるということであり、それは、これからも新たな屋台が数多く生まれることもあるだろうし、また、その一方では、古い屋台は、次第にその姿が見えなくなっていくという宿命^{さだめ}を繰り返すことになるのかも知れない。

十四、大道芸

ところで、子供の頃の「祭りや縁日」では、実に多彩な姿・形をした色彩豊かなお面や風船、また、風車などが風を受けて、数多くからからとカラフルに廻っていたり、また、あちこちの店では、子供のための様々なおもちゃ類なども一ぱい並べられていて、前々から買いたいと思っていたものを、今日まで貯めておいたお金で買い求めたりしたものが、それに加えて、昔の「祭りや縁日」などには、いわゆる「大道芸」などもありました。例えば、『バナナの叩き売る』では、頭にタオルのはち巻きをしたおじさんが、手に厚紙かその他で出来た叩きものを持って、話し慣れた口調とテンポのよい台叩きなどによって、台の上に数多く並べられている大きなバナナを、巧みな話術で客の関心や購買欲などをそりながら、その時その時の臨機応変の客とのやり取りやかけ引きなどで、バナナを巧みに売りさばき、それを新聞紙に包んで渡していたものでした。

また、『ガマの油売り』の場合には、まずガマの油売りの「旗」などが立てられていて、そこにハカマ姿の人が頭にハチマキをし、腰に刀を差したいでたちで（それは、まさに江戸時代の浪人姿でもあったのだろうが）、有名な口上を述べながら、客の関心を集めていくわけだが、それは、「……さあて、お立ち合ひ、御用とお急ぎでない方は……。ここに取り出したるガマは、そんじゃそこらにいるガマとはガマが違ふ……」などと言いながら、最後には自分の手を刀で実際に切つて、その部分に売り薬をぬって血を止めているのを実際に見たことがあるが、その場合、刀を手に当てる時などは、観ている人たちも目を背けるような感じでしたが、あとは油売りの口上などを非常に楽しく観ていたものである。もちろん、それらに加えて、様々な服やズボンあるいはベルト、その他、実に様々な品物を巧みな話術で売りさばいたりしていたものである。

十五、金魚すくいとウナギ釣り

一方、子供たちの誰もが大好きなものとしては、何と言っても、『金魚すくい』があるかと思う。まず、それは、かなり細長い長方形の入れ物の中に水を張り、その中で色彩鮮やかに泳ぎまわる小さな金魚を紙やモナカなどで掬い上げて遊ぶものであるが、その金魚の種類には、赤い和金を初めとして、赤でめ金や黒でめ金、それに尾の長い朱文金などもあったかと思う。そして、まず店の人に必要な料金を手渡し、それと引き替えに「紙かモナカ」などを手で受け取り、もう一方の手には掬った金魚を入れる器を手に持ち、いよいよ「金魚すくい」を始めることになるわけだ。そして、その「金魚すくい」の「要領」（コツ）としては、一般に、まず金魚が多くいて、しかも水の底ではなく、上の方をゆつくりと泳いでいる金魚に狙いをつけながら、左手には掬った金魚を入れる器に水をいっぱい入れて水面近くに浮かせる一方で、右手に持っている「掬い取る紙」（ポイ）には「裏表」があり、それゆえ、「表」を上を持つことが大事であると共に、その「ポイ」は、水面に対して垂直（或いは斜め）に入れて、水中では、紙は、ほぼ水平に移動して、狙いの金魚を捕まえるわけだが、その場合、金魚のしっぽの方から後追いするような感じで掬い取るのではなく、むしろ金魚の頭の方から掬い取るようにするのがコツになるかと思う。そして、金魚を掬ったその紙を水中から外に出す時にも、紙は、少し「斜め」にして金魚を寝か

せるようにするとともに、紙に水の抵抗を与えないように、水中からすうつと外に抜き出しては、素早く器の中に入れることが大事なことになるかと思う。——もちろん、そういうことは、各人がそれぞれその人の好きなやり方で金魚を掬い取れば、それでよいことであり、子供たちは、「あくあ、うまくいかないなあ」とか、逆にうまくいけば、今度は「どうだ！」というような自慢そうな顔をしたり、或いは「あつ、紙が破けちゃった！」など何だかんだと言い騒ぎながら、すっかり夢中になっていて、それゆえ、失敗をすれば、もう一度という感じて、再び、料金を払って繰り返し行なつては、子供たちは、思い思いに「金魚すくい」を心から楽しんでるものである。そして、そこで掬い取った小さな金魚は、ビニール袋に入れてもらい、それを手に提げて家に持ち帰つては、家の中にある金魚鉢や大きめの水槽などに入れて飼うことになるのだろう。

また、子供の頃は、「金魚すくい」だけではなく、夏の「夜店」の時などには、百ワットの裸電球の数多くついた明かりの中でよく『ウナギ釣り』の店なども出ていて、それは、三つ又の「ハリ」のついた糸を小さな竹ざおから垂らしては、そのハリをあれこれ巧みにウナギのエラなどに引つ掛けては、時間をかけてウナギを弱らせつつ、その弱ったウナギを手応えたつぷりに釣り上げて楽しむものでした。——もちろん、最近では、『スーパーボールすくい』などもあり、それは、「金魚すくい」と基本的には全く同じものではあるが、しかし、はつきりと違うところは、「金魚」は、まさに自ら自由に動くことのできる「生き物」であり、一方、「スーパーボール」というのは、言うまでもなく、自ら自由に動くことのでき得ない「物体」であり、それゆえ、慌てる必要は全くなく、じっくりと時間をかけて確実にすくい取れば、それでよいものであり、そして、その「要領やコツ」としては、まず、「紙」(ポイ)は、裏表の「表側」(ふちの見えない面)を使うようにして、水の中へは斜め(七十度程度)に入れて、紙(ポイ)の「ふち」に乗せてボールをすくい取るといふ方法であり、それは、無理に数多くのボールを一度に取ろうとすれば、その重さで紙(ポイ)は破れやすいのであり、それゆえ、一個か二個ぐらいにすべきであり、ゆっくりと確実に行なうのが、まさに最大の「要領」(コツ)になるということである。また、「キャラクターすくい」などもあるが、それは、小さな子供たちが好んで行なっているものになるのだろう。

十六、風船(ヨーヨー)釣り

もちろん、『風船(ヨーヨー)釣り』などもあり、それは、「金魚すくい」と同じように、子供たちには人気の高いものであり、まず、店主は、小さな風船の中に手元にある道具を使って、水と空気をシューと勢いよく入れて膨らませ、それを輪ゴムで口をしつかりと縛るとともに、小さな輪をつくり、その輪ゴムの輪の中にW型の釣り針をひっかけて、釣り上げるといふ素朴な遊び方になるかと思う。——そして、その「風船(ヨーヨー)釣り」の「要領」(コツ)はと言えば、それは、やはり手に持っているW型の釣り針の紙の部分を、なるべく水に濡らさないように注意をすることと、もう一つは、輪ゴムの輪が水面に浮いているようなものを狙い、そして、素早く引つ掛けては、むしろ、ゆっくりと上げる方がよいのかも知れない。むしろ、そういうことも、各人にまかせれば、それでよいことであり、水の中に浮いている数多くの色彩鮮やかな模様の付いた風船を、思い思いに釣り

上げては楽しんでいられるものである。そして、そこで釣り上げた風船を上下や横などにポンポンと手について、何回失敗なく続けられるか？ 友だちと「ヨーヨー遊び」で楽しく遊び合うこともできるかと思う。——もちろん、今日では、多種多様な「キャラクターヨーヨーつり」などが、小さな子供たちには非常に高い人気になっているのだろう。

十七、スマートボール

また、子供の頃の「祭りや縁日」では、「スマートボール」をはじめ、「射的」や「輪投げ」、その他の遊技用の屋台などもよく出ていたものである。例えば、「スマートボール」というのは、いわば「パチンコ台」を（傾斜を付けて）寝かせたような状態にして、小さな玉を「大きな乳白色の玉」に替えたようなものであり、もちろん、元々は、アメリカの「ピンボール」というのを日本風の「スマートボール」へと変型させたものである。そして、まず、規定の料金を払って、約二十四、五個ぐらいの玉をもらい、それから発射口にボールを一個入れて、棒を引いてバネではじき飛ばすと、ボールは、プレイフィールドに送り出される仕掛けであり、そこには「5・10・15・20」などの数字が書いてあり、例えば、5の「穴」（ホール）に玉が入ると、五個の玉がガラス板の上を勢いよく「ジャラガラガラ」と流れて来るものであり、この「音」は、パチンコ台の「チンジャラジャラ」の「音」とともに、なかなか気持ちのよい魅力的な「音」に感じられるものである。また、「15」や「20」の場合には、両方の「穴」（ホール）に玉が入ることで、初めて十五個や二十個の玉が出て来るというものでしたが、これも非常に楽しい遊びであり、子供の頃にはよく行なったものである。もちろん、今日でも、浅草や大阪の新世界などでは、この「スマートボール」を営業している店（ホール）なども幾つかあるということである。

十八、射的と輪投げ

また、「射的」の場合には、最初、店の人に一回分の料金を払うと、確か五、六個のコルクの玉を受け取り、そのあと「射用的銃」などを持つては、その銃の筒の先端に玉をきつめに詰めるわけである。そして、その銃の銃口を少し離れた場所に配列されている大小様々な的に向けて撃つわけであるが、その場合、銃を顔に付けながら狙って撃つような場合もあれば、できるだけ手を伸ばして銃を撃つような場合もあり、それはもうどちらであれ、小さな子供から大人の人たちまで、各人それぞれ狙った的に目がけて銃を撃ち、そして、運よく的を倒すことができれば、そのままその的をもらうことができるというものである。——それは、「輪投げ」の場合も、基本的には全く同じ遊び方であり、最初に規定の料金を払って、三、四本の「小さな輪」を受け取り、その輪を手に持ちながら、一回一回狙いを定めて、反対側に陳列されている大小様々な的に向けて投げ、そして、運よく的をとらえることができれば、その的がそのままもらえるという遊び方になるかと思う。ちなみに、その的としては、よく覚えてはいないが、確か大小様々な置き物やグッズ類或いは箱入りの飲食物、その他、いろいろなものがあつたかと思うが、どうも曖昧な記憶しか残っておらず、それは、やはり非常に古い昔のことになるからであろう。

十九、見世物小屋やサーカス

そして、その余りに古い昔むかしと言えば、遠い昔むかしの「祭りや縁日」では、よく様々な「見世物小屋」などが立ち並んで出たものであり、それは、例えば、「……さあ、いらっしやい、いらっしやい、かわいそうなのはこの子でござい、親の因果が子にむくい……、生まれながらに体がへびのような女の子や、或いは世にも珍しい珍獣何々といったようなものとか、その他」、そのような呼び込みと、それらにちなんだ大きな「絵の看板」などがかかっている、それを「ほんとうかなあ」と想いながらも、一体、どんなものだろうかと、興味をそそられて、観た人も非常に数多くいるのではないだろうか。また、「お化け屋敷」の小屋などもよくかかっている、その入り口の所から非常に怖い仕掛けになっていて、子供や若い女の子などは、もうキヤーキヤーと大騒ぎしながらなかなか中に入っていけないようなものとか、また、いわゆる「サーカス」などもよくやって来たものであり、それは、トラやライオン或いはまたゾウやクマなどと美女との「猛獣ショー」などを初めとして、こん棒や一輪車、その他の実に様々な曲芸などもあり、そして、メインイベントとしての大「空中ブランコ」などがあつたかと思うが、子供の頃に、子象の体にさわって固かったことや、また、リングを鼻先で巧みにとらえて、口の中でプチャと押しつぶして食べていたのを見たことがあつたり、また、大きな球体の中をオートバイが激しい爆音とともに、ぐるぐる回るような見せ物もあつたかと思う。また、野外ステージなどでは、色々な音楽のショーや様々な大会などが催されたり、或いは「祭りや縁日」では、よく四季多様な「草花や植木或いはたね類」などを売る店なども出ていて、それを幾つか買い求めては、家に持ち帰って、大事に育てたりした人たちも非常に数多くいたのではないかと思う。

二十、結び

さて、「祭りや縁日」と言えば、昔は、必ずと言ってよいほど、ピヨ、ピヨと可愛く鳴っている黄色い「ひよこ」などが売られていて、それを買い求めては、家で何か大きな箱のなかで飼って育てたりしたものである。それは、箱の中に裸電球はだかなどを入れて、それで暖め、それを透明ガラスなどでふたをして飼ったりしたものである。それはもちろん、「ひよこ」だけではなく、小さくて可愛い「緑ガメ」なども売られていて、それを買い求めては、家の中にある水槽の中などで飼って育てたという人も、非常に数多くいるのではないかと思う。——一方、日本の「祭り」では、市内に多彩な山車やおみこし、また、踊りやパレードなどが賑やかに出て行なわれ、その祭りに自ら参加したり、或いは観に出かけて楽しんだり、また、七夕祭りや花火大会、また、盆には盆踊りなどをして楽しんだり、春夏秋冬、日本各地で催される、実に大小様々な「祭りや縁日」などを、子供たちは、非常に心待ちにしている、子供たちは、その日を元気にはしゃいでは、まさに心ゆくまで遊び楽しむことにもなるのだろう。

*

*

運動会

運動会

毎年、日本中で定期的に催されている実に多種多様な「催し」の中でも、例えば、運動会などは、小さな子供から大人の人たちまで非常に幅広く、誰もが参加をして様々な「競技種目」でお互いに真剣に競技に取り組んでは、楽しい時を過ごしているものではないかと思う。そして、子供の頃の「運動会」と言えば、まず幼稚園での運動会をはじめ、小学校の運動会や町内対抗の運動会などもあり、その後は、中・高・専修（専門）学校、それに会社や各市区町村などが主催をする実に多種多様な「運動会」などもあるということであるが、毎年、春か秋には必ず定期的に催される最も代表的な「大会（催し）」の一つであるが、その「運動会」について、あれこれ思い浮かぶことを少し書き留めてみたいと思う。

例えば、「運動会」と聞いて、まず最初に、頭に思い浮かぶものは、一体、何かと問えば、それはもちろん、各人それぞれみな違って来るだろうが、多くの場合、やはり「運動会」が実際に催されている会場で、親や生徒たちの声援を受けながら、子供たちが一生懸命にかけてっこなどの競技に興じている姿^{すがた}などが、まず脳裏に鮮やかに浮かんで来るものではないかと思う。——ところで、その「運動会」の場合には、かなり前から校庭などにコースを作り、そこで何度も「運動会」に向けての様々な準備（リハーサル）などを積み重ねることが多いかと思う。そのように「運動会々場」などは、かなり前から、当日、朝早く、担当の先生や生徒などが協力をし合って、例えば、運動用具室からライン引きなどを持って来て、それを校庭でぐるぐる転がしながら、白線を引いて運動会用のコースを新たにしたり、また、なわ（ロープ）などを張り巡らして、コースと観客との境界線としたり、或いは、いかにも運動会らしい「入場門」や「退場門」なども、すでに必要な場所に飾り立てられていたものである。一方、頭上には、よく「万国旗」などを四方に張り巡らして、いかにも「運動会々場」の雰囲気を出したり、また、中央の所にテントを幾つか張り、その中に机や椅子或いは放送器具などを持ち込んで、関係者たちの運動会執行の本部などを作っては、運動会の準備も、大体、終わることになるかと思う。

一方、一般の生徒たちは、運動会前日の夜などは、「……明日の天気は、どうかなあ？」と気になって、ふだんよりも真剣に「天気予報」を観たりするものだが、また、朝起きた時に、小雨などが降っていると、今日は、運動会をやるのかなあ、どうなのかなあと判断し難く、花火が上がれば、やることになってはいるが、友だちか学校に電話をかけてちょっと聞いてみようかなあと思ったりもするものである。そして、昔は、母親がふだんより早く起きて、お昼に食べる「弁当」などを作ってくれたものであるが、今日では、昔のように家族と一緒に外で昼食を食べるのではなく、むしろ教室の中でお昼を食べるようになっている学校の方が、遙かに多くなっているのだそうである。それはともかく、子供たちは、学校に登校しては、教室で運動着に着替え、頭には帽子かハチマキをし、運動靴を履いて、校庭に出て、いよいよ「運動会」が始まることになるかと思う。

その場合、最初は、全校生徒が全員「入場門」の所に集まってから、昔は「天国と地獄」のような軽快な音楽が流れる中を順に行進をして、運動会々場に整列することになるかと思う。そして、全員が入場し終えたあと、校長先生をはじめ、様々な人の挨拶があり、そのあと、全員で準備運動のための「ラジオ体操」などを行なって、体をほぐし、それらのことがすべて終わったところで、再び、軽快な音楽が流れる中を順に行進をして「退場門」

から外に出てから、それぞれ学年やクラス別に割り当てられている所に行つて、そこに陣を取るようになるかと思う。そして、いよいよ最初の「種目」が始まることになるが、それでは、その運動会の「種目」には、一体、どのようなものがあると言ふのだろうか？

それは、もう実に多種多彩なものがあるかと思うが、例えば、「徒競走」をはじめ、「大玉転がし」や「ダルマ運び」また、「パン食い競走」や「ドジョウ掴み競走」、或いは「二人三脚」や「ムカデ競走」、さらに「借り物競走」や「障害物競走」、もちろん、最も代表的な種目の「紅白玉入れ」や「つな引き」など、また、昔あつて、今日ではあまり行なわれない「棒倒し」や「騎馬戦」、それに運動会の最後を飾る「リレー競走」、その他、もう実に多種多彩なものがあるかと思うが、それらについて、少し考えてみたいと思う。

一、徒競走

まず、最初は『徒競走』であるが、この種目は、一般には「かけっこ」と呼ばれているものであり、幼稚園や小学校の頃には、確か背の低い順に五、六人が一緒に走つて、（最近では四人前後が多く）、一番、二番、三番と決めていたのではないかと思う。それは、まず五人なら五人の人が、一緒に走る一番手の組になり、その後ろに同じ数の二番手の組がならび、その後ろに三番手、四番手の組というように順に腰を下ろして待機をし、そして、最初の組が、「位置について、用意ドン！」とピストルの音とともに、走り出したならば、後続の組は、順に前に詰めていき、それぞれ自分が走る番を持つことになるかと思う。そして、幼稚園や小学校の頃の「徒競走」の場合には、自分の「番」がだんだんと近づいて来るにつれて、胸が俄にドキドキして来て、そして、自分の「番」ともなれば、その「緊張感」は、まさに「ピーク」に達し、その後は、もう何がなんだか自分でもよく分からないような「精神状態」で、夢中になって走つたという想い出を持つ人も、意外に数多くいるのではないかと思う。その場合、まわりの声援などを受けながら、子供たちは、一生懸命に走るわけだが、時には途中で足が滑ったり、纏れたりして転んでしまう場合もあれば、また、走る子供同士の体がぶつかり合つて転んでしまう場合もあり、実に様々な「ドラマ」が展開されるなかで、抜きつ抜かれつつ、ひたすらゴールをめざして走りつづけ、そのゴールには白いテープを持った人が、待機をし、そして、一番早い人が、そのテープを切るとともに、次から次へと子供たちは、ゴールして来るわけである。その場合、昔は、一番から三番までの旗を持った人が待機をしていて、そして、一番の人は、その一番の旗を持つている人から一番のカードか何かをもらい、それをテントの係員のところに持つて行くと、確か一位と書かれた「賞状」（後で教室でもらったのか？）とともに、鉛筆やノート、その他の「賞品」なども、三位まではもらえたのではないかとおぼろに記憶しているが、今日では、多くの場合、「賞品」などはなく、それに加えて、一位から三位までの「賞状」などももらえるかどうかという場合も多いのだろう。しかし、各市区町村の運動会や会社の運動会の時などには、何らかの「賞状」（或いは表彰盾やカップ）などとともに、何かそれに見合った「賞品」などがもらえるようになっていのではないかと思う。

一方、そのような子供たちの活躍を観ている親たちの熱狂ぶりも、尋常ではなく、自分の子供が登場して来ると、親たちは、大声を張り上げて、もう体全身で一生懸命に応援をしているのははじめ、最近では、最新のビデオカメラで自分の子供の走る姿などを、

一生懸命にビデオに撮っている父親の姿なども、非常に増えているわけである。もちろん、子供たちは、自分たちのクラスメートを一生懸命に応援するわけだが、その場合、各クラス毎に様々な趣向を凝らした独自の「応援合戦」などが賑やかに展開されることも多いかと思う。例えば、多彩な仮装の衣装などで応援をするのを初めとして、チアガールが持つようなポンポンなどを振って応援したり、また、色々な言葉を書いたプラカードなどを高々と胸や上に掲げて持ち、もちろん、声を揃えてみんなで大声で応援をする場合も多く、もうワーワーキヤーキヤーと大変な騒ぎになるものである。

二、大玉転がしとダルマ運び

次に、大きなボールを転がしてリレーで遊ぶ『大玉転がし』や大きめのダルマをリレーで遊ぶ、いわゆる『ダルマ運び』などがあつたかと思う。これは、一般には園児や小学低学年ぐらいの子供たちが行なう場合が多く、（もちろん、大人の人たちが行なう場合もあるが、それはともかく）、その大きなボールには白や赤などの色が付いていて、それを二人か三、四人の人が転がしながら、向こう側の旗を回って戻って来るものである。その場合、大きなボールの上の方ばかりを両手で押していると、時には、その大きなボールに巻き込まれてしまい、そのボールの上に乗ってから下に落とされたりして、観ている人たちからもどつと笑いが生じたりすることもあり、そのようにこのリレーの途中では、何かとんでもない方向にボールが転がったり、また、子供の方がこけてしまったり、或いは他のボールとぶつかり合ったりして、もう大変であり、それゆえ、最初、優位であっても、順位は、どんどん変化をして、どのチームが勝つかは、全く予測もできないものである。

それは、もう一つの『ダルマ運び』などでも、全く同じことであり、その中が空洞になっている張りぼての「ダルマ」を、何人かの子供たちが手で直接ダルマを持って遊ぶような場合もあれば、ダルマを輿（こし）などに乗せて四人で遊ぶような場合もあり、そのどちらであれ、やはり途中でその大きめのダルマを地面に落としてしまったり、また、あまり急いで旗を回ろうとする時にも、よくその大きめのダルマを地面に落として横倒しになってしまう、それを元に起こそうと手間取っている間に、ほかのチームなどに追い抜かれてしまうことも多く、それゆえ、あわてず焦らず確実に行なうことが大事なことになるが、小さな子供たちにはまだそういうことはあまりよく分からず、ただもう夢中になって競技を行なっているものであり、だからこそ、すばらしいとも言えるものであり、もうどこで何が起こり、そして、どのようなレース展開になるかは、全く予測もつかないものであり、それゆえ、観ている人も、非常に面白い種目の一つになるのだろう。

また、最近では「大玉送り」という競技もあり、もちろん、それにもいろいろな競技の仕方があるかと思うが、例えば、基本としては、まず、台の上に色の付いた大玉が置いてあり、そして、「よいい、ドン！」で、一斉に、最初は各チームとも四人の子供たちが、その色の付いた大玉をできるだけ早く転がしては、それぞれ自分たちの列のところまで運び、その「列の先頭」のところから今度は大玉を上に向けて、それぞれ色の付いた「大玉」を自分たちの頭上で次から次へと両手でできるだけ早く渡して移動させていく競技であり、そして、その「列の最後尾」まで大玉を移動させたら、最初の四人がまたその大玉を受け取り、その「大玉」を転がしながら「旗」（或いは「コーン」）のあるところをまわ

って、再び、自分たちの「列の最後尾」まで戻ってきて、そこから、今度はその「列の最後尾」から「列の先頭」へと向けて、それぞれ色の付いた「大玉」を自分たちの頭上で次から次へと両手でできるだけ早く渡し、「列の先頭」まで移動させると、再び、最初の四人がその大玉を受け取っては、その四人は、できるだけ早く最初大玉が置いてあった台まですで大玉を転がして、その色の付いた大玉をその台の上に置くことが出来れば、それが「ゴール」となる競技である。そして、勝ったチームは、「やった！ やった！」と大喜びしては、また、二回戦、そして、三回戦へと、同じように子供たちは「大玉送り」を大騒ぎしながら楽しく行なっているものである。——ちなみに、小学校などの全校生徒が「赤白の二チーム」に分かれては、運動場の「トラックコース」には半分ずつ「赤白の二チーム」がずらって並んでこの競技を行なうという、実に大規模な「大玉送り」などもあり、そして、「よいい、ドン！」で、一斉に、全校生徒全員がもう夢中になって楽しく競技を行なうという、子供たちには非常に人気のある「競技種目」の一つになるのだろう。

三、スプーン競走

また、『スプーン競走』というものも、昔から非常にポピュラーな運動会の「種目」の一つとして、高い人気があるかと思うが、それは、食事で使うスプーンか何かお玉のようなものの中にピンポン玉かその他の玉を乗せて、何人かがリレーで次から次へと繋いで「旗」（或いはコーン）をまわって来ては、できるだけ早く最後の人が元の場所へと戻って来たチームが「勝ち」になるという素朴な遊び方になるかと思う。

ところで、この競技の「要領」（コツ）はと言えば、大事なのは、やはりスプーンの「持ち方」であり、それは、スプーンの「柄え」のところを側面から親指と人差し指でしっかりと挟はさむように持ち、そして、その右手は、前向きではなく、むしろ横向きにして柄えを小指と薬指とで下からしっかりと押さえて持てば、そのスプーンは全く動かない状態になるとともに、もう一つは、やはりあまり急いで走ろうとすると、スプーンからピンポン玉かその他の玉を落としてしまうことが多くなるので、それゆえ、急がすあせ焦らず確実に行なうことが、結果として、よりよい成績をもたらす最良の方法になるかと思う。とは言え、自分のチームが負けている状態で、スプーンを受け取った時には、どうしても早く相手に追いつこうと、無理な走り方にもなりやすく、かえってピンポン玉かその他の玉を下に落としてしまい、遅れてしまう場合も多く、この辺のところは、このような競技を行なう時の大きな「勝敗の分かれ目」になりやすく、全員が「急がすあせ焦らず確実に行なうこと」が出来さえすれば、たとえ一番にはなれなくても、三位以内には確実に入ることができるわけである。なぜなら、必ずあわてて走って、ピンポン玉かその他の玉などを何度か下に落して、遅れてしまうチームが、必ず、何組かは出て来るものだからである。

四、パン食い競走

次に、『パン食い競走』であるが、この種目は、数ある運動会種目のなかでも、非常に人気のある競技種目の一つであり、それゆえ、今ほとんどもかく、昔は、日本中で、毎年、行なわれた大小様々な運動会のなかで、この競技種目のない運動会大会というのは、ほと

んどなかったと言えるほどであり、それくらいピュラーな競技種目の一つということになるかと思う。——さて、その「パン食い競走」であるが、それは、二本の竹の棒の間にひもを張り、それにアンパンなどのパンをぶら下げたものを、手を使わずに口だけで直接くわえてもぎ取り、そのままゴールまで走り抜けた人が、勝ちになるというものである。この競技の「難しさ」は、一度ひもが大きくゆれてしまうと、パンも一緒に大きく揺れて、なかなか口だけでくわえることができにくく、次第にじれてきて、最後には手を使って、パンをくわえようとするものだが、それはもちろん、明らかに反則であり、そのような時には、当然のことながら、失格になるかと思うが、ただ、順位などがすでに決まっているような時には、それを黙認するような場合もあるのだろう。もちろん、それは、その時々、の審判員などの判断にまかせれば、それでよいことである。また、この競技の「要領」(コツ)としては、今日は、袋に入ったパンで行なうことが非常に多いので、その袋の下の「片隅」をひたすら狙って、確実にくわえるようにすることではないかと思うが、この競技は、自ら参加しても、また、他人が行なっているのも観ても楽しいものであり、なかなかパンを口にくわえられず、右往左往している姿なども、非常に楽しいものではないかと思う。

五、ドジョウ掴み競走

次に、『ドジョウ掴み競走』であるが、この競技は、昔は、よく行なわれた競技種目の一つであり、それは、コースの途中にドジョウの入ったバケツが、ふつう二、三個置いてあり、そのバケツの中に直接手を入れてドジョウを掴み、それを手に持ったままゴールまで走り抜けた人が、勝ちとなるものである。——この「競技」では、やはりバケツの中のドジョウをいかに素早くつかみ取るかが問題であり、そのためには、ドジョウのしつぽの方ではなく、むしろどじょうの頭の方を指を拡げて強く挟むように掴むのが、コツになるかと思うが、実際はなかなか思うようにはいかず、それがまた、これらの競技の面白さでもあり、時にはわざとドジョウを地面に落として土をつけ、掴みややすくする場合もあるが、しかし、それでは手間取って遅れてしまう場合もあり、それゆえ、実際の競技のなかで、その時その時に臨機応変に対応していくしかなく、それは、あらゆる場合について言えることであり、実際に行なうことによつてこそ、初めて、「頭の中」だけで考えていた時には、思いも寄らないような実に様々なことを、まさに身を以って学ぶことにもなるのである。——ところで、この競技が殆どなくなつてしまつたのは、一体、何故かと敢えて問うてみると、まず、当の「どじょう」自体の数が非常に激減しているとともに、子供たち自身は、その「どじょう」にさわるのが嫌だとか怖いとか気持ち悪いとか、また、動物愛護の面からどうかという問題もあるのかも知れない。とはいえ、例えば、子供のための「マスつかみ大会」や「どじょうつかみ大会」などを開催すれば、多くの場合、数多くの子供たちが参加をして、楽しく「マスやどじょう」などをあれこれ必死になつて捕まえようとしているものであり、それゆえ、本来、子供たちは、マスやどじょうなどを捕まえたりするようなことは、もともと嫌いではないということである。

六、二人三脚とムカデ競走

さて、次は『二人三脚』であるが、この種目も非常に古くからある種目であり、それゆえ、誰でも一度は、この競技に参加をして、楽しく行なったという経験や思い出を持つものではないかと思う。それほどポピュラーな種目であり、相手が決まると、お互いの足をひもで縛り、そのあと肩を組んでは、最初の一步は、ひもで縛った足を同時に出してから、イチニ、イチニと練習を始めることにもなるかと思う。というのも、この競技は、相手との呼吸が思うように合わない、足の運びがどうしても乱れ纏れてしまい、最後には、お互い地面に倒れ込んで、時には手足のひじやひざなどをすりむいたり、また、ひもで結んだところの足が、相手に引きずられて、かなり痛い思いをすることも多いかと思う。特に親子の「二人三脚」の場合には、足の長さや肩の高さなどが違うので、どうしてもでこぼこした感じの走りになり、時には転んだり、時には親の足の運びに子供が引きずられながらも、親子で楽しい時を過ごしたという思い出になっていくのだろう。また、多くの人数で、例えば、十人なら十人、十五人なら十五人で、この「競技」を行なう場合には、もう全員の呼吸がぴったりと合った「一定のリズム」で走らなければならず、一人でも足のリズムが合わなくなると、そこからばたばたと倒れてしまい、結んだ足なども非常に痛い思いをすることも多いわけである。逆に、全員の呼吸がぴったりと合って、思い通りに走れて、その結果、優勝などできた時には、非常に嬉しいものであり、もう「バンザイ、バンザイ！」と叫ばずにいられないような気分にもなるものである。それは、全員で一つのことを遂にやり遂げたという「満足感や達成感」などがあるからなのだろう。

それは、『ムカデ競走』などでもまったく同じことであり、やはり如何に全員の呼吸がぴったりと合った「一定のリズム」の足の運びにするかが、最大の要点であり、お互いばらばらの足の運びでは、思うように前には進まず、また、途中で何度もつまずいて、どんどん遅れてしまうので、そうならないためにも、イチニ、イチニのかけ声とともに、事前の練習などがどうしても必要不可欠な「競技種目」になって来るのだろう。——しかも、この「ムカデ競走」が最近では運動会の「人気種目」（メインイベント）の一つになりつつあるが、それは、特に中学生や高校生などが本気で行なうクラス対抗「ムカデ競走」であり、その理由は、他のクラスには負けるわけには行かないという対抗心からである。

そのためには、事前の練習がどうしても必要不可欠になるが、その場合、例えば、両手はどこに？ 肩、腰、羽交い締め、その他があり、また、先頭と最後は誰にし、目はどこを見て、足幅ほどの程度にし、そして、かけ声は、誰がどのように掛けるのか、その他、そのような事前の練習を十二分に行なうてから、まさに「いざ、本番」へと向かうことになるが、その最大の要点は、やはり如何に全員の呼吸がぴったりと合った「一定のリズム」の足の運びにするかということになるが、そのためには、一人一人が途中何があっても絶対に気持ちを切らさず最後までやり遂げるぞという強い気持ちを持って臨むことが何よりも大事なことであり、そうすれば、たとえ一番にはなれなくても、必ず、二、三番にはなれるものであり、それは、なぜかと問えば、それは、ほかのチームは、必ず、気持ちが悪く「一定のリズム」を壊しやすく、また、転ぶと、もうだめだという諦めムードになりやすいからである。

七、大なわ跳び

また、最近では『大なわ跳び』も非常に高い人気を集めているものであり、それは、十五人なら十五人、二十人なら二十人が一緒に跳び、そして、何回失敗なく跳べるかを競い合うものであり、この競技は、子供たちだけではなく、大人の人たちにも非常に高い人気を持っていて、それゆえ、(大人の人たちはともかく)、子供たちであれば、多くの場合、事前に何度も練習などを積み重ねては、いざ、本番へと、真剣に取り組むことにもなるのだろう。——さて、この競技は、まず大なわを回す二人の人が、常に一定のリズムで大なわを回せることが大事であるとともに、一緒に跳ぶ十五人なら十五人、二十人なら二十人の人たちは、上に垂直に跳ぶように心がけることが大事になるかと思う。そして、みんなで一、二、三、と、数を数えながら元気に跳ぶことになるが、その時に必要以上に高く跳ぶのはよくないので、常に「一定のリズム」で無駄な動きをなくして最小限度の安定した「跳び方」(それは「べた足ではなく、むしろつま先跳び」で行なうのがまさにベストになるかと思う。もちろん、そういうことは、すべて理屈であり、実際にはなかなか思うようにはいかず、そこがまた面白いところでもあるのだろう。そのようにこの「競技」は、みんなで一生涯懸命に跳んでは、何回失敗なく跳べるかを楽しく競い合っているものであり、最近、特に人気の高い競技の一つではないかと思う。——また、超高速で跳び続ける有名な「八の字なわ跳び」という「大なわ跳び」もあるが、毎年の春や秋の「運動会」などではほとんど行なわれることがないので、ここでは省略したいと思う。

八、借り物競走

次に、『借り物競走』であるが、この競技は、もう誰でもよくご存知のように、コースの途中に何か紙などが置いてあり、その紙を拾って、その紙に書かれている内容を見、その書かれている内容と「同じ物」(或いは「人」)などを連れてゴールで来た人から勝ちになるという楽しい「競技種目」になるかと思う。——ところで、最近では、もう一つの「借り物競走」があり、それは、例えば、まず、抽選箱の中に紙が入っていて、それを競技する人たちは、それぞれ一枚ずつ引いてから、用意ドンで、一斉にその紙の内容に合った「人」を探しに行き、そして、できるだけ早く連れて来るという競技方法であるが、その紙に書かれている「内容」としては、例えば、誰々に似た人とか、クールな二枚目とか、恋人にしたい人とか、その他、そのような色々な面白い内容の「人」を探し出して、その連れてきた人が、果たして、その内容通りの人かどうかを判定し、だめなら再び探し回らなければならず、そのようにして順位を決めるような「借り物競走」みたいなものが、中・高、或いは大人の人たちの間では、意外と盛り上がりつつあるのではないかと思う。——もちろん、一般の「借り物競走」であれば、当然のことながら、運よくすぐに見つかるような内容のものを拾えば、それを素早く見つけ出して、ゴールに向かうことができるが、逆に、運悪くなかなか見つけにくい内容の紙を拾い上げてしまうと、あちこちそれを探し回らなければならず、それだけ大幅に遅れてしまうものであり、それゆえ、この競技は、伏せてある紙の、どのような内容のものを拾い上げるかによって、勝敗が大きく左右されるものであり、参加している人たちの、言わばその時の運が試されることにもなるのだろう。

それは、次の『仮装競走』でも、全く同じであり、途中で伏せてあるカードの中から一

杖を拾い上げては、そこに書かれている衣装を、次の衣装が置いてある場所で、できるだけ素早く身につけては、ゴールへとかけ込むという面白い競技になるかと思う。それでは、この競技のどこがどのように「面白い」のかと言えば、それは、まずどのような内容のカードを拾うかによって、身に付けるのに簡単な衣装なのかどうかが決まるといふ、つまり、徒競走のように足の速さだけで勝敗が決まるのではなく、むしろどの衣装のカードを拾い上げるかという運の良し悪しが加味されて、しかもその衣装を素早く身に付けられるかどうかの機敏さ（きびんさ）も試されるものであり、それだけ変化に富んだ「競技種目」になるとともに、どうしてもあわてて衣装を身に付けようとするあまり、なかなか思うように着られず、しかも異性の衣装などを着る時の様子やその姿（すがた）が、だらしない恰好のほだけた状態にもなりやすく、そのようなところも、観ている人たちには、意外と面白い競技になるのだろう。

九、障害物競走

さて、今度は『障害物競走』であるが、これは、コースの途中にまさに多彩な「障害物」が置いてある「競技」であり、その「障害物」の種類は、その時の「運動会」によって実に多種多彩なものがあるかと思うが、例えば、学校の運動会などでは、途中に跳び箱やマット或いは平均台などが置いてあったり、また、横倒しの梯子（はしご）の中や網の下をくぐるような場合もあれば、また、白い粉の中に顔を突っ込んで口で飴（アメ）を探したり、また、パン食い競争があったり、或いは、ぐるぐるのバット十回などをして、体がふらふらになったり、また、太いズボンに両足を入れたり、自分の両足をひもなどで縛（しば）ったりして、ピョンピョンとうさぎ跳びのように前に飛び進んだり、さらに、段ボールの中に入って戦車のように転がして前に進むような場合もあるというように、実に様々な「障害物」があつて、それらを巧みにクリアしていく人もいれば、あちこちでこずつたり、また、ずっこけたりしている人たちも多く、そのような子供たちの様子を観ているだけでも楽しいものであるが、このような競技も基本的にはあまりあわてず確実にこなしていくほうが、結果として、よい結果になるのではないかと思う。もちろん、そういうことは、各人にまかせれば、それでよいことであり、子供たちは、それぞれに楽しく競い合っているものである。

十、紅白玉入れ

さて、運動会と聞いて、すぐに頭に思い浮かぶ「種目」としては、何と言っても、「紅白玉入れ」やまた「つな引き」などがあるかと思う。これらは、運動会では絶対に欠すことのできない必須の「競技種目」になるものであり、例えば、幼稚園の運動会などでも必ず行なわれるものであり、紅白に分かれた園児たちは、地面に数多く散らばっている玉を拾っては、それを「かご」にできるだけ数多く投げ入れた方が「勝ち」になるという単純な競技であります。——この競技は、まず係員の人たちが一人か二人で「かご」の付いた棒を立てて持ち、その「かご」に向けて、子供たちは、決められた制限時間の間、玉を投げ入れ続けるわけだが、その場合、子供たちは、でたらめに玉を投げ入れていることが多いかと思う。例えば、散らばっている玉を拾っては、それを一個一個でたらめに投げ入れたら、また、両手に玉を持って、それを一個一個投げ入れたり、その他、それらは、すべて

各人の自由ではあるが、強いて言えば、自分が一番玉を入れやすい場所から、幾つかの玉を両手でしっかりと持ち、そして、それをバスケットボールの「トス」（或いは「シュート」）のように、それを上に正確に投げ入れるという方法などは意外と有効であり、そのようにして決められた制限時間一杯まで、子供たちは、もう想い思いに玉を投げ入れては、合図とともに、投げ入れをやめ、その後は、立っていた棒を横に倒して、その「かご」から同時に、一、二、三、と、大声で数えながら、玉の上に投げ上げて「数」を数えつづけ、そして、相手の投げる玉がなくなったところで、まさに「勝敗は決する」ことになるが、多くの場合、最後まで数え終えたところで、一方が「勝ち」となり、勝った方は、「勝った！ 勝った！」と、その喜びを大きく表現することも多いかと思う。

*

*

ところで、最近の「玉入れ」は、従来の「玉入れ」とはまた違って、いわゆる「ダンスング玉入れ」というものであり、それは、会場に流れる軽快な音楽に合わせて踊ったり玉入れをしたりを交互に何度も繰り返すというものであり、その音楽もいろいろあるものがあるかと思うが、例えば、（メキシコの）チェッコリの音楽が流れる「チェッコリ玉入れ」であれば、まず、子供たちは、「かご」の付いた棒の周辺を遠巻きに円形に囲み、そして、流れるチェッコリの音楽、それは、「……チェツチェツコリ、チェツコリサ、リサンサマンガン、サツサマンガン、ホンマンチェツチェツ。……チェツチェツコリ、チェツコリサ、リサンサマンガン、サツサマンガン、ホンマンチェツチェツ」という歌詞であるが、その歌詞が流れている間は音楽に合わせて、子供たちは、元気に腰を振ったりの踊りを踊り、（笛の合図などで）、歌詞のない音楽が流れている間は、子供たちは、今度は元気に「玉入れ」をし合い、そして、歌詞のない音楽が終わると、再び、（笛の合図などで）、円形の線のところまで戻り、音楽に合わせて踊り出すが、それは、「……チェツチェツコリ、チェツコリサ、みんな踊れ、さつき踊れ、ホンマンチェツチェツ。……チェツチェツコリ、チェツコリサ、おしりを振って、さつき踊れ、ホンマンチェツチェツ」という歌詞であり、その歌詞が流れている間は音楽に合わせて、子供たちは、元気に腰を振ったりの踊りを踊り、（再び、笛の合図などで）、歌詞のない音楽が流れている間は、子供たちは、元気に「玉入れ」をし合うということを、何度か「踊り」と「玉入れ」とを交互に行ない、そして、流れる音楽が止まったところで終了であり、あとは、投げ入れをやめ、その後は、立っていた棒を横に倒して、その「かご」から同時に、一、二、三、と、大声で数えながら、玉の上に投げ上げて「数」を数えつづけ、そして、相手の投げる玉がなくなったところで、まさに「勝敗は決する」ことになるが、多くの場合、最後まで数え終えたところで、一方が「勝ち」となり、勝った方は、「バンザイ！バンザイ！」と、その喜びを大きく表現することも多いかと思う。そのように、この競技は、もう誰にもでき、しかも、団体で楽しく競い合える最もポピュラーな「競技種目」の一つになるのだろう。

十一、つな引き

一方、『つな引き』も非常に人気の高い種目であり、それは、子供たちだけで行なう場合もあれば、子供と大人とが入り交じった混合で行なう場合もあり、また、大人の人たちだけで行なう場合もあるというように、様々な「対戦」の方法があるかと思う。それはと

もかく、この競技は、ふつう三回戦まであり、最初に二勝したチームの勝ちとなるものであり、左右に分かれた子供たちは、用意された一本の長くて太いつなを手持っては、用意ドン、で一斉に思いっきり引つ張り合うものであるが、これは、非常に面白い競技なのである。というのも、この「つな引き」というのは、ただ単に思いっきり引つれば、それでよいというものではなく、やはりお互いの息がぴったりと合わなければ、それぞれの引っぱる力があちこちに分散してしまい、つなを力強く引き寄せる一つの「大きな力」(総力)にはならないものである。それゆえ、例えば、「オーエス」などをはじめ、「ワツシヨイ、ワツシヨイ」、あるいは「ソオーレ、ソオーレ」などと言った何らかのかけ声をかけ合う必要性が生じて来るとともに、やはり、「つなの持ち方、腰の落とし方、また、足の踏んばり方」なども、非常に大事になって来るものである。もちろん、そういうことにこだわらなくても、十分に楽しめるものであり、お互いもう「オーエス」をはじめ、「ワツシヨイ、ワツシヨイ」、あるいは「ソオーレ、ソオーレ」と思いっきりつなを引っぱり合うものであるが、例えば、一方が圧倒的な力強さでぐんぐん綱を引き寄せて、あっけなく勝負がつく場合もあれば、また、一方につなを引き寄せたかと思えば、また、一方に引きもどされ、なかなか決着のつかない場合もあり、そのような状態から、一方が最後の力を振りしぼって、やつとの思いで決着がつく場合も多いのだろう。そして、負ける時には、つなと一緒に体も引きずられ、また、足もばたばたとした「総崩れ」の形になることが多いかと思う。しかも、つな引きを行なった後には、手にマメができたり、また、からだ全身に疲労感がどつと出たりして大変であるが、それでも、小さな子供から大人の人たちまで、想い思いに一生懸命に競い合っては、楽しい時を過ごしているわけである。

十二、棒倒しと騎馬戦

また、学校では、最近、あまり行なわれない種目としては、「棒倒し」や「騎馬戦」などがあるかと思う。その最大の「理由」としては、やはり「危険性が高い」ということであり、確かに、この「競技」は、ほかの競技に比べて、その「危険性は高い」かも知れません。——というのも、「棒倒し」も「騎馬戦」も、相手と身体からだを直接ぶつけ合う「対戦型の競技」であり、それゆえ、どうしても相手との「小競り合い」の中で、様々いろいろなけがをしたり、また、時には、殴り合いの喧嘩ケンカに近いようなことが生じる場合もあるのだろう。

例えば、『棒倒し』というのは、お互いの陣地に長い棒を立てて持ち、用意ドンの試合開始とともに、お互い相手の陣地の長い棒を倒そうと、一斉に激しく襲いかかって行くものであり、それゆえ、もうわれ先にと必死になって棒にしがみついて、棒を下に倒そうとする人たちと、必死にその長い棒を守ろうとする人たちが、お互いにもう押し合いへし合いの凄まじい状態になる中で、相手より早く、その長い棒を地面に押し倒すか、或いは先端に付いている旗などを奪い取った方が勝ちになるというものであり、昔の「運動会」などでは、非常に人気のあった種目の一つになるのだろう。というのも、この競技は、本来、まさに「男の逞たくましさや男つぼさ」或いはまた「男の勇氣や果敢さ」などを競い合うものであり、それは、次の「騎馬戦」などでも基本的には、まったく同じことである。

つまり、『騎馬戦』というものは、上に乗っている人を下に押し倒すか、或いは上に乗っている人の頭に付いている帽子とかはち巻きなどを激しく奪い合うものであり、この「競

技」でも、相手の騎馬と直接ぶつかり合うには、それなりの「勇気や果敢さ」が必要であるとともに、相手に勝つためには、どうしても「男の逞しさや男ぼっさ」などが必要不可欠になって来るものである。逆に言えば、そういう「男の逞しさや男ぼっさ」或いはまた「男の勇気や果敢さ」などを養い育てるために生まれて来た「競技種目」でもあったのだろう。それゆえ、このような「競技」があまり行なわれなれないということは、逆に言えば、いわゆる「男の逞しさや男ぼっさ」或いはまた「男の勇気や果敢さ」などが、社会からそれほど強く要求されていない時代ということになるのかも知れない。それはともかく、例えば、プールの中、その他、今日でも様々な形の「騎馬戦」などが行なわれることもあり、男女ともに楽しく競い合っている、非常に人気のある「競技種目」の一つになるのだろう。

十三、リレー競走

最後に、『リレー競走』について、少し考えてみたいと思う。例えば、学校教育というのは、まさに「知育・徳育・体育」という、この「三本柱」をしっかりと教養育てることであるが、運動会は、その中の「体育」の成果（つまり「子供たちの身体が順調に成長していること」）を子供たちの親や家族の人たちに観てもらうための「催し」であり、それゆえ、わが子が元気に競技に取り組んでいる姿を観て、思わず目を熱くして涙を流す親がいたとしても、何も不思議なことではなく、むしろ、本来、まさにそういうために催される「大会」なのである。つまり、子供たちの身体が順調に成長していることの「発表会」が、まさに「運動会」ということであり、それゆえ、誰も観に来ない「運動会」などは、本来、全く意味のない「運動会」であり、家族や親戚の人たちが観に来て、初めて意味を持つ「大会」なのである。それゆえ、勝敗が問題なのではなく、元気に競技に取り組める身体に成長していることが、何よりも大事なことになるということである。

もちろん、「運動能力」が優れていることに越したことはなく、その力を、まさに真剣に競い合うものとして、いわゆる「リレー競技」があるということである。というのも、この「リレー競技」の場合には、ふつう走るのが速い人たちが選ばれて、チームを結成して来るものであり、それだけ運動能力の高い人たちの真剣勝負の「競技種目」になることが多いからである。――それは、まず「用意ドン！」のピストルの合図とともに、一斉にスタートをし、できるだけ速く走っては、次の選手にバトンスムーズに手渡したいわけだが、時にはバトンの手渡しに失敗をして、バトンを下に落としてしまう場合もあり、そうならないためにも、相手にバトンを手渡す時には、「ハイ」と言って相手の手の中にしっかりと軽く叩いて入れるのがコツであるとともに、事前に「準備運動」などもよくしておかないと、走っている途中で足がつかったり、縛れたり、或いは肉離れなどを起こすことも非常に多いので、十分に注意をしながら、真剣に競技に取り組んでは、楽しい時を過ごしてもらいたいと思うわけである。

十四、その他

その他、運動会では、子供たちが行なう吹奏楽団などの演奏を初めとして、男女が音楽に合わせて楽しく踊り合う、非常に懐かしい『フォークダンス』などもあり、昔は、男女

とも恥ずかしがったり、顔を赤らめて、かなりぎこちない動作で踊っていたものだが、今日では、むしろ男女とも積極的に楽しく音楽に合わせて踊っていることが多いのだろう。また、前々から何度も練習したものを見せるものとしては、例えば、子供たちによる『組体操』などがあり、それは、何人かが組になって、ピラミッドのようなものを組み立てるわけだが、先生の、ピーという「笛の合図」に合わせて、数多くの組の子供たちが、一斉に「同じ形」を組み立てていく様子は、なかなか壮観で見応えのあるものであり、子供たちも、真剣に取り組んでいるものである。また、踊りとしては、今や大人気の「よさこいソーラン節」その他などを力強く元気よく踊ったり、また、子供たちだけではなく、婦人たちによる『民踊』などが、よく踊られることもあるというように、実に数多くのものがあるかと思う。もちろん、その他にも、例えば、最近の「運動会」では、デカパン競争をはじめ、後ろ向きに走ったり、二人で風船を挟んで落とさないように走る「二人でサンドイッチ」や「〇×クイズ」、その他、実に多種多様な独自の趣向を凝らした「競技種目」などが、数多く生み出されていて、それらに参加した小さな子供から大人の人たちまで、もう夢中になってその競技に取り組んでは、お互いに楽しい時を過ごしていることになるのだろう。

十五、結び

そして、翌日か翌々日、学校や会社などに行けば、先日の運動会は、どうだった、こうだったと話題の中心になることも多く、また、足が痛いとか、どこがどうだとか、様々な話にも色々な「尾びれ」が付くことも多いのだろう。そのように「運動会」というのは、子供たちにとっては、毎年、行なわれる一つの大きな「年中行事」になるとともに、大人の人たちにとっても、会社や各市区町村などが主催する「運動会」などに参加するのを初めとして、自分が子供だった頃の「運動会」などは、誰にとっても非常に懐かしい様々な「思い出」が甦って来るものであり、今度は、親の立場から、自分の子供の「運動会」を自分の頃と比較対照しながら見学したり、また、自ら競技に参加したりしているものがあり、それゆえ、多くの人たちにとって「運動会」というのは、一生の間、何らかの形で関わるものが、非常に多いものであり、それだけ誰にとっても、非常に「親しみ」を感じるものになるのだろう……。

*

*

動物捕り

動物捕り

子供たちの数多くの遊びのなかでも、ごく身近にいる多種多様な動物を捕って遊ぶことも非常に盛んであり、例えば、フナやハヤなどの魚やザリガニ捕り、また、カエルやオタマジャクシを捕まえたり、また、多種多様な昆虫類やその他の動物をとらえて遊ぶのも楽しいものである。例えば、カブトムシやクワガタムシなどを捕まえたり、ホタル狩りやチヨウチヨウ捕り、また、トンボ捕りやセミ捕り或いはコオロギやバッチ（イナゴ）などと、また、トカゲやアリなどを捕まえたり、或いは天とう虫やカタツムリを捕まえたり、また、少し怖い感じのするコウモリやヘビ或いはクモやハチ或いはカマキリなどを捕まえたり、その他、モグラやウサギ或いは小鳥や水生昆虫（ゲンゴロウ、タガメ、ガムシ、ミズカマキリ）や海辺でのカニや貝殻、また、ドジョウやナマズさらにウナギなどと、もう多種多様な動物をあれこれ捕まえたり、また、捕ったりして遊ぶことができるわけである。

例えば、近くの小川や水辺などに一人で、或いは友だちなどと一緒に出かけて行って、その中にあみを持って入り、草むら近くのところを片足でじゃぶじゃぶ音を立てて川ぎかなを追いついで、たま網などですくって捕ったり、また、大人の人であれば、よく「四つ手網」などで魚を捕ったり、また、時には大人の人たちも入り交じって小川の水をせき止めて、よく「かいぼり」と言うのをやりました。それは、まず川ぎかなが数多くいそうな場所、しかもあまり水かさのない時を選んで、当時は「橋の下」が多かったと思うが、その小川を全部（或いは三分の二ぐらい）を多種多様なもの（例えば、土嚢を初め、石や板や引っこ抜いた雑草その他）等を使って、水面よりも高く積み上げてはせき止め、そして、残した場合の「三分の一」は、上流からの水を下流に流していくためのスペースとします。そして、バケツ（或いはポンプ）などを使って、せき止めた領域内の水を数人でどんどん外に出していく一方、ほかの人たちは、積み上げた「ていぼう」が崩れたり水漏れなどしていないかを注意しながら、より丈夫なていぼうにしたり、また、あみで川ぎかなを掬ったりするわけである。そして、だんだんと水が少なくなると、どろんこの川底では、あちこちでピチャピチャとはねたり動いたりしているフナやハヤなどの姿が見えて来る。そして、この時こそが「かいぼり」の中でも最もわくわく興奮する時であり、「あつ、でつかいのがいるぞ」、「あつ、今、そつちに何かが動いていったぞ」、「あつ、ナマズだ、大きなナマズがいるぞ」などと、大声で言い騒ぎながら、それらを手やあみなどで夢中になって捕まえたりするのは、非常に楽しいことなのである。そのような「かいぼり」を行なつて、実に様々な川ぎかな（例えば、フナ、ハヤ、コイ、ドジョウ、ナマズ、ウナギ、その他）などを捕まえたという経験は、多くの人たちにあるのではないかと思う。

*

*

ところで、最近では、井の頭公園の池の「かいぼり」などをはじめ、日本のいたるところで大小様々な「かいぼり」などが盛んに行なわれているが、その「かいぼり」というのは、本来、「……池や沼の水をすべて抜いて底にある泥（ヘドロ）などをさらい、そこにいる魚などの生物を捕らえて、天日に干すことである」とある。そして、捕まえた魚などの生物は、いわゆる「保護対象魚」（在来種）と「駆除対象魚」（外来種）とに分類して、新しい水を入れたあと、保護対象魚（在来種）は、池や沼に再び帰してやるということである。つまり、「かいぼり」とは、すなわち、「……水質改善や外来生物などを駆除して、

生態系を回復させるのがその主たる目的である」ということである。

ちなみに、いわゆる「保護対象魚」（在来種）としては、例えば、モツゴ、ヨシノボリ、ギンブナ、ナマズ、ウナギ、ニゴイ、ヌマチチブ、ニホンイシガメ、クサガメ、ニホンスッポン、テナガエビ、スジエビ、その他などがいて、一方、「駆除対象魚」（外来種）としては、有名なブラックバス（オオクチバス）をはじめ、コクチバス、ブルーギル、ギギ、ソウギョ、ハクレン、アオウオ、カムルチー、ニジマス、ニシキゴイ、また、ミシシッピアカミミガメ（幼名ミドリガメ）、クーターガメ、カミツキガメ、アビゲーターガー、その他などがあるということである。

一、アメリカザリガニ

また、池や田んぼなどにいるザリガニを捕まえたりすることは、子供たちは、大好きであり、しかも誰にでも非常に簡単に捕まえることができるわけである。それゆえ、どのような方法でもよいわけだが、例えば、ザリガニを捕る時には、正面からではなく、むしろ後ろの方からあみを近づけながら、ザリガニの前の方を棒などで驚かして、ザリガニが後方にあとずさりして、あみの中に入ったところを掬い上げて捕まえたり、また、川の中にいるザリガニを釣り上げるためには、スルメなどのエサを縛りつけた糸を棒から垂らしては、ザリガニが、一方のハサミでエサをしつかりと挟んだところを、釣り上げても非常に面白いものである。また、ザリガニのハサミに挟まれるとかなり痛いので、ザリガニを手でつかむ時には、後方からゆっくりと手を伸ばして、ザリガニの背中のところを掴むようにすれば、ハサミに挟まれずにすむわけである。さて、そのようにして捕まえたザリガニは、家に持ち帰って、バケツや水そうなどの中で飼うことになるかと思う。そして、そのザリガニのエサとしては、煮干しやミミズ、野菜や肉類、その他などを与えて、そのザリガニの動きを観察したり、また、ザリガニ同士を戦わせて遊んでも楽しめるものである。

ところで、そのアメリカザリガニは、一九二七年（昭和二年）に、アメリカから「食用ガエルのエサ」として輸入されたものであるが、その一部が養殖場から逃げ出し、そして、一九六〇年頃までには、北海道を除いた日本各地にあつという間に広まったということであり、日本固有の「ザリガニ」も、東北や北海道南部の水の澄んだ溪流などには、今でも生息しているのだそうである。また、子供の頃には、捕まえたアメリカザリガニのしつ尾の部分をやでて、それをしよう油などに付けて食べると、エビと同じような味がしたものであるが、もちろん、今日では、もうそういうこともないのだろう。

ちなみに、アメリカザリガニを数多く一緒に飼うと共食いを始めるので、できるだけ一緒に飼わない方がよく、また、その寿命は、五年ぐらいだということである。

二、カエル

また、多くの子供たちは、特に男の子であれば、なおさらカエルが好きであり、近くの水辺や田んぼなどにカエルを捕まえに行くこともあるかと思うが、子供の頃には、よく好んで「カエル捕り」に行ったものである。そして、そのカエルを捕る時には、あまり足音を立てずにそっと近づき、池や田んぼの水辺や草むらなどに隠れているカエルの姿を見

つけたならば、なるべくアミは見せないように近づけ、そして、素早い動作でぱつとタイミングよく捕まえないと、カエルに水の中に逃げられてしまうことも多いかと思う。もちろん、そこで逃がしたカエルが非常に大きくて、そのカエルをどうしても捕まえないと思うならば、翌日、アミを持って同じ場所に行けば、昨日と全く同じところにちゃんいることが多いので、今度は、逃がさないようにタイミングよく捕まえたらいいかと思う。

ところで、カエルの「最大特徴」というのは、目の前で動くものには何でも飛びつくという習性であり、それゆえ、例えば、田んぼなどにいる小さなカエルなどを釣る時には、棒から垂らした糸に何か小さなものを結びつけて、目の前で上下にふれば、まだ小さなカエルなどは、すぐに飛びついて釣れるものである。また、大きめのカエルを釣る時には、一般には、棒や釣ざおから何か虫や疑似餌などをつけた糸を垂らしては、それをカエルの目の前にそつと垂らして、上下に少しゆり動かすと、カエルは、その目の前の餌にバツと跳びつくので、その跳びついたところを、釣り上げて捕まれば、それで十分楽しめるものである。——ただ、例えば、つり針などで釣ると、カエルがそのハリを飲み込むこともあって、そのハリを取り外すのがなかなか大変になるので、やはりつり針はやめて、えさを縛り付けるかアミで捕まえるのが、いちばんよいのだろう。そして、そのようにして捕まえたカエルを家に持ち帰り、外にある水道場のところで、足にひもなどを付けて飼ったりしたものである。そして、カエルが水の中で泳ぐ姿を見たり、また、地面の上でジャンプなどさせたりしても楽しめるものである。また、近くの池や田んぼなどにいるオタマジャクシを、あみで掬って捕って帰り、そのオタマジャクシから、どういふふうにかエルへと変化していくのかを、飼ってじっくりと観察したり、と、いろいろと楽しむことができるかと思う。また、産卵期に盛んにゲロゲロと鳴くのは、オスであり、そこにメスのカエル（時にはオスのカエル）も集まって来て産卵を行なうのだそうである。その場合、オスは、近寄ってくるカエルに何でも抱きつこうとするが、相手がオスの場合には、独自の鳴き声を出して、すぐに離れてしまうのだそうである。

三、魚釣り

また、魚釣りも、子供たちの間では非常に高い人気を集めている遊びの一つであり、近くの川や池或いは沼や湖などに出かけて行つては、釣りを楽しんでいるものである。ところで、ふつう川や池或いは沼や湖などにいる淡水魚を釣る時には、餌としては、ミミズや赤虫、さしやゴカイ、ルアーやねりえ、その他などが主であり、そして、近くの川でよく釣れる場所としては、一般に、水草のほとりやくいそば、また、流れの淀んだところや川と川との合流するところ、或いは水門のそば、その他などがよく釣れる場所になるかと思う。そして、釣りに行く前日などには、よく「仕掛け」を作ったり、確認したりするものである。例えば、浮子釣りの「仕掛け」を作る場合には、まず最初に、つり糸（みち糸）にゴム管を通しておき、それから、そのつり糸（みち糸）の先端を「ちちわ」（八の字結びで作った輪）にするが、それは、釣竿の先端に付いている「リリアン」とその「ちちわ」を結びつけるためである。そして、もう一方も「ちちわ」（八の字結びで作った輪）にして、「丸かん」（小さな丸い金具）に結びつけることになる。そして、その「丸かん」の上に「おもり」（板おもりか割りおもり）を付けることになるが、しかし、「丸かん」を使

わずにみち糸に直接「ハリス」（針に付いている細い糸）を結びつけてもよく、その時には、「おもり」は、その結び目に「板おもり」を付けることになるわけである。

そして、もちろん、どのようなサカナを釣るのかによつて、それぞれ「仕掛け」も、当然、みな違つて来ます。——例えば、マブナ釣りであれば、つり糸（みち糸一号）、ハリス（〇・ハ号）、はり（そで形三号）、おもり（板おもり）、そして、エサ（ミミズ、赤虫、ゴカイ、ねりえ、その他）ということになるかと思う。また、「浮子」にも実に多種多彩なものがあり、例えば、玉ウキやトウガラシウキ、棒ウキや独楽ウキ、また、ヘラブナ専用のヘラウキ、その他、実に多種多彩なものがあり、しかも釣るサカナがどの辺にいるかによつて、それぞれエサを「水底に這わせる、水底すれすれ、水底から少し離す、その他」などのどれかに合わせて、その深さ（浮子の場所）を設定することになるわけだ。それに加えて、「エサ」が極めて重要なポイントであり、しかも、そのエサの「付け方」（例えば、ちよん掛け、通しざし、房がけ、その他）なども、非常に大事なことになるかと思う。

そして、実際に川や池或いは沼や湖につり糸を垂らせば、やがて「浮子」がピクピクと動く（引く）ことになるが、それが、いわゆる「あたり」である。そして、浮子がピクピクと動き始めると、俄に心臓がドキドキするような「感情」の起伏に襲われるものであり、そのような「感情」の起伏の中で、その「あたり」（浮子の動き）に対して、どのような時にどのようなようにしてサオを上げたらよいのか、その微妙な「タイミング」を推し計るのが、すなわち、「合わせ」である。もちろん、その「合わせ」は、サカナによつてそれぞれみん違つて来るものである。例えば、マブナであれば、浮子がピクピクと軽く動いている状態から、浮子が水の中により深く持つて行かれたその時に、タイミングよくサオを上げれば、ぐぐつと持つて行かれるような手応えで、マブナがかかっていることが多く、その瞬間（或いは「最初の当たり」）から、そのサカナを釣り上がるまでの時間こそは、まさに「釣りの醍醐味」ということになるのだろう。そして、その釣れたサカナは、ふつうはバケツや「びく」という竹や藤で出来たものやアミだけで出来た「びく」の中に入れることになるかと思う。もちろん、溪流では、イワナやヤマメ、また、湖では、ニジマス、コイ、ヘラブナ、ブラックバス、冬のワカサギ、そして、川の中流では、アユ、ニジマス、ウグイ（ハヤ）、オイカワ、コイ、フナ、それに加えて、いわゆる「ヘラブナ釣り」なども、釣りの愛好者たちには、非常に高い人気を集めているものになるかと思う。

四、海釣り

一方、海釣りは、陸釣り（堤防釣り、砂浜釣り、磯釣り）と沖釣り（船釣り）とに大きく二つに分けられるかと思う。そして、護岸や堤防付近では、子供たちも数多く釣りを楽しんでいゝるものであり、そこでは、例えば、ハゼ、アイナメ、メゴチ、ウミタナゴ、小アジ、カレイ類、その他などが数多く釣れるかと思う。また、河口では、ハゼ、イシモチ、スズキ、ボラ、クロダイ、カレイ類、そして、砂浜では、投げ釣りによる、シロギス、イシモチ、カレイ類、その他、さらに磯釣りでは、クロダイ、メジナ、イシダイ、カサゴ、ハタ類、その他などが釣れるかと思う。一方、沖釣り（船釣り）であれば、海に生息している実に多種多彩なサカナのうちの多くを釣り上げて楽しむことができるわけである。例えば、マダイ、メバル、イカ類、カレイ、ヒラメ、フグ、シイラ、アジ類、クロダイ、ア

イナメ、スズキ、ハタ類、カサゴ、キンメダイ、その他、数多くのサカナが釣れることになるかと思う。また、いわゆる「トローリング」(引き釣り)では、例えば、カツオ、マグロ、そして、有名なカジキ類などの、極めて大きなサカナを全身の力を振りしぼって、その大型サカナを何時間もの「フアイテングタイム」(魚との格闘時間)をかけた果てに、やっとの思いで釣り上げて楽しむことも、非常に盛んに行なわれているものである。

ところで、釣りと言えば、いわゆる「スピニング・リール」を取り付けた釣りざおで、魚釣りを行なうことも非常に多いかと思う。そして、そのそれぞれのサカナに合わせた「仕掛け」を遠くに投げ入れては、狙いのサカナを釣ることになるが、そのような「投げ釣り」ができるようになることが、いかにも本格的で一人前の「釣り師」になったようなカッコ良さなども手伝って、子供たちにも非常に人気の高いものである。――例えば、護岸や堤防からの「ハゼ釣り」であれば、みち糸(三号)、先糸(二号)、ハリス(一号)、ハリ(そで型六号)、おもり(なす型六号)、エサ(ゴカイ、ミミズ)ということになるかと思う。そして、そのような「仕掛け」を投げざおで海の中に投げ入れ、やがておもり(なす型六号)が水底に着いたならば、その水底を這わせるようにしながら、時々、動かしてみる。そうすると、ハゼがその動いたエサにくいついて弱い当たりが生じ、やがてぐぐつと引くような時に「合わせ」てリールを巻き上げれば、ハゼが釣れていることになるかと思う。もちろん、そのように運よく釣れる場合もあれば、また、逃がしてしまう場合もあるだろうが、そのどちらであつても、子供たちは、それぞれ思い思いに魚釣りを心から楽しんでるものである。また、大人の人たちであれば、浜辺での投げ釣りや岩場での磯釣り、そして、乗り合いの船に乗って「沖釣り」に出て行けば、その広々とした海上の「大海原」で本格的な「海釣り」を、もう思う存分に楽しむことができるわけである。

そのように「魚釣り」には、「川釣り」と「湖沼釣り」それに「海釣り」などがあり、しかもそれらがまた、その釣り場や魚の種類或いはまた季節などによって、それぞれ実に多種多様な「釣り方」や「仕掛け」などがあるということである。そして、日本だけでも約七七〇万人前後の釣り人口があるそうであるが、それだけ小さな子供から大人の人たちまで、非常に幅広い人気を得ているものである。そして、例えば、陸釣りやボート釣り或いは船釣り、また、浮子釣りやミヤク釣り或いはめくら釣り、さらにルアー釣りや毛ばり釣りなどと、その時々釣りの場やサカナ或いは季節などに応じて、それぞれ思い思いにその「仕掛け」も多彩と替えながら、釣りをより深く心から楽しんでいるものである。また、近くの「釣り堀」などに出かけて行つては、手軽に「釣り」を楽しむこともできるし、また、最近では様々な魚を川に放流しては、その川で、例えば、子供たちに魚のつかみ取りをさせたり、或いは子供のための「釣り教室」や大小様々な「釣り大会」などが催されたりして、子供たちが「釣り」を楽しむということも、非常に多くなって来ているのではないかと思う。

五、河原遊び

また、子供の頃には、よく近くの「河原」でいろいろと遊び合うのも非常に楽しいことでした。例えば、魚釣りをはじめ、夏には海水パンツをはいて水の中に入り、友だちとばしやばしやと勢いよく水のかけっこをしたり、或いは水泳ぎなどをして思い思いに楽しむ

ことができたわけである。また、そのような時には、水中メガネをかけて、水の中にもぐり、手にヤスやモリなどを持って、水中の川ざかなを捕まえたりしたものである。また、どろどろとした砂を上からたらたらして砂の城を作ってみたり、また、手でいろいろな砂山を作ったり、穴を掘ったりしても楽しめるものである。また、浅瀬の流れのところ、石などをV字型に並べ揃えて、そこに「うけ」を仕かけ、魚が水を上ってその中に入るように仕掛けては、翌日、どのくらい魚が捕れているかを見に出かけ、そして、ハヤ（ウグイ）などが数多く取れていると非常に嬉しかったものである。また、水面に平べったい小石を水平に投げつけ、何回水を切ることができるかを競い合ったりしたものであるし、また、河原にごろごろと転がっている「石」を幾つも積み上げたり、また、時には珍しい石（例えばさくら石など）やきれいな色や形をした石などを拾い集めたりしたものである。そのように子供たちは、それぞれ思い思いに近くの「河原」で実に多彩な遊び方をして楽しく遊び合ったものであるが、子供の頃にはそのようにして近くの「河原」で楽しく遊び合ったという経験や思い出を持つ人たちも、非常に数多くいるのではないだろうか。

六、カブトムシとクワガタムシ

一方、『昆虫捕り』なども、子供たちの間では、大変な人気を集めているものである。もちろん、最近では、デパートやペットショップなどに行けば、カブトムシやクワガタムシ、或いはそれらの幼虫なども売られているので、それらを買って来ては、家で育てている場合も多いのだろう。しかし、一方、カブトムシやクワガタムシなどを、わざわざ遠くまで出かけて行って捕まえたり、また、近くの雑木林などにいるカブトムシやクワガタムシなどを捕まえに出かけるといふ、本来の「昆虫捕り」も盛んになって来ています。そして、ふつうカブトムシやクワガタムシなどは、クヌギやコナラなどの雑木林に棲んでいて、そこで「樹液」などをなめて生活をしているものである。そして、カブトムシは、昼間は、落ち葉の下や土の中で休んでいるが、一方、クワガタムシは、樹の上や皮下（ひか）の中で休んでいるものである。そして、両方とも夕方から活動を始めて、夜の間は、木の幹の樹液などを吸ってまわり、そして、夜明け前には戻って来るのだそうである。それゆえ、クワガタムシの場合には、昼間、クヌギやコナラなどの雑木林に行くと、その木の幹を強く叩くと、上からクワガタムシやその他の昆虫などが落ちて来るものである。一方、カブトムシ（クワガタムシも含めて）は、夜になってから懐中電灯や虫かごなどを持って、雑木林の茂みの中に入って行き、木の幹の樹液などをなめているのを捕まえたりします。また、木と木の間に大きい白い布を少しゆるめに張って、懐中電灯や何か強いライトで明るく照らしておく、その明かりに誘われて様々な虫がそこに集まってくるので、そのようにして捕まえることも出来るわけである。また、昼間、クヌギの木などに「甘い汁」などを塗っておけば、夕方から夜にはカブトムシやクワガタムシなどが集まっているので、それを捕まえるに、その日の夜（或いは午前二、三時頃に起きて）、出かけたりすることもできるわけである。

そして、捕まえたカブトムシやクワガタムシなどは、虫かごの中に入れて家に持ち帰り、家にある大きめの飼育箱に入れて飼うことになるが、ふつう飼育箱の中には腐葉土（クワガタは木くずなど）や朽ち木などを入れて湿り気を保ちながら、エサとしては、ハチミツ

や砂糖水、或いはリンゴなどの果実類を与えることになるかと思う。——ところで、カブトムシの成虫は、夏の終わり頃に、「土の中」にタマゴを産み、そのタマゴは、一週間ぐらいで「幼虫」になり、その「幼虫」は、堆肥や枯れ葉などを食べて生きているのだそうである。そして、冬の間は、土の中で過ごし、翌年の六月頃に「さなぎ」になり、やがて七月頃に「成虫」になるが、カブトムシは、成虫になってから、一、二ヶ月ぐらいで死んでしまうのだそうである。一方、クワガタムシは、幼虫期が一年から数年であり、その「幼虫」は、朽ち木などを食べて成長し、やがて「さなぎ」から「成虫」(クワガタムシ)になり、その「成虫」(クワガタムシ)も、その年に死んでしまう場合もあれば、コクワガタやヒラタクワガタのように、確実に冬を越すことができるものもあり、また、オオクワガタムシなどは、何年も(五年ぐらい)生き続けことができるのだそうである。

ところで、飼育箱で飼っているカブトムシやクワガタムシの動きなどを観察して楽しんだり、また、時には、カブトムシの背中に糸を縛りつけて、空中に放り投げると、カブトムシは、羽根を拡げて空を飛ぶので、そのようにして飛ばして楽しんだり、また、カブトムシは、かなり力持ちなどで、カブトムシの角のところに糸をつけて、様々なものを運ばせても楽しめるものである。また、クワガタムシは、指で体に触れると、大きなあごを大きく拡げて威嚇するような恰好をするので、そこに何か物を挟ませて遊んだり、また、カブトムシ同士やクワガタムシ同士を戦わせたり、或いはカブトムシとクワガタムシとを戦わせて、どちらが強いかを確かめてみても楽しいかと思う。もちろん、外国産のヘラクレスオオカブトムシとアトラスオオカブトムシなどが戦う動画なども、子供たちには大人気であるが、それはともかく、オスとメスを一緒に入れて飼えば、自然とタマゴを産みつけるので、その幼虫を大事に育てて、来年の七月頃には、カブトムシの成虫が、土の中から出て来るのを楽しみにしている子供たちも、非常に数多くいるのではないかと思う。

七、ホタル

また、最近では、『ホタル狩り』も盛んであり、各地でゲンジボタルやヘイケボタルなどの「幼虫」を保護していて、夏の夜の空に青白い光を放ちながら妖しく飛び交うホタルを、みんなで観賞して楽しもうと、ゆかた姿の子供たちも連れて、多くの人たちが集まったり、想い思いにホタルの演じる「初夏の風物詩」などを心ゆくまで楽しんでいるものである。もちろん、そのホタルの「発光器」は、オスもメスも「腹部」にあるが、ただオスの場合、「腹部(後方I・2節)」の両方の所にあるのに対して、メスの場合は、「腹部(後方2節)」の所だけにあつて、雄ボタルは、雌ボタルが放つその妖しい光に誘われて交尾をするのだそうである。そして、その「発光」は、「ルシフェリン」という物質がルシフェラーゼという酵素の存在のもとで酸素と反応して「起こり、しかも熱を出さない「光」だそうである。もちろん、そういうことは、ともかくも、夏の夜の空に青白い光を放ちながら妖しく飛び交うホタルを、「初夏の風物詩」として心ゆくまで観賞して楽しもうという「催し」(集い)などは、今後、日本の各地でますます盛んになっていくのだろう。

ところで、ホタルは、六月の下旬頃に、そのような妖しい光を放ちながら、オスとメスとは、葉の上で交尾をして、交尾したメスは、あちこち適当な産卵場所を求めて飛びまわり、そして、タマゴ(約五〇〇〜一〇〇〇個)は、水辺のユケに産みつけ、かえった幼虫

は、自然と「水の中」へと落ちるのだそうです。また、成虫のホタルというのは、十日から十五日ぐらいで死んでしまうのだそうであるが、一方、タマゴのほうは、七月の上旬には、ふ化して「幼虫」になり、その「幼虫」が（水の中）で冬を越して、翌年の五月中旬頃に「さなぎ」となり、そして、六月の中旬頃には「成虫」になるという「卵↓幼虫↓さなぎ↓成虫」といった「成長過程」を経ることになるわけだ。そして、昔は、ホタルは死んだ人の「魂（靈魂）」の化身と考えられていたそうであるが、今日では、夏の夜の空に青白い光を放ちながら飛び交うホタルの演じる「初夏の風物詩」を、みんなで心ゆくまで觀賞して楽しんでいられるものである。そして、そのようなことが、毎年、心ゆくまで楽しめるためにも、やはり「水や土壌の汚濁」などを少なくして、ホタルが安心して生息できるような豊かな「自然環境」を取り戻すことが、何よりも必要不可欠になって来るのだろう。

八、セミ

また、初夏から秋にかけては、様々な『セミ』の鳴き声が聞こえて来るかと思うが、例えば、ジージーと鳴くアブラゼミや、チーチーと鳴くのが、ニンニンゼミであり、カナカナと鳴くのは、ヒグラシ（カナカナ）であり、また、ミンミンと鳴くのは、ミンミンゼミであり、そして、オーシーシクシクと鳴くのが、ツクツクボウシである。

ところで、その「セミの一生」というのは、まず樹皮の下などに産みつけられたタマゴは、翌年の梅雨の時期に「幼虫」となり、その「幼虫」は、木から下りて、土の中で生活をするようになるが、その「土の中」での生活が非常に長くて、主に木の根の汁などを吸って生活している。——例えば、ツクツクボウシは、約一〜二年、アブラムシとミンミンゼミは、約二〜四年、クマゼミは、約二〜五年、そして、ニイニイゼミは、約四〜五年ぐらいとされているが、むろん、それらは、それぞれ育つ「環境や個体差」などによっても違いは生じて来るものであり、長い間、その「土の中」で十分に成長した「幼虫」から、やがて、夕方頃、地上に出て来て、近くの木の幹に登り、そこで日没頃から「脱皮」を始めて、約二、三時間ぐらいで「成虫」（セミ）となるのだそうである。そして、その「成虫」（セミ）というのは、木の幹の「樹液」を吸って生きているが、オスもメスも「種族保存欲」（それは「交尾と産卵」とを終えて、約一ヶ月ぐらいで死んでしまうのだそうである。また、セミの「発音器」は、オスのセミの「腹の基部」にあり、その「発音筋」を収縮させて音を出し、それが「共鳴室」で拡大されて、大きな音となって外に出て来るのだそうであるが、鳴くのはオスだけである。

一方、子供たちは、手にあみと虫かごを持って、セミの鳴いているところに出かけて行っては、セミが深く鳴き入っているところを、背中からあみを近づけてパットと伏せて捕ったり、或いは捕る前に逃げられたりしながらも、「セミ捕り」を心から楽しんでいるものである。また、子供の頃には、あみではなく、いわゆる「とりもち」というもので、セミをくっ付けて捕ったりしたものである。それは、ネバネバとして「白い餅」のようなものであり、ふだんは、水の入った「器の中」に入れておきます。そして、その「とりもち」を何か棒などに伸ばして付けるわけだが、その場合、自分の手はもとより、その棒にもたっぷりと水をつけてから、「とりもち」を付けていかないと、その「とりもち」がべったりと棒にくっついてしまい、あとで取る時に非常に苦労するので気をつけなければなら

ず、また、自分の手に「とりもち」がつかないように、何度も手を濡らしながら、その「とりもち」を棒に伸ばしていくことになるかと思う。それは、棒から「とりもち」を取る時も、まったく同じであり、濡れた手で、今度は伸ばした「とりもち」を逆に丸めながら取るようにするわけである。その「とりもち」の付いた棒で、木の幹や電柱などで鳴いているセミの背中にペタッとくっ付けてセミを捕るわけだが、ただこの「とりもち」の最大の欠点は、セミに「とりもち」がべったりとくっ付いてしまうと、とりもちからセミを取る時に、ハネが取れたり、或いは取れないまでも、ハネにべったりと「とりもち」がくっ付いたままになってしまうので、あまり「よい採集方法」ではなく、それゆえ、「昆虫採集」などでは、あみで捕るのが最適ということになるのだろう。また、着ている服にべったりとくっ付いてしまうと、やっかいであり、親に小言を言われながらも、よくベンジンなどで落としてもらったものであるが、また、頭の髪の毛などにべったりとくっ付いた時などは、最悪であり、それを無理やり取ろうとすれば、非常に痛く、また、髪の毛なども一緒にどつと抜けたりもし、また、髪を何度洗ってもなかなか完全には取れず、いつまで経っても、髪の毛にべとべとした感じが残ったりしたものである。そのようなことをも含めて、子供の頃に、そのような「とりもち」を使って、「セミ捕り」などをしたという経験や思い出を持つ人たちも、意外に数多くいるのではないだろうか。

九、トンボ

また、野山や田んぼ或いは水辺には多種多様な『トンボ』がいます。例えば、シオカラトンボやオニヤンマ、カワトンボとチョウトンボ、また、ハグロトンボやギンヤンマ、イトトンボやムカシトンボ、そして、赤トンボ（それはナツアカネやアキアカネ或いはミヤマアカネ）などが、春から秋にかけて、様々な場所で見られるようになるかと思う。そして、身近で見つけたトンボをあみで捕まえたり、或いは止まっているトンボを手で捕まえる時には、なるべく真正面から手の指をゆっくりと回しながら近づいて、ハネのところを挟んで捕まえたりするものである。一方、トンボが数多くと飛び交っているような所では、自分の指を一本空高く立てていると、飛んでいるトンボの中の一匹が、その指の先に止まることもあるので、そのようにしてトンボを捕まえたりするのも、非常に楽しいことではないかと思う。そして、よくトンボが池や田んぼ或いは小川などの水面にその尾をつけて、タマゴを産んでいる姿を見かけることがあるが、そのタマゴは、大体一ヶ月以内にふ化して、幼虫（ヤゴ）になり、そして、その幼虫（ヤゴ）は、水の中で生き餌を貪欲に食べて生きていて、その幼虫（ヤゴ）は、トンボの種類によっても違うが、約一〜三年で羽根が生えて、成虫（トンボ）となり、そのトンボが、また、秋の終わり頃には、水面にその尾をつけて、タマゴを産み落としたり、また、植物の組織内にタマゴを産みつけたり、或いは空中から産み落としたりと、その他、実に多彩な方法で産卵を行っているものである。——ちなみに、つながって飛んでいるトンボをよく見かけることがあるが、その場合、前にいるのがオスであり、そして、後ろにいるのがメスである。そして、交尾は、オスが、自分の「尾部付属部」でメスの「頭部（或いは前胸）」をしっかりと掴み、それから、メスが「腹部」を曲げて、自分の「腹端」をオスの胸部の「交尾器」につけるといって、いわゆる「ハート型」の結合によって、まさに「交尾」を行なっているものである。

十、チョウ

一方、『チョウ』も、トンボと同じように、春から秋にかけて、実に多彩な種類のチョウが、色彩鮮やかな姿でひらひらと花から花へと舞い飛びながら、美しい姿を見せてくれているものである。そのチョウを捕る時には、なるべくハネを痛めないように十分に気をつけながら捕まえ、捕まえたチョウは、手持ちの図鑑などでどういふ種類のチョウなのか調べたり、或いは標本などにしてみたり、或いは虫かごに入れて飼ってみたりするのも、意外と楽しいものである。むしろ、チョウというのは、「タマゴ↓幼虫↓さなぎ↓成虫」という段階を経る、最も代表的な昆虫であり、幼虫の頃のケムシやイモムシなどは、多くの人たちに嫌われる存在であるが、やがて成虫のチョウ（や蛾）になった時には、蛾はともかく、チョウは、非常に美しい姿に変身するという典型的な「完全変態」（幼虫の時と成虫になった時との姿が著しく変わるとともに、さなぎ期を持つ種類）の昆虫である、そして、ふだん何気なく見ている時には、それほど綺麗とも思わないものであるが、しかし、そのチョウの「全体の姿から羽根の微妙な色彩や顔の表情」などを、よくよく厳密に観察してみると、この地球上に生息している何百万種類とも知れぬ、ありとあらゆる「昆虫」のなかでも、恐らく、「最も美しく、また、最も神秘的な色彩を持った昆虫」であると言えるのではないかと思う。

十一、バッタ

また、田んぼや草むらなどには、様々な種類の『バッタ』（イナゴ）などもあります。例えば、トノサマバッタやオンブバッタ、また、シヨウリヨウバッタやコバネイナゴ、或いは、河原などにいるカワラバッタ、もちろん、夏の盛りにギース・チョンと鳴く、キリギリス、その他、もう色々なバッタやキリギリス類がいるかと思う。

そして、トノサマバッタは、日本中に広く分布している最も代表的なバッタであり、頭部は、立て形の卵型であり、眼は、複眼で草を食べて生きている昼行性の昆虫である。また、オンブバッタは、よく大きなメスのバッタの上に、小さなオスのバッタが乗っかっている姿が、いかにも「おんぶ」をしているように見えるので、そのような名前になっているのだろう。また、シヨウリヨウバッタは、日本のバッタの中では一番大きいバッタであり、その頭部の特徴は、細長く突き出ているバッタであるが、オスは、飛ぶ時に前翅をこすって、キチキチキチという音を出すのだそうである。

ところで、オンブバッタとシヨウリヨウバッタの違いであるが、オンブバッタのメスは（約四・二センチ）、シヨウリヨウバッタのメスは（約八・九センチ）、そして、オスは、それぞれのメスの「約半分」ぐらいの大きさであり、その形状（姿・形）は似ていても、その大きさが二倍も違うものであり、それゆえ、すぐにも見分けは付くものである。

また、アメリカや南アフリカなどで、よくバッタが異常発生をして、空が真っ暗になるほどの大群で飛び回り、農作物などを食い荒らして大きな被害を出したということが、よくテレビなどで報道されたりするが、その「バッタ」は、日本にいる「単独相のトノサマバッタ」とは違って、群れて移動する「群集相のトノサマバッタ」であるそうである。ま

た、日本で稲を食い荒らすバッタ（イナゴ）としては、主にコバネイナゴその他がいるかと思うが、秋になると、よく草むらや田んぼにいる「イナゴ」などを数多く捕まえては、それを「佃煮」などにして食べたたりした人も、非常に数多くいるのではないかと思う。

*

*

ところで、動物学上、「直翅目」（バッタ目）の分類というのは、大きく「バッタ亜科」とキリギリス亜科」のこの「二つ」に分類されている。そして、「バッタ亜科」には、例えば、「……バッタ科、イナゴ科、オンブバッタ科、その他」があり、例えば、「バッタ科」には、「……トノサマバッタ、シヨウリヨウバッタ、クルマバッタ、イボバッタ、カワラバッタ、その他」などがある。また、「イナゴ科」には、「……コバネイナゴ、ハネナガイナゴ、ツチイナゴ、その他」などがある。——一方、「キリギリス亜科」には、「……コオロギ上科、カマドウマ上科、キリギリス上科、その他」があり、例えば、「コオロギ上科」には、「……エンマコオロギ、ミツカドコオロギ、オカメコオロギ類、クサヒバリ、マダラスズ、シバズズ、スズムシ、マツムシ、アオマツムシ、カントタン、その他」などがある。また、「カマドウマ上科」には、「……カマドウマ、マダラカマドウマ、その他」などがある。そして、「キリギリス上科」には、「……キリギリス、ヒメギス、ヤブキリ類、クサキリ、カヤキリ、クビキリギス、ササキリ、ウマオイ類、ツユムシ、クツワムシ、その他」などがあるということである。

十二、秋の虫

また、秋ともなれば、実に多種多様な虫たちが美しい音色で秋の夜長を鳴き通すものである。例えば、草かげでコロコロコロリーと鳴くエンマコオロギを初めとして、マツムシは、チンチロリンと鳴き、また、クツワムシは、ガチャガチャと鳴き、そして、スズムシは、リーンリーンという鈴を鳴らしたような美しい音色で鳴くことになる。その中でも、特にスズムシなどは、飼育箱などに入れて飼ってみるのも楽しいことであり、エサとしては、ナスやキュウリ或いは煮干しなどを与えたり、また、霧吹きなどで飼育箱の中の土に湿り気を与えておけば、夜ごとスズムシの美しい音色で鳴く姿などを間近に見ることができるとともに、土の中に産みつけたスズムシのタマゴを大事に冬越しさせれば、翌年、幼虫から何度も（六、七回）脱皮して、成虫になっていく様子も観察でき、また、自分の育てた鈴虫の鳴き声を聴くのも、一層楽しいことではないかと思う。

ところで、鳴くのは、雄のスズムシであり、そのリーンリーンという美しい鳴き声で、雌のスズムシを誘っているわけである。そして、そのスズムシの「発音」方法は、正確には「右翅の裏のやすり部と左翅の表のこすり部をこすり合わせながら出している」のだそうであるが、実際に鈴虫の鳴く姿を外から観察してみると、スズムシは、羽根を大きく立てて、その羽根の部分を無限に震動させながら、音を出しているという感じに見えるものである。それは、秋の夜長を鳴き通すカントタンなども、同じ方法であるとともに、スズムシは、明るいところよりは、暗いところを好み、そして、その暗がりの中で、リーンリーンと鈴を鳴らしたような美しい音色で、秋の夜長を鳴き通すものであり、非常に古い昔から親しまれていて、しかも、江戸時代の「元禄年間」からは、スズムシの飼育が始まり、店で売られるようになったそうであるが、今日でも、スズムシの愛好者は、非常に数多

くいるのではないかと思う。

ちなみに、「コオロギ類」(コオロギ上科)というのは、日本では「九科」に分かれていて、それは、「……コオロギ科、クサヒバリ科、アリヅカコオロギ科、カネタタキ科、クマスズムシ科、カンタン科、スズムシ科、マツムシ科、ケラ科」という分類である。そして、鳴く虫として親しまれているのが、まさに「……スズムシ、カンタン、マツムシ、カネタタキ、クサヒバリ、その他」ということになるのだろう。

十三、トカゲ

また、庭や石の上などにスルスルと現あわれては、素早い動きで逃げていくトカゲを見かけることもあるかと思うが、そのような逃げ足の速いトカゲを捕つかまえる時には、手で直接追って捕つかまえようとしても、逃げられてしまうことが多く、最初は、何か棒か足などで素早く身体を抑えつけてから、首の部分をゆっくりと指で挟はさんで捕つかまえた方が早いのである。また、トカゲをよく見かける場所の所に穴を掘って「空き缶」などを埋め、その「空き缶」にミミズなどの餌を入れて誘い込む、いわゆる「落とし穴」のようにして捕つからえるという方法もあるかと思う。もちろん、とらえ方は、どのような方法でもよく、また、捕つかまえようとすると、しつ尾だけ切って逃げられてしまうことも非常に多いわけである。しかも子供たちは、その切れたしつ尾が、ひとりでに勝手に生き生きと動き回っているのを見たり、さわったりしながら、結構楽しんでいっているものである。

また、トカゲは、もちろん、爬虫類であるが、そのトカゲのタマゴを飼育箱などで育ててみても、意外に面白いかと思う。というのも、そのトカゲのタマゴから小さなトカゲが、殻を破って出て来る姿すがたは、まさに子供たちの大好きなあの中生代の巨大な恐竜の、そのタマゴから、恐竜の赤ちゃんが誕生する様子と、基本的にはそれほど変わらないだろうと思うからである。それゆえ、湿った所の落ち葉の下などにあるトカゲの白いタマゴを、捜し出してみるのも、楽しいことかも知れない。もちろん、恐竜のタマゴは、トカゲのタマゴなどとは比較にならないほど大きなものであるが、それにしても、あれほど巨大な恐竜が、タマゴから生まれていたというのは、何か不思議な気がしないでもないものである。

十四、アリ

また、地面にうろうろしている『アリ』を観察するのも楽しいことであり、巣のところを出たり、入ったりと忙しく動き回っているアリの姿すがたをじっとすわり込んで見入ったり、また、遠くからエサを運んで来る様子をながめていても、結構飽きないものである。また、アリを手のひらの上に乗せて観察したり、また、大きめの水そうの中に砂を入れてア리를飼い、アリがどういふふう穴を掘って、アリの巣をつくるのかを観察したりするのも非常に楽しいものである。また、砂場などでア리를捕つかまえては、それを砂山の斜面などにおいて歩かせたり、また、アリ地獄などを作って、その中にアリを入れて様子を観察することもできるかと思う。——ところで、そのアリの「生態」であるが、例えば、クロオオアリの場合は、初夏の六月ごろ、羽の生えたアリたちが一斉に巣から飛び立ち、その「結婚飛行」をしながら空中で交尾をし、その後、雄のアリたちは、すべて死に絶え、一方、交

尾した雌のアリだけが、羽を落として「女王アリ」となり、適した場所を見つけては、その「土の中」でタマゴを生むことになる。そして、最初は、女王アリだけでタマゴを産み育て、やがて、そのタマゴは、「幼虫↓さなぎ、そして、働きアリ」となっていく。その後には、その働きアリが地上に出て、せっせとエサを運んだり、敵と戦ったり、或いは土の中では幼虫やさなぎの世話や女王アリの世話などをするにもなるわけである。一方、女王アリは、もっぱら産卵に専念することになるかと思う。そして、巢の中のアリたちは、夏の間に使って運び集めたエサなどを食べながら、冬を越すことになり、翌年、四月ごろ、再び、地上に出て来るということである。

十五、カタツムリ

また、雨の降った後などには、よく木の枝や葉っぱの上などにカタツムリが、ゆつくりと動いているのを見かけたりするものであるが、その「カタツムリ」の動きをじつと観察してみたり、また、家に持ち帰って、飼育箱で飼ってみても楽しめるかと思う。そして、そのカタツムリで面白いと思うのは、カタツムリには雄雌の区別がなく、すべて「雌雄同体」(つまり雄でもあり雌でもある)というところである。とは言え、もちろん、一匹だけではタマゴを生むことはできず、二匹のカタツムリがいて、初めてタマゴを生むことになるが、その二匹のカタツムリが、それぞれ約二十個から三十個ぐらいの産卵を土の中にするのだそうである。そして、夏の乾燥期には、カタツムリは、殻の口のところに薄い膜を張って、夏眠をするのだそうである。そして、もしカタツムリが殻の中に閉じ籠もって、夏眠をしているようならば、そのカタツムリの殻の口のところに水をつけてやると、やがて殻の中から頭を出して動き始めるのだそうである。ちなみに、ナメクジは、カタツムリと同じ雌雄同体の「巻き貝」の仲間であるが、その「殻」を捨てて生きているのが、まさにナメクジであり、一方、カタツムリは、十一月から四月頃まで冬眠をするのだそうである。また、雨の時期には、カタツムリだけではなく、アマガエルなども葉っぱの上になんか乗っかっていて、それを捕まえようとすると、よく小便などをひっかけて逃げようとするところを、素早く手で追いかけて捕まえたりした経験や思い出などは、多くの人たちにあるのではないかと思う。

十六、テントウムシ

一方、晴れた日には、葉っぱの上に天とう虫がいるのを見かけることも多いかと思う。そして、その天とう虫を捕まえては、手のひらに乗せてながめてみたり、また、手を立てると、天とう虫は、指を登って、指先の天っぺんから空中に飛んでいくので、その様子をみて楽しむこともできるわけである。——ところで、その天とう虫の習性で面白いのは、もちろん、上へ上へと登っていくというのが一つであるが、それに加えて、もう一つは、天とう虫は、物の「端」に沿って歩くという習性があり、それゆえ、例えば、コップの中に天とう虫を入れると、その天とう虫は、ストローなどを伝わって、すぐに上のほうへと登って行き、そして、そのコップの口のところまで来ると、今度は、そのコップの口に沿って歩いて行くが、どこまで行っても先端がないので、天とう虫は、飛び立つことができ

ず、何度でもコップの口をぐるぐると回り続けることになるわけである。それは、なぜかと言えば、それは、天とう虫というのは、それが何であれ、とにかく上へ上へと登っている、そして、まさに「前あしが何も触れない状態になった時に、初めて羽根を拡げて飛び立つことができる」という習性があるからである。それゆえ、例えば、登っている棒を逆さまにすると、天とう虫は、何度でもそこで向きを変えて、また、上の方へと登っていき、そして、先端まで登り切ったところで、初めて羽根を広げて飛び立つことができるということになるわけだ。そのような「変化」を与えながら、様々な形をした物の上に天とう虫をおき、その天とう虫がどういいう行動をするかをあれこれ「実験（観察）」してみても、非常に面白いかと思う、ちなみに、天とう虫の大好物は、アブラムシであるが、アリは、そのアブラムシのお尻から出す甘い汁（甘露）をもらっているので、天とう虫が来ると、アリは、天とう虫を追い払って、アブラムシを守ってやるのだそうである。

十七、コウモリ

また、子供の頃、夕暮れ時になると、暗い夜空にコウモリなどが飛び交ったりしたものであるが、そのような時には、何か「物干し竿」のような長い棒を持って来て、コウモリを追いかけて振りまわしていると、時にはコウモリがそれにぶつかって、落ちて来るようなこともあり、そのような方法でコウモリを捕まえたことがありました。しかし、やはりコウモリは、どこか気持ち悪い感じがして、手に取ってじっくりと見てみようという気持ちにはなれず、すぐに逃がしてしまったものである。——とところで、そのコウモリは、人間には聴き取れないような「超音波」を出して、何か「獲物や障害物」などに当たってはね返って来るのを、極めて敏感に聴き取っているので、真っ暗な中でも自由自在に飛び回ることができるのだそうである。また、コウモリは、夕方から活発に活動を始めて、夜の間は、獲物を捕ったり、休んだり、そして、太陽が昇る前に、すみかに帰って来て、休むという典型的な「夜行性の生活」を行なっているということである。

また、コウモリは、なぜ逆さまにぶら下がっているのかは、学問上でも意外と難しい問題となっているが、しかし、一般的には、コウモリという生き物は、いわゆる「足の発達」よりも、むしろ「翼の発達」の方を最優先させたということである。それは、例えば、アザラシ、オットセイ、アシカ、トド、そして、ペンギン、その他なども、いわゆる「足の発達」よりも、むしろ海中での「自由自在の動き」の方を最優先させたということである。それは、一体、なぜかと問えば、それは、まさに海中を自由自在に動き回れる「身体」を最優先で発達させることによつてこそ、確実に「獲物」を捕らえることができ得るからであり、歩くことよりもエサを確実に得る方を選んだということである。また、コウモリの場合、天井にぶら下がっていれば、フクロウ、鷹、ヘビ、その他などの天敵などからも身を守ることができ、また、すぐに飛び立つこともでき得る。その他、そのような理由から、コウモリにとつては、むしろ都合のよい姿勢ということになるのだろうか、むしろ、まだまだ研究の余地は残されているということである。また、脚のかき爪なども、ぶら下がるのに都合がよいように非常に発達しているものである。もちろん、コウモリは、いわゆる「哺乳類」であるが、冬には「冬眠」をするものも多く、秋に「交尾」をし、初夏には子供がふつう「一子」生まれるということである。ただ、今日、都会でコウモリを見かける

ということ自体、もうあまりないのかも知れない。

十八、ヘビ

また、子供たちは、山道や竹やぶ或いは草むらなどにヘビがいるのを見つれたりすると、ふつう非常にびっくりして、一瞬、足もすくみ、恐る恐るその場から逃げ出しても、また、身近にヘビがいるような気がして、まわりを見回したり、或いは後ろにヘビがいるなどと言つて、脅かしたりするものであるが、また、或る時には、ヘビに出つくわした時にも、逃げ出さずに、みんなで棒などで叩いて捕まえたりして、子供たちは、そのヘビがどうだこうだとお互い騒ぎ合ったりしながら、あれこれ大騒ぎになったりすることもあるかと思う。もちろん、ヘビが大好きだという人は、非常に少なく、ヘビという言葉聞いただけでも、気持ちが悪くなるような人の方が、遙かに多いかと思うが、子供の頃に、何か獲物を飲み込んで胴体のところが大きく膨れているヘビを見たことがあり、そのヘビを大人の人たちと一緒にビクビクしながら棒などで叩いて捕まえ、そのヘビの膨れた胴体の部分に何が入っているのか見たことがあったが、その時には表面がどろどろに溶けて白くなつたカエルがまるごと出てきて、何日か気持ちの悪い思いをしたものである。それはともかく、ヘビの「耳」は、ほとんど退化していて、音を聞くことはできないが、しかし、体に伝わって来る震動に対しては、極めて敏感であり、また、「目」は、近場ではよく見え、動くものに敏感に反応して、時に攻撃するという習性があるわけである。また、先端が二又に分かれている長い舌を、ヘビがべろべろさせているのは、なぜかと言えば、それは、その「二又の舌」から空気中の「においの粒子」を取り入れては、においを感じる器官へと運び込んでいるので、「におい」に対しては、極めて敏感であり、例えば、ネズミ、カエル、鳥のひな、タマゴ、その他などを好んで食べてはいるが、逆に「味覚」はないそうである。そして、冬は、十月頃から翌年の三月頃まで、冬眠をすることになるかと思う。

十九、ハチ

また、アシナガバチは、よく軒下や板べいなどに巣を作る習性を持つものだが、最初は、女王バチだけで巣を作り始め、そこにタマゴを産みつけます。そして、そのタマゴは、幼虫からさなぎ時代を経て、やがて「働きバチ」となり、その「働きバチ」が女王バチを助けて、活発に巣を作ったり、幼虫の食べ物を取って来ては、それを肉だんごなどにして与えたりするものである。——一方、子供の頃、長い棒などを持って来ては、そのハチの巣を突いて落とそうとしたりしたのだが、その時にハチに追い回されて、声を上げて逃げ回っては、家の中に逃げ込んだりすると、「……そんなあぶないことは、やめなさい！」などと、親に怒られたりしたものである。また、日本で一番大きなスズメバチなどには間違つても手を出さないようにしないと、もし面白半分にはスズメバチなどを刺激するようなことをしたら、それこそスズメバチの大群に追い回された挙げ句に、命さえ落としかねない危険性も極めて高く、それゆえ、ハチには絶対に手を出さないことが、いちばんよいことになるのだろう。また、大人のの中には、「……これは、栄養があるんだから」などと言つて、ハチの巣の中にいる「ハチの子」などを、生のまま食べてしまう人も、意外に

数多くいるのではないかと思う。それはともかく、秋になると、巣の中にも雄バチと雌バチとが現われては、巣から飛び立って交尾をし、そして、雄バチは、みんな死に絶え、交尾をした雌バチだけが生き残って、冬を越し、翌年の春には、その「女王バチ」だけで巣を作り始めるが、そのような「生態」は、前述の「アリ」と基本的には非常によく似たところがあるということである。

二十、クモ

また、『クモ』なども実にいろいろな場所で見られるものである。例えば、古い電灯にクモの巣が張ってあったり、軒先などにもクモの巣があり、また、木の枝や葉っぱなどにもクモの巣が張られている場合も多く、また、家の中では天井裏や床下などにクモの巣が多く見られ、また、トレイの片隅などにもよくクモの巣が張ってあり、その他、空き家や物置にもクモの巣が張られていることが多いかと思う。

ところで、体から糸を出して網を張るクモは、その網にひっかかった虫などを毒液で弱らせ、そして、その虫をそのまま食べるのではなく、また、体液を吸うのでもなく、口のところまで「たんぱく質」を溶かし、それをポンプ式の胃で吸い込むのだそうである。また、クモが張る網は、本来、虫を捕るためのものであり、それゆえ、タマゴを産み育てるための「巣」ではないが、子供たちは、恐る恐るクモを何か棒などで挟んで捕まえては、その捕まえたクモがどこからどのように糸を出すのかを確かめて見たり、また、張り巡らされたクモの巣に何か虫などをそこに引っかけて、クモがどういふふうにいるかに近づき、そして、その虫を食べるのかを観察しても楽しめるかと思う。

また、地方によっては、子供たちはそれぞれ自慢のクモなどを持ち寄っては、それを棒の上でクモとクモとを闘わせて、まさに「勝ち抜き」で遊び合うという場合もあるが、しかし、一般に、クモが好きだという人は少なく、特に女の子などからは、ほとんど嫌われていて、突然、目の前にクモが現われたりすれば、もうキヤーなどと大声を上げて逃げ出したりするものである。——とところで、鹿児島県始良市加治木町には約四〇〇年も続いた「伝統行事」（「くも合戦」というのがあり、それは、子供も大人もそれぞれ自慢のメスの「コガネグモ」を持ち寄っては、棒の上での「クモ同士の対戦」が激しく繰り広げられることになるが、その「勝負」は、例えば、相手のクモにかみついたり、また、糸をからめたり、あるいは、相手を振り落とした方が「勝ち」になるといふものである。

ところで、その「クモ」は、網を張るクモと網を張らないクモとに大別され、そして、ふつうクモはお尻（腹部）から糸を出して網を張ることになるが、ジグモのように土の中で生活をしているクモもいるというように、多彩な生態パターンがあって、一概には説明できないものである。しかし、一般にタマゴからふ化した数多くの子グモたちは、二、三日一緒に暮らしたあと、風のあまりない日に、空中に糸を出しながら「空中を遊泳」して巣から飛び立ち、その後は、それぞれの場所で、排他的で「孤独な生活」を送ることになるのだそうである。

二一、カマキリ

また、『カマキリ』は、とげの付いたカマのような前脚で拝むような恰好をするので、地方によっては、よく「おがみ虫」などと呼ばれたりしているものである。そして、ふうカマキリは、草むらの中に棲んでいて、生きた虫などを待ち伏せをして捕え、それをあごでかみ砕いて食べているものである。もちろん、子供たちにとっては、とかく敬遠しがちな生き物であるが、しかし、子供のなかには、その「カマキリ」を平気な顔で捕まえては、友だちなどにそれを突然見せて驚かしたり、また、女の子などがキヤーキヤーと悲鳴を上げて逃げまわる様子などを見て、楽しんでいる場合もあるのだろう。――さて、その「カマキリ」の習性であるが、カマキリは、肉食性が非常に強く、それゆえ、「動く小昆虫」なら、何でもエサだと思つて食べてしまう傾向があり、もしカマキリと一緒に飼えば、弱いカマキリは、強いカマキリに食べられてしまうことが多いわけである。また、交尾中にメスのカマキリがオスのカマキリを食べてしまうというのも、カマキリは、動く「生き物」（小動物）なら何でもエサだと思つてしまうからである。もちろん、オスは、メスにいつも食べられているのではなく、そういう時もあるということである。

二二、潮干狩り

また、海に『干潮狩り』に出かけることも、子供たちにとっては、非常に楽しいことであり、それは、手にくま手や網ぶくろなどを持つて、潮の引いた海原にゾウリを履いて入つて行き、くま手であちこちを掘り起こしては、アサリやハマグリなど取つたり、また、カニやヤドカリなどを捕まえたり、或いはきれいな貝殻などを拾い集めては、家に持ち帰つたりするものである。それは、毎年、春になると、家族連れの「干潮狩り」の人たちで大変な賑わいになるものであるが、やはり子供の頃に、家族で出かけたことがありました。その時に、最初のうちは、大勢の人たちがいるところでアサリやハマグリを取つていたわけであるが、だんだんとより「大きなハマグリ」を取ろうとして、知らぬ間に沖へ沖へとどんどん進んで行つて、そこには数人の人たちがいる程度でしたが、そこで貝を取ることになり夢中になっていたわけである。そして、それは、午後二時頃だったかと思うが、最初のうちは、もちろん、だんだんと潮は、満ちては来ていたのだろうが、まだ、大丈夫だろうと思つて、沖を背にしながら食欲に貝を取つていたわけである。そして、やがて、もう帰ろうかあとと思つて、ふと沖のほうを振り返つて見た時に、何と海の潮がもう目の前（約八十メートル先）まで盛り上がったような感じて満ちて来ていたのには、肝もつぶれんばかりにビックリして、もう逃げるように走つて戻つて来たことがあつたが、あれは、子供心に非常に怖い経験でした、また、どこか浜辺に旅行に行った時に、その海辺で朝早く「地引き網」などを、みんなで大声を上げて引き上げては、網の中の様々な「海の幸」をわいわいがやがやと騒ぎ合ひながら、この魚は、何だかんだとお互いに言い合ひながら、ピチピチとはねる魚を手で捕まえては、楽しい時を過ごすこともできるのだろう……。

二三、水生昆虫

また、小川や田んぼ或いは池や沼などの水草のあるところを、あみで何度か掬つてみると、水中に棲んでいるゲンゴロウやミズスマシ、タガメやガムシ、ミズカマキリやタイコ

ウチ、或いは、コオヒムシやマツモムシ、その他などが捕れたりすることもあり、それを家に持ち帰っては、家の中にある水そうなどに入れて飼って観察したりしても、楽しめるかと思う。また、ゲンゴロウやガムシなどは、羽根を持つているので、夜は、明るい外灯などにも飛んで来ることあり、昔は、そのような時に捕まえることもできたかと思う。

一方、水の中では、ゲンゴロウは、時々、お尻の「呼吸管」を水面に出して空気を取り入れ、その空気を羽の下に溜めては、それを吸って呼吸をし、また、ガムシも、時々、顔と胸を水面に出して空気を取り入れ、その空気を腹の下の毛の間に溜めては、それを吸って呼吸をしています。さらに、タイコウチも、いつもお尻から長い「管（呼吸管）」を水面上に出した状態で、呼吸をしているわけである。また、タガメやタイコウチなどは、捕まえた獲物（魚や水中の昆虫など）の体内に「差し口」を差して、その体内の「体液」を吸っているものであるが、マツモムシも、逆さまの状態ではエサを捕まえては、差し口で体液を吸っているものである。一方、ミズスマシは、くるくると忙しく回りながら、その波の戻り具合で獲物を探して捕まえ、また、アメンボは、水面に落ちてきた小さな虫などを捕食しているとともに、水面下にタマゴを産み、また、ゲンゴロウは、生きたものでも死んだものでも食べるが、ガムシの幼虫は、肉食、成虫は、草を食べて生活をしているのだそうである。もちろん、一般的にはあまり好かれるような生き物ではないが、それでも子供たちの間では、意外なほど高い人気を集めている「水生昆虫」になるかと思う。

二四、ハサミムシ

また、落ち葉や石の下などの暗くて湿ったところには、後方にハサミを持ったハサミムシや、また、体に触れるとすぐに丸くなってしまうダンゴムシなどをよく見つけたりするものである。もちろん、ムカデやヤスデ、時にはゲジゲジなどもそのような感じのところで見かけることがあるかと思う。そして、例えば、ハサミムシは、棒などでその後方のハサミの所を軽く触れてみると、必ず怒ったようにハサミを高くせり上げたり、また、ハサミムシの場合は、意外にも自分のタマゴの世話をしているとともに、やがて死んだ後は、その「自分の屍体」が生まれて来る子供たちのエサになったりするものである。また、ダンゴムシの体に触れると、すぐにくるくると丸まって動かなくなるが、やがて丸まった体を伸ばしては、くるつと体を起こして歩き始めるものであり、一方、よく似たワラジムシは、逆に、体に触れても丸まらないのだそうである。また、ムカデとヤスデとの「違い」であるが、ムカデには各体節に「一對（二本）」の足を持つが、ヤスデの場合には、第五体節から、各体節には「二対（四本）」の足を持つているので、それゆえ、ヤスデの方が遙かに数多くの足を持つているものである。また、ゲジゲジは、ふつう屋根裏や洞窟その他などにいるそうであるが、その体には非常に「長い脚」が数多くある虫で、時々、風呂場のタイルや壁などを歩いているのを見かけたりすることもあるが、それを叩いて捕らえようとすると、素早く動いて逃げて行ってしまいうものである。

二五、ネズミとネコ

また、家の中にはあまりありがたくない動物や虫などがいるわけだが、例えば、天井裏

などを駆け回っているネズミや台所に出没するゴキブリ、或いは家などを滅ぼすシロアリ、また、陽気がよくなると、ハエやカ、その他の虫などが、家の中に飛んで来たりするものであるが、そのような時には、様々な方法で、それらを駆除することになるかと思う。

例えば、ネズミの想い出としては、子供の頃、ネズミを保健所に持って行くと、一匹十円ぐらいで引き取るというのがありました。また、はり金でできた「ネズミ捕り」にパンなどのエサを付けておくと、よく大きなネズミが入っていたものである。また、家で飼っていたネコが、非常にネズミ捕りが得意で、ネズミを捕ると、そのネズミをよく座敷にまで持って来ては、「ネズミを捕ったからほめてくれ!」という感じで、ニャーニャーと大きな声で鳴き騒ぐので、座敷の上まで持って来たのを叱りながらも、「よく獲った!」という感じでほめてやると、その親ネコは、ネズミを口にくわえて縁の下にまで持って行き、それを生まれてそれなりに大きくなった子ネコに渡していました。そして、それを見ていて非常に驚いたことは、その捕らえたネズミが、まだ生きていたということである。それは、親ネコがわざわざとどめを刺さずにネズミを捕らえたということである。その弱つてはいるが、まだ生きているネズミを子ネコに渡し、その子ネコは、そのネズミに爪を立てながら遊んでいるわけである。そして、その子ネコから逃げ出そうとすると、親ネコが捕まえて、また、子ネコのところまで口にくわえて持ってきて渡すのです。つまり、親ネコは、子ネコにネズミの「存在」や「捕り方」などを教えているのです。そして、さんざん生きたネズミをもて遊んだ挙げ句に、そのネズミを親子で食べていましたが、それは、子ネコに「ネズミの味」を覚えさせるためでもあるのだろう。また、その親ネコは、ヘビやトカゲ、或いはスズメなども、よく捕ってきたネコであり、年老いるまで生きていましたが、何時しかいなくなってしまうました。恐らく、死ぬ時には飼い主にその姿を見せずに、どこかに行つて死ぬという話があるが、そういう感じのする賢いネコでした。

というのも、そのネコは、雷のするもの凄しい雨の日に、夕方ごろ、びしょ濡れの状態で、台所のところに迷い込んで来た非常に痩せた「のらネコ」だったのである。そして、最初のうちは、エサをやると家に居つくからということ、エサをやらないうことです。しかし、あまりニャーニャーと弱々しく頻繁に鳴くので、仕方がないということで、夜十時頃に残りご飯を与えてから、家に居つくようになったというネコなのである。そして、そのネコがスズメを捕る様子を見たことがあるが、それが実に巧みでうまいのです。それは、最初、草陰にじっと身を隠して、相手の様子を見ながら、身を低くして忍び足で少し近づいては止まり、また、近づいて行き、そして、至近距離から一気にそのスズメが飛び立つ瞬間に襲いかかって捕らえていました。また、ネズミがよく出る場所があつて、そこに何時間もずっと座つたままネズミが出て来るのを忍耐強く持っているのも、よく見かけたりしたものである。今から思うと、恐らく、そういうふうにして生きて来た「野生のネコ」だったのかも知れない。また、そのネコに子ネコが三匹生まれたことがあつたが、家にネコは、一匹いればよいということで、その子ネコ三匹とも近所の人にそれぞれ連れてしまったことがあつたのです。一匹は、真っ白なネコで、一匹は、黒っぽいネコ、そして、もう一匹は、茶色の三毛猫でしたが、そうしたら、その親ネコは、子ネコが三匹ともいらないということ、ほとんど半狂乱のような状態になり、やがて何か鼻水やよだれなどをたらしたり、また、腰が抜けたようになって、ふらふらと歩いてはバタと倒れるような感じになってしまったのです。それを見ていて、あまりにも可哀想だということで、茶色の三毛

猫だけを親ネコに返してやったら、やがて正常の状態に戻ったが、それが前述の子ネコ（親からネズミをもらっていた子ネコ）ということになるわけである。

また、冬になると、当時は、座敷の中央にフトン^{かぶ}を被せた「掘りごたつ」（練炭^{れんたん}コンロ^{こんろ}で暖める）というのがあり、ネコも寒いので、よくその「掘りごたつ」の中に知らぬ間に潜り込んで下で寝ている時があり、テレビなどを観ていると、ふと足に何かぶつかるものがあり、「……あつ、また、ネコが潜り込んでいる」というような感じで、中にいるネコをひっぱり出すと、そのネコは、まさに「一酸化炭素中毒」にかかったようにぐったりしている状態で、「……もう、しょうがないなあ」という感じで、玄関先のコンクリートの上にはばらく横に寝かせておくと、やがて、自ら起き出して歩き始めるというのがありました。また、冬の寒い夜など、フトンの中で寝ていると、耳許でゴロンゴロンと鳴いていながら、まさに「フトンの中に入れて」という感じで、ニャーニャーと甘えて鳴いている時があり、だめだと手で追い払うと、また、のどをゴロンゴロンと鳴らしながら、耳許でニャーニャーと弱く執拗に鳴くので、仕方なく「フトンの中」に入れてやると、今度は、ネコは、人の横腹を枕にして、まるで「ネコいびき」のようにゴロンゴロンと鳴らしながら寝ていたものでした。さらに、一度、またたびをネコに与えたことがありましたが、その時の、ネコの「乱れ様」は半端ではなく、身体をひっくり返して、何度もその身体を悩ましげに「床（や畳）」などに擦りつけながら身体をくねらせ、顔は恍惚の表情をして、よだれまで垂らして身をくねらしているのを見た時には、これほどまでに豹変するものかと、子供心にも非常に驚いたりしたものでした。

二六、ゴキブリと蚊

また、ゴキブリは、約三億年も前の古生代「デボン紀」の頃から、この地球上に現われ、そして、次の「石炭紀」には非常に繁栄したそうである。ところで、その習性は、明かりを嫌い、暗いところを好んで歩きまわり、悪臭のある油を体の表面に分泌していて、時にはハネを拡げて飛んだりもします。そして、そのゴキブリは、家庭の主婦や若い女性たちからは、非常に嫌われていて、台所などにその姿を現わすと、女性たちはもうキヤーなどと言いながら大騒ぎしたり、また、履いているスリッパなどを手に持って、思いつきり叩いたりしているものである。もちろん、一般的にはゴキブリ捕りなどを仕掛けたり、また、殺虫剤などで駆除していることになるのだろう。——一方、蚊であるが、メスの蚊が、なぜ人間その他の動物の「血」を吸うのかと言え、それは、血を吸わないと、「タマゴ」を産むことができないからである。そして、ハエや蚊などの駆除には、昔は、天井から垂らした「リボン」という縦に伸ばして使うべとべとしたハエ取り紙がありました。一般的には、ハエ叩きや蚊取り線香、また、ハエや蚊の殺虫剤などで駆除することになるかと思う。ちなみに、昔は、よく「かや」というものを吊ったものである。そして、中に入る時には蚊と一緒に入らないように、バタバタと何回かかやを上下に勢いよく揺って、中に入ったものである。それでもよく蚊が中に入ってしまつて、明かりを消して寝ていると、耳許でブーンブーンという「蚊の羽音」で何度も起こされ、もういらいらしながら、かやの中にいる蚊を手で叩いて取ったりしたものである。もちろん、今日では、かやを吊るということ自体、もうほとんど経験することもないのだろう。

二七、モグラ

その他、もう色々な動物や虫などを捕まえたり、また、害虫などを駆除しているわけである。例えば、ところどころ土が盛り上がりしている「モグラの巣」を見つけては、その穴の中に水などを流し込んだりして、よく遊んだりしたものであるが、正式にはモグラ捕りなどを仕掛けては、モグラを駆除することになるのだろう。——ところで、そのモグラは、大変な大食漢であり、自分の体重と同じくらいのエサを毎日食べないと死んでしまうほどであり、それゆえ、四六時中、穴の中を動き回っては、ミミズや虫などのエサを探し回っているわけだが、そのモグラは、ふだんは単独で生活をしていて、春の繁殖期には地上にも出て、相手を探しては交尾をし、子供を一く六子ぐらい産むのだそうである。また、モグラは、あちこちに穴を掘っては土を持ち上げ、例えば、芝やその他を枯らすので、特にゴルフ場などでは非常に嫌われてはいるが、しかし、子供たちには非常に人気の高い動物になるのだろう。そして、子供の頃に一度だけモグラが穴の出口で死んでいるのを見たことがあり、その体に触ったことがあったが、その体は、まさにビロード状の柔らかい毛で覆われていて、触ると非常に気持ちよく、手は、グローブのような分厚い白っぽい感じのものでした。ちなみに、モグラの目は、退化して見えないということである。

二八、ウサギ

また、日本の各地には野山にいる野ウサギなどを追って捕まえたという風習がありました。最近では、日本のどの地域でもほとんど行なわれることもないのだろう。それに代わって、今日の子供たちは、小学校にあるウサギ小屋などで好んで「ウサギ」を飼って育てることが非常に多いかと思う。そして、ウサギ小屋担当の子供たちは、毎日、にんじんやキャベツなどの野菜類やパン類また固体飼料（ウサギのエサ）などを与えたり、また、ウサギ小屋をきれいに掃除したりしているものである。——ただ、ウサギは、非常に神経質で、子供が生まれた時などにあまり頻繁にのぞき見たりすると、ウサギの親は、いらいらして、子供を食べてしまうことも多く、この時期には、ウサギ小屋の掃除なども控えるようにしたり、また、ウサギにとって「耳」は、非常に大事な器官であり、ほんのちよつとした物音にも極めて敏感に反応するものであり、それゆえ、そのウサギを撫む時には、大事な「耳」を持つてはいけないのであり、ウサギの腹に手を当てて抱きかかえるようにするものである。そして、ウサギは、その姿も動作（しぐさ）なども非常に可愛らしいものであり、それゆえ、何時の時代の子供たちからも人気の高い動物になるのだろう。

二九、パチンコ

また、子供の頃には、『パチンコ』というものがあつたかと思うが、その「パチンコ」に「小石」（時にはドンダリの実）などを挟んで、よく木に止まっているスズメなどに向かって撃って遊んだりしたものである。その「パチンコ」というのは、Y字型の木の枝にゴムを張ったものであるが、もちろん、近くの駄菓子屋さんなどに行けば、はり金で

きた「パチンコ」がすでに売られていたので、それを買って来ては、それで好んで遊んだ非常に懐かしい「遊び道具」になるかと思う。——例えば、ある程度離れたところに空き缶や空き箱などを置いて、それをパチンコで当てて落としたり、また、近くの水辺や田んぼなどに行った時に、そこでカエルやザリガニなどを見つけたならば、それをパチンコで当てて遊んだりもしたものである。また、電線に止まっているスズメなどに向かってパチンコを撃つたり、或いは木の枝に止まっているスズメを、下からパチンコで撃つたりもしましたが、実際はなかなか思うように当たらなかったものである。

また、夜明け前に、近くの山に鳥かごを持って登り、そして、その鳥かごには「とりもち」などを仕掛けておいて、鳥かごの中の鳥の鳴き声（恐らく「縄張り争い」）などで野鳥が近寄ってきた時に、その「とりもち」にくっ付いたところを捕まえるというのがあります。また、実際は、なかなか捕らえることはできなかったものである。また、いわゆる「かすみ網」などを張って、野鳥を捕まえるというのもあったかと思うが、それは、当ても、もちろん、今日でも、そういうことは、いわゆる「野鳥保護」の立場から全面的に禁止されているものである。

三十、バードウォッチング

そして、今日ではそういうことに代わって、子供たちに非常に人気が高いのが、いわゆる『バードウォッチング』になるかと思う。それは、望遠鏡や鳥図鑑或いはノートなどを持つては、仲間たちとあちこちの場所に出かけて行き、そこで様々な野鳥の「鳴き声や姿・形」などをじかに見たり聴いたりして覚えたり、また、様々な「野鳥の生態」があるがままの状態を観察して楽しんでいっているものである。——さて、この「バードウォッチング」の基礎的な「知識」としては、まず、服装は、長袖、長ズボンで色は落ち着いた色、また、頭には帽子をかぶり、靴は、履き慣れたもの、そして、両手が自由に使えるように背中リックサックを背負い、その中には「弁当や水筒或いは地図や雨具」などを入れておきます。一方、手には首からかけた双眼鏡を持ち、ポケットの多い上着やズボンの中には、ハンドサイズの「図鑑やノート」などを入れておきます。そして、各地で頻繁に催される大小様々な「探鳥会」の集いなどにも積極的に参加をしては、みんなと一緒にある場所に行き、そこで大小多彩な「野鳥」とめぐり会うことになるが、最初のうちは、目に見えている「鳥」が、一体、何という「野鳥」なのか、さっぱり分からないということも、非常に多いかと思う。そのために、その「野鳥」が、一体、何という「野鳥」なのかを識別する一方法として、まず最も基本となる「野鳥」（つまり「ものさし鳥」）をしつかりと覚えることから始めることになるかと思う。例えば、「スズメ、ムクドリ、キジバト、カラス、その他」などの「ものさし鳥」の「大きさ、歩き方、飛び方、鳴き方」などをしつかりと覚えることによって、ほかの野鳥との区別がはつきりとできるようになるわけである。もちろん、実際の方法としては、今、現に見ている「野鳥」の「姿・形、大きさ、鳴き声、歩き方、飛び方、その他」などをよく観察しながら、手持ちの「図鑑」と照らし合わせてみたり、また、その場にいる野鳥をよく知っている人たちからも、それぞれの野鳥の「特徴や見分け方」などを丁寧に教えてもらいながら、その「野鳥」が何という名前の「野鳥」なのかを、一つ一つ具体的に覚えていくことになるかと思う。そして、その時々を観察し

た多彩な野鳥の「特徴や様子或いは感想」などを手持ちの「ノート」などに書き留めたりしながら、各人それぞれが思い思いに「バードウォッチング」を心から楽しんでるものである。そして、そのような「バードウォッチング」を何度も積み重ねていくうちには、自然の中に生息している多種多彩な「野鳥」を見ただけでも、それが何という「野鳥」で、どういう「特徴や生態を持つ野鳥」であるかも分かるようになるとともに、そのようにそれぞれの「野鳥の生態」などがあるがままの状態を観察することによってこそ、初めて、その「野鳥」というものを本当に「知り得た」ということになるのであり、それまでは「本や図鑑」、その他などを通して間接的に知っただけの単なる「知識」に過ぎず、それは、「真に知っている」（直接知）とは、到底言えないものである。もちろん、子供たちは、そういうことなどはあまり意識せずに、みんな一緒に「バードウォッチング」というものを、何だかんだと言い合いながら楽しんで、自然の中で楽しい一日を過ごしたことになるのだろう。

三一、結び

さて、子供たちは、家にイヌやネコ、また、小鳥やハムスター、或いはカメラトカゲ、その他の実に様々な「ペット類」などを飼っている人たちも非常に数多くいるとともに、子供たちは、よく「動物園」などに行つて多種多彩な動物たちを見たりすることも大好きなのである。また、中生代の巨大な「爬虫類」などにも大へんな関心を持っていて、例えば、草食性で首の長いブロンドサウルス、また、背中に剣状の突起を持つステゴサウルス、そして、有名な肉食かつ凶暴で二足で歩くティラノサウルス、その他、一方、大空を飛ぶ巨大なプラテノドンや、また、昔は鳥の祖先と思われていた始祖鳥、そして、海の中に棲息していたアンモナイト、その他、子供たちは、もう大好きであり、それゆえ、「恐竜展」などが開催されれば、その会場は、子供たちでもう大変な賑わいとなるものである。それに加えて、映画やアニメ或いはまたマンガなどに出てくる個性豊かな「怪獣」などにも大変な人気が集まるものである。そのように子供たちにとって、ごく身近にいる実に多種多彩な「昆虫類や魚介類、両生類、爬虫類、鳥類、そして、哺乳類（霊長類）、その他」の生き物を見たり、捕まえたり、或いは観察したりすることは、非常に楽しいことであるとともに、子供たちにとっては、まさに「興味や関心」の尽きない対象でもあるのだろう。

*

*

「参考文献」

- ※底本 「万有百科大辞典」(動物・植物・生活) (「小学館」)
- ※底本 「伝承あそびの教室 I 外遊び」 (「一声社」)
- ※底本 「伝承あそびの教室 2 内遊び」 (「一声社」)
- ※底本 「ウィキペディア・YOU T O B E、その他」 (ウェブ)